

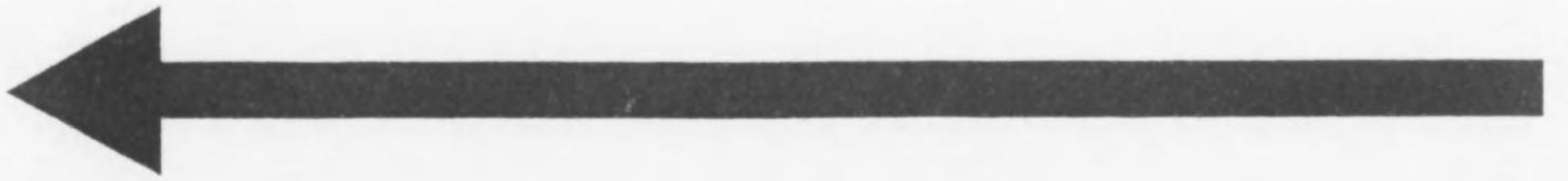
45-5931



1200501259363



始



7 322



沼波 瓊音 編
釐川 他石 校訂

增改
補訂

芭蕉全集

岩波書店刊行



安田氏藏杉風芭蕉像

この幅は、像は芭蕉の全身坐像にて上に蝶夢が芭蕉の小傳を記したる賛あり。芭蕉の顔極めて精細なる筆を用ひてあれば、幅の他の部を省き、顔のあたりを原畫大に撮影せしめたるなり。



安田五郎時貞

昔より、此の地に、大に、
其の、
この、

竹のこや稚時の繪のすさみひ

みつからかき捨たる

繪の反古を見出し

けるに少年の

むかしこひしく

なりて此句を書付

侍るかし

は
せ
を
印

賛畫自蕉芭藏氏野萩

の年後は賛のもの代時年少は繪り通のき書註のこし但

(りたき浮くし新に紙き古字の賛り異く全色墨故のも

懐に動き感に發し、詞の出で、而して章を成し、語の結んで而して律有るもの、これを歌といふ。我邦の歌あるや久し。上古は樸直、其歌や油然と雲起し、憂然と玉鳴す、たゞ真情の流露ありて、未だ巧飾の彫琢あらず、自然に圓成して佳なり。其の拙陋なるものは、蓋し傳はらざる也。萬葉集收むるところの篇什に至つては、或は高華渾厚、洋々峨々甚だ尙ぶべきものあり。或は猶質俚移らざるものあり。或は既に藻繪や、加はるものあり。世情と詩風と相變遷するもの、勢もとより然らざる能はざる也。降つて三代集の時に至つては、文質相當る。亦一時の盛と稱すべし。然れども竟に是吹管彈絃の美音にして、また松風竹雪の幽韻にあらず。三代集の後、人巧愈々加はりて、天籟殆ど稀なり。金葉詞花に至つては、歌たゞ技となれるを見るのみ。新古今集の一たび振ふや、鍛鍊克く渣滓を去り、姿致時に清新なる有り。然れどもこれ猶殘燈の一輝のごとし。終に長夜の永暗に歸す。新古今以後、徳川氏の時に至るまで、豈又道ふに足るものあらんや。其の偶々人の睹

るところとなるものも、亦野燐叢螢のみ。我邦の歌、亦衰へたり。未だ必ずしも亡びずと雖も、殆ど既に亡びたりといふべし。歌の一支に聯歌あり。聯歌の傍出に俳諧聯歌あり。俳諧は滑稽戲謔の義なり。好んでこれを爲す者、宗鑑守武より貞徳に至り宗因に及ぶ。其間風姿數變すと雖も、卑俚の詞、談諧の辭、いたづらに巧を言語文字の末に弄して、笑を一知半解の徒に取るに過ぎず。風雅の旨に於て道ふに足るものある無し。松尾芭蕉是に於て出づ。其の時流に隨つて筆墨に遊ぶに當つてや、爲すところ多く世俗に異なる有る無きなり。然りと雖も其の人となり純粹にして蔽はれず、清澹にして守る有り。乃ち長く狂肆輕薄の風に甘んずるに堪へず。蓋し疑を當時に懷きて別に自ら思ふ所あり、胸中に佛鬱醞釀するもの多年なり。一旦油然として發するあるや、遂に舊窠を脱して、漸く新幟を樹つ。世の所謂正風なるものは是也。今其の作るところを観るに、自家性情の自然に本づきて、環物節物の萬象に酬ひ、矯めず飾らず、俳諧と謂ふと雖も必ずしも戲謔せ

ず、古に泥まず世に阿らず、俗談平話を忌まずして、而もまた鄙野謏陋ならず。其の内や針線甚だ密にして、磨琢至つて精しけれども、功成つて外に發するを見れば、天衣の無縫なるが如く、美玉の玲瓏たるが如し。而して其の具するところの神韵靈氣直ちに人を襲ひて、疾きは電の撃つが如く、徐なるは水の潤すが如く、感動融悟せしめずんば已まざるものあり。嗚呼これ眞の歌といふものにあらずして何ぞや。予嘗て曰く。鎌倉の後、和歌はこれを古を尙ぶに失ひ、貞享の前、俳諧はこれを戲を専らにするに失ふ。芭蕉出て、俗談平話を以て、切實無邪の吟を發す。是れ俳諧の名を藉りて、和歌の事を爲せるものなり。我邦の歌や、芭蕉に至つて復興ると。芭蕉の時、其風を望み化を被つて起つ者十數子、蘭秀菊芳、各皆作家と稱するに足り、流風餘韵、今に至つて猶存す。人の元祿を嘖々する、良に以有りといふべし。猗歟盛んなる哉。唯憾むらくは世の傳ふるところの芭蕉の集、淆訛相承け、魚目或は珠に混じ、馬焉時に鳥と爲る。江湖これを病むこと久し。沼波瓊音子は歌

を愛するの士なり、乃ち其集を取つて勘校すること年を累ね、流に溯り源を窮め、一々據るべきに據り、考ふべきを考へ、積勞して大成し、新刊して世に公にす。芭蕉の爲にすとのみ云はんや。實に我邦の歌の爲にする也。刊成る。思ふところを記して以て贈る。

大正十年六月二十日

露伴道人

本書の編纂に就て

芭蕉全集の編纂を岩波書店より依頼せられたるは昨年七月のことなりき。余は既成各種の芭蕉全集に據らず、所謂地獄探しに、余の手の及ぶ限りの俳書を調べ、芭蕉の作品、芭蕉に關する項を拾ひ、なほ各地に散在する眞蹟物及び流布せざる俳書を調べ、その上にて既成芭蕉全集を參考にする積りにて、この事に着手したるが、鮮滿旅行と、其旅行後の仕事と、殊には今年四月より始めし教師の職とに妨げられて、約束の期日疾くに過ぎ去り、編纂の事甚だ捗行かず、而して恰も讀書界の芭蕉全集を要求する聲大きくなりて、本書の發行をして寧ろ拙速を可として、修補を後日に譲るべく餘儀なくせしめたり。されば本年六月になりて、今まで余の爲し、拾集校合はもとより存すと雖、大體は既成の芭蕉全集中最良なる古學庵佛兮幻窓湖中編の俳諧一葉集を本據として、これに多少の増補、整理を加ふる事に、方法を變へ、學校の暑中休暇となりたる後は、東洋大學の職員室を借り、萩原蘿月氏、川島いし子氏、及び余が家族と共に、日々ここに通ひて、辛うじて休暇中に編成るを得たるなり。

第一、發句集は年代順芭蕉發句集と類題芭蕉發句集とに分つ。前者は、初め蝶夢が、土芳の芭蕉の口授を寫しきと云ふものを伊賀に發見して上梓せし芭蕉

翁發句集、年代順に並べれば、これを底本として、他より増補する事としたるが、芭蕉翁發句集甚だしく亂雑なるものなるより殆ど原順序を残さざるに至れり。句毎に下に書名を記したるは、その句の形の其書に據りたるを示すものにて、順序をも其書に據るを示すに非ず。集に入りたる句は、集出でたる月日の季節以前の季節の句は、他に考證すべき無き限り、假に集出でたる年の作とし、集出でたる月日の季節以後の季節の句は、他に考證すべき無き限り、假に集出でたる年の前年の作とし、集出でたる季節のわからぬ場合は皆假に其年の作としたり。一葉集に、古來芭蕉の句と云傳ふれど確なる出所無きものは、考證之部と云ふに入れたり。その部の句は上欄にこの事を記しおけり。但し余の確なる出所を見つけたるは、上欄に考證の部中のものたるを記さず。

後者は、作句者の便をはかりて、同句の重複を厭はず、類題に並べたるなり。この方には、初案再案等判明せるは、最後案のを挙げ、各案若しくは書による異同の、並べおくべきは、本句の傍に括弧して記しおきたり。前書あり」と記したるは、前書まで重出する類を避けたるにて、類題の方を見て、その前書を見むとせば、索引により年代順の方を探りてこれを見るべくなしたり。註あり」と記したるも、年代順の方に頭註あるを示したるなり。

第二、連句集は、一葉集も年代順に並べてあれど、かの書には、卷不完のものを

各年歴の末に置きたるを、本書には、完不完にかゝはらず、總て年代順に並べたり。

第三、句評集は芭蕉が、自他の句をまとめて評したるものを集めたるものなるが、註をしたるものも、便宜上こゝに收めたり。これも年代順なり。

第四、韻文集は、發句連句外の韻文及び韻文風のものを收めたり。

第五、紀行日記集は、諸紀行文と嵯峨日記とを、年代順に並べたり。

第六、文集は、紀行日記外の文章を、年代順に並べたり。眞偽不明のものは省きたり。

第七、書簡集は、各書簡を、年代順に並べたり。獻立書一紙、書簡ならねどこゝに入れたり。

第八、遺語集は、おほよそ、一葉集に據り、多少の取捨をなせり。順序は年代によらず、かの書にある儘にしたり。又檢索に便なるが爲に各項に題を設けたり。かの書には終りの部に、花屋日記を出だしたれど、花屋日記は實史傳の資料とはし難きものなれば、これには省き、笈日記に記したるものを並べて、最後の病床にての遺語を知らしめたり。

八集すべてにわたりて上欄に記したるは、書の異同、考證的の註その他なり。年代順と云ふ事に可なり勞したれど、何分短日月の事として、十分の安定を得

るに至らず。たゞ、謹みて大方の斧正を乞ふのみ。

炎暑の最中、萩原氏川島氏が東洋大學に通ひて助力せられたる。また同大學幹事郷白巖氏が我等の爲に多大の便宜を與へられたる。ホト、ギス誌上に出だしたる余の廣告に應じて五十嵐竹浪氏、加藤霞村氏の有益なる材料を提供せられたる。伊藤松宇先生の多大の注意を與へられ、且つ藏書を貸與せられたる。高安月郊氏の藏書その他資料を貸與せられたる。太田水穂氏の自家研究の結果を提供せられたる。伊賀上野住田中善助氏、今中仁兵衛氏が藏幅を御見せ下されたる。安田登氏、萩野由之先生が、藏幅の撮影を以て巻頭を飾るを許されたる。幸田露伴先生の序を賜はりたるに對し、編者こゝに謹みて御禮申上ぐ。

大正九年八月廿八日

向ヶ岡彌生町に於て

沼波 瓊音

再版に就て

本書刊行せられて後、諸氏に注意せられて知り、又己れにも氣付きたる誤謬及び足らざる所多し。余は本書全體にわたりての訂正に費すべき時間を、もはや持たざる境遇なる故に、勝峰晋風氏を煩して本書の訂正増補に従事して貰ひたり。その仕事書簡集の半に至りて、故ありて中止せらる。そのうち大正十二年の大震災あり。本書初版本の賣残り、及び其紙型悉く焼失す。幸に余の家災をのがれ、手許にある訂正書入の芭蕉全集無事なるを得たり。今年に至り、太田水穂氏の周旋により、余の書入本以外の訂正は、擔任せらるゝ事に決し、爰に余の書入本の副本を作りて太田氏にわたす。

大正十四年七月九日

第一高等學校圖書館教官閱覽室に於て

沼波 瓊音

しるす

改訂及校正に就て

太田先生がわざわざ三島までお出向きになつて、本書改訂に關する御懇談のあつたのは、大正十四年の御用納めの晩でありました。翌十五年六月の某夜先生の田端のお宅へ参上し、岩波氏にも逢ひ、其翌日は關口芭蕉庵で沼波先生にもおめにかゝりまして、連句集遺語集の二部門の改訂をお引受けする事になりました。お引受けはいたしましたものゝ、淺學魯鈍の上に公私多端のため仕事がかどりませんでした。漸く昨年の七月に至つて、二部門の改訂原稿を太田先生へお送りする事が出来たのであります。

かく手間取りましたわけは、連句集は出来得る限り諸書の異同を調べて頭註を加へる事にいたしますと共に、其卷の完不完にかゝはらず一々其作成順位を推考して編次いたし、遺語集は手の届く限り其出自を探りまして、原本を照合いたしました上、諸書との異同を頭註で示す事にいたしましたので、豫期以上の時間と勞力を費したのであります。

昨年の初冬岩波書店から校正刷を送つて参り、尙太田先生からは迷惑だらうが校正全部を引受けてくれとの御委囑がありましたので、とうとう此煩瑣極まる仕事に當る事になつたのであります。サテ其校正刷を一見いたしまするに、發句集は脱漏重出年次の錯誤等まだ、改訂残りが澤山あるのでありますから、初校の校正刷に於て改訂の仕事をするといふ變則を行ひましたが、一旦組込んだものゝ加除を爲す事は、數ページに互つての異動を生ずるので、十分な改訂を敢行し得なかつたのであります。又書簡集は編入の書簡

改訂及校正に就て

そのものゝ眞偽不明のものもあり、其年次も推考し能はぬものが多いのでありますから、たと松岡大蟻の「翁反古所載のもの」を削除する外、沼波先生の訂正のまゝにいたして置きました。句評集韻文集紀行日記集文集の四部門は同じく先生の訂正のまゝであります。如上の次第で、沼波太田兩先生の御期待に副ひ得ないのを深く遺憾といたすのであります。但、畢竟私の力が足りないからであります。今更ながら慚愧に堪へません。

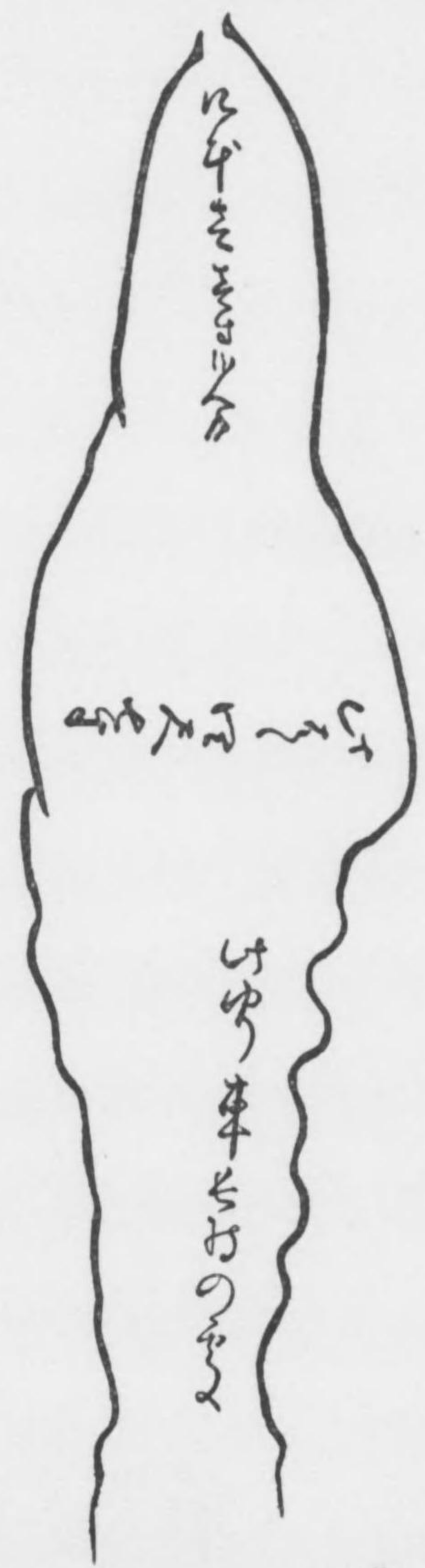
昭和三年六月

費川他石

一五五 柳真三 四段 次 一松友楓 與
 一四九 長時 四段 次 一勝延 一四段 次 一茂 茂
 一三五 待字 四段 次 一貞 一三段 小 信
 一五八 七助 一四段 次 一思 一四段 次 一信
 一五九 ゆき 一五段 次 一富 一五段 次 一信
 一六〇 六郎 一三段 次 一信 一五段 次 一信
 一六一 不嵐 一三段 次 一林 一四段 次 一外
 一六二 劇 一四段 次 一不 一四段 次 一外
 一六三 院 一五段 次 一中 一四段 次 一風
 一六四 常 一四段 次 一有 一四段 次 一信
 一六五 翠 一四段 次 一有 一四段 次 一信
 一六六 常 一三段 次 一有 一四段 次 一信
 一六七 次 不 有
 一六八 嵐雪 一五段 次 一有 一四段 次 一信
 一六九 漸道 一五段 次 一有 一四段 次 一信
 一七〇 正安 一五段 次 一有 一四段 次 一信
 一七一 妙 一五段 次 一有 一四段 次 一信
 一七二 流竹 一五段 次 一有 一四段 次 一信
 一七三 天類 一五段 次 一有 一四段 次 一信

(載所話語齊同) 類撰の簿化勸建再庵蕉芭年三和天

St. Lawrence Co.
St. Lawrence



肝の圖模刻(枇杷園監所載)

のものるたし寫に圖にれ鏡をきゞひの肝の(國柱)丸菊萬者行同の旅の野吉が蕉芭年五享貞

年表

寛永二十一年
正保元年

十二月改元
甲申(一歳)

伊賀國に生る。出生地に就き柘植説と上野説とあり。

父は松尾與左衛門、母は伊豫國宇和島の人。與左衛門の長男は半左衛門
命前、次に女子あり、次に芭蕉、次に三妹あり。芭蕉幼名金作後に甚七郎と
云ふ。

承應	慶安	正保	寛永
三年	二年	元年	二十一年
癸巳年	己丑年	丁亥年	乙酉年
(十歳)	(六歳)	(四歳)	(二歳)
元四年	元五年	元四年	元三年
辛卯年	庚寅年	丙戌年	丙戌年
(八歳)	(七歳)	(三歳)	(三歳)
元五年	元四年	元三年	元二年
九月改元 壬辰年	二月改元 戊子年	元四年	元三年
(九歳)	(五歳)	(三歳)	(二歳)
元三年	元二年	元元年	元元年
甲午年	癸巳年	癸巳年	癸巳年
(十一歳)	(十歳)	(十歳)	(十歳)

年表

始めて發句を詠ず、句今傳はらず。

明曆四年 四月改元 乙未 (十二歳)

三年 申丙 (十三歳)

三年 酉丁 (十四歳)

萬治四年 戊と申の世の中よかれ酉の年の句あり。七月改元 戊戌 (十五歳)

三年 亥己 (十六歳)

三年 子庚 (十七歳)

寛文四年 元服して忠右衛門宗房と名乗る。四月改元 辛丑 (十八歳)

二年 寅壬 (十九歳)

伊賀上野城代藤堂新七郎良精の臣となり、長子主計助良忠に近侍す、此時上野玄蕃町新七郎中屋敷、半左衛門方に在り。

一説に、この事を承應元年芭蕉九歳の時とす。

良忠和歌俳諧を好み、北村季吟を師とし、俳名を蟬吟と云ふ。芭蕉もともに其門に入つて學ぶ。

藤堂良精邸は現時(大正十年)輕便鐵道の上野驛構内のあたりなり。

(一)寛文十二年説あり。

年表

七年 未丁 (廿四歳)

二月、隣家の同僚城孫太夫方の門に「雲とへだつ友かや雁の生別れ」

良精の隣家に、良精の親戚なる西嶋八兵衛住めり。水利土木の事に詳しく、様々功績あり。爲に今上御大典の砌、正五位を贈られし人なり。藤堂家に出入せし芭蕉は、自然西嶋の爲す所を見、それが江戸水道工事にたづさはる因となりしならむと、伊賀上野住田中善助氏の説なり。半左衛門宅址は現時(大正十年)伊賀上野赤坂町(妙見町通り)の立入氏宅あたりなり。

三年 卯癸 (二十歳)

四年 辰甲 (廿一歳)

重頼の「佐夜中山」に二句入集せり。

五年 巳乙 (廿二歳)

六年 午丙 (廿三歳)

四月二十五日蟬吟卒去す。六月蟬吟の遺骨を奉じて高野山に登り、報恩院に納む。京に上り、季吟に謁して衣を換ふる望を告げて歸國す。芭蕉が小石川水道工事にたづさはりし事は確なれど、其年代に就て諸説あり。松本勘太郎氏の調査によれば、其はこの年の事にて、これにて一功を立て、而して致仕せしなりと。

と書きたる短冊を貼して國を去る。扱京に上り、北村季吟方に就學す。湖春の「續山井」に吟多く入集す。

在京七年と云ふ。なほ書を北向雲竹に、漢學を田中桐江に、詩を伊藤坦庵に學ぶとの説あり。

八年 戊申 (廿五歳)

此年頃東山の麓に住む。後ちこの居を廢して再び北村氏にて執筆となる。季吟の繪合と云ふ集に力を盡しきと。

九年 己酉 (廿六歳)

この頃太宰府參詣橋立漫遊などせりとの説あり。

十年 庚戌 (廿七歳)

正辰の「大和順禮」に入集。

十一年 辛亥 (廿八歳)

冬故郷上野に歸る。この頃、釣月軒宗茂、泊船堂宗房など稱す。

十二年 壬子 (廿九歳)

正月、上野天満宮奉納三十番發句合せの判をなし、「貝おほひ」と題して上梓す。九月小澤孤喰(また踞齋、卜尺とも云ふ。季吟門人)に伴はれて江戸に下る。

延寶元

十三年

重頼の「時世粧」に入集。

九月改元 癸丑 (三十歳)

正月、小石川に假居す。此頃より深川六間堀に居を定むる迄、江戸市中所々に流浪せしものゝ如し。

二年 甲寅 (卅一歳)

榎本其角入門す。

安靜の「如意寶珠」に入集。

三年 乙卯 (卅二歳)

松倉嵐蘭入門す。

四年 丙辰 (卅三歳)

この頃素宣と稱す。

季吟の「續連珠」に入集。

一説に、この年父の病を聞きて郷里に歸ると。この頃父を喪へるか。

五年 丁巳 (卅四歳)

この頃、天々軒桃青と稱す。山口信章と連句す。春二百韻「是れなり。この年より翌年にかけて山口信章、伊藤信徳と連句す。季吟勸進選句あり。卷頭は芭蕉の句なり。内藤風虎露沾の父發企「六百番俳諧發句合」に入

六年

戊午 (卅五歳)

春に至り信章信徳との連句終り、三百韻を成す。是れを「江戸三百韻」また「江戸三吟」と云ふ。二葉子の「江戸通り町」不卜の「江戸廣小路」言水の「江戸新道」等に入集。六月故郷に歸り、秋江戸に下る。服部嵐雪入門す。二葉子、紀子、卜尺と四吟歌仙似春との二百韻似春春澄との三歌仙成る。

七年

己未 (卅六歳)

二月杉風との「兩吟百韻」成る。十二月千春信徳との三吟歌仙成る。言水の「江戸蛇の鮓」才麿の「坂東太郎」等に入集。

八年

庚申 (卅七歳)

この頃華桃園、栩々齋とも稱す。四月延寶二十歌仙(別名「桃青門弟」獨吟二十歌仙「桃青二十歌仙」)成る。八月田舎句合「其角が農夫、野人と云ふ名にて二十五番の句合を綴り芭蕉これを判したるもの」成る。九月常盤屋句合「杉風が青物を詠じたる二十五番の句合を綴り芭蕉これを判したるもの」成る。この秋「次韻」(信徳の「七百五十韻」に次ぎたる芭蕉其角「才丸揚水」の「二百五十韻」)成る。

天和元九年

辛酉 (卅八歳)

「次韻」上梓さる。深川六間堀なる杉風の別墅に移る。薙髮して風羅房と云ふ。又杖錢子、鳳尾、羊角、羽扇の號あり。この居を芭蕉庵と稱す。言水の「東日記」に入集。

この芭蕉庵の址は、萬年橋の東南、細川橋の東北あたり、即ち西元町の西部なり。

この頃より、常陸國鹿島根本寺の僧にして當時深川大工町に在りし佛頂に就きて禪を修す。後ちその居所を寺とし、臨川寺と云ふ。

二年

壬戌 (卅九歳)

三月千春の「武藏曲」出づ。吟多く入集。十二月芭蕉庵急火に焼く。こゝに於て無所住の心を發し、甲斐國都留郡(郡内と通稱す)に杖をひき、佛頂和尚の弟子六祖五平の家、また同郡谷村磯部久住の家等に遊ぶ。

三年

癸亥 (四十歳)

五月其角の招きに應じ、江戸に歸る。この月其角の「虚栗」出づ。九月山口素堂芭蕉庵再建勸化簿を書してまはす。これによりて庵成る。

貞享元年

甲子 (四十一歳)

八月門人千里(油屋喜左衛門)を伴ひ東海道を上り、參宮し、九月初め故郷上野に歸り無名庵に十日程留まる。夫より大和に入り、芳野の奥

山をたどり、山城に出で、近江に入り、美濃に至る。大垣の木因亭に留ま
り、冬、木因と多度に詣で、桑名の本統寺に遊ぶ。夫より尾張の熱田宮に
詣で、桐葉亭に遊び、名古屋に行き、荷兮編の「冬の日」成る。十二月末故郷
上野に入る。

二年 乙丑 (四十二歳)

二月故郷を出で奈良に赴き、京に上り、大津に行き、尙白の家に遊ぶ。
三月尾張熱田の桐葉亭に再遊し、木曾路を經、甲斐を過ぎ、四月末深川
に歸る。この旅行の記すなはち「野ざらし紀行」(別名「甲子紀行」)「甲子吟
行、草枕」なり。

三年 丙寅 (四十三歳)

正月門人集りて百韻を成す。「初懷紙」(別名「鶴の歩」と云ふ)芭蕉これに
註し五十韻にして筆をすつ。荷兮編の「春の日」成る。春、古池の吟を成す。
冬芭蕉庵三營。

常陸國潮來なる本間道悅の門に入つて醫術を學ぶとの説あり。

四年 丁卯 (四十四歳)

八月曾良宗波を同伴して鹿島に月を観る。歸路潮來の自準亭本間氏
を訪ひ江戸に歸る。この旅の記を「鹿島紀行」と云ふ。「鹿嶋詣」と題する一

元祿
元五

元年 戊辰 (四十五歳)

本もあり、十月初め庵を舉白に預けて江戸を出で、鳴海の知足亭及び
美言亭に泊し、熱田に赴き、越人を呼び同行して、杜國を伊良古崎に訪
ふ。この時吉野同行を約す。十一月熱田名古屋に在り。十二月故郷上野
に歸り、再形庵に留まる。其角の「續虛栗」不卜の「續の原句合」成る。

二月參宮し、上野に歸る。三月蟬吟の遺子に會す。瓢竹庵に留まる。同
月中旬杜國(この行に戲に萬菊丸と稱す)を伴ひて出發、吉野に遊ぶ。夫
より高野山、和歌の浦に至り、奈良、大阪を經、四月中旬須磨明石に遊ぶ。
こゝまでの道の記を「卯辰紀行」(別名「芳野紀行」)「笈の小文」と云ふ。夫より
大阪に出で、大津に行き、美濃の岐阜に至り、宜白亭に泊す。七月鳴海に
遊び、名古屋に留まる。八月越人を携へて名古屋を出發、信州へ向ひ、更
科の里、姨捨山に月を賞し、善光寺に詣で、九月江戸に歸る。この信州行
きの旅の記を「更科紀行」と云ふ。

二年 己巳 (四十六歳)

荷兮編の「曠野」成る。三月草庵を人に譲り、曾良を伴ひて東北を指し
て旅立つ。下野の室の八島に詣づ。四月日光山に詣づ。五月仙臺に入り、
松島に遊ぶ。平泉尿前を過ぐ。六月羽黒、月山、湯殿に詣づ。鶴ヶ岡、酒田、象

瀧に遊ぶ。七月越後に入り、加賀に至り金澤に着す。八月敦賀に月を觀る。九月美濃大垣の如行の家に落着く。それより伊勢の遷宮を拜せむとて出で立つ。こゝまでの道の記を、奥の細道と云ふ。十月故郷上野に歸り、奈良京に行き、去來の落柿舎に遊ぶ。十二月膳所に行く。

三年 庚午 (四十七歳)

二月故郷上野に歸り、また近江に入り、膳所なる珍碩の洒落堂に遊ぶ。四月石山の奥なる幻住庵に籠る。幻住庵記成る。七月粟津木曾塚の無名庵に留まる。冬京に入る。十二月無名庵に留まる。この年珍碩編の「ひさご」成る。

四年 辛未 (四十八歳)

京に上り、四月十八日より五月四日まで落柿舎に留まる。この間の日記を「嵯峨日記」と云ふ。五月下浣去來凡兆編の「猿蓑」成る。後、大津に至り無名庵に留まる。八月湖上に舟を泛べ、堅田の浦に月を賞す。十月平田の李由の許に至り、美濃に行き、名古屋に遊ぶ。澤露川入門。十一月江戸に着く。此行支考桃隣隨行せり。橘町に住す。

五年 壬申 (四十九歳)

二月まで橘町に在り。五月に至り、門人等が深川舊庵の傍に營みし

芭蕉庵に入る。第四回の造營なり。八月森川許六入門。この秋門を閉ぢて人にあはず。閉關之説を作る。支考の「葛の松原」出づ。

六年 癸酉 (五十歳)

酒堂の「深川」出づ。東順傳を草す。十月素堂亭に殘菊の筵あり。

七年 甲戌 (五十一歳)

野坡利牛、孤屋等編の「炭俵」成る。五月東海道を上る。島田、名古屋、佐屋を経て、故郷上野に歸る。京に上る。近江に入り、無名庵に留まる。同月子珊編の「別座敷」成る。七月木節亭に遊び、故郷上野に歸り盆會を營む。九月支考、惟然、次郎兵衛と共に故郷を出で、奈良に入り大阪の之道亭に着す。園女亭に行く。饗應の南聊さはると覺えしが、廿九日の夜より泄痢起る。十月五日朝、御堂前南久太郎町花屋仁左衛門の裏座敷に病床を移す。七日正秀、去來、乙州、木節、丈草、李由來る。八日夜深更、旅に病で夢は枯野をかけ廻るの吟あり。十一日其角來る。十二日申の刻に歿す。この夜骸を長櫃に入れ、川舟にのせ、其角、去來、乙州、丈草、支考、惟然、正秀、木節、吞舟、次郎兵衛、附添ひて上る。十三日朝伏見より木曾塚の無名庵に移す。十四日夜埋葬の儀を擧ぐ、會葬者、帳にひかへたる數三百人許、其角の「芭蕉翁終焉記」路通の「芭蕉翁行狀記」成る。

總目次

杉風筆芭蕉像 (安田登氏藏)

芭蕉竹自畫贊 (萩野由之博士藏)

幸田露伴博士序

本書の編纂に就て (編者)

再版に就て (編者)

改訂及校正に就て (他石)

天和三年芭蕉庵再建勸化簿模刻の一部 (隨齋語話所載)

貞享五年芭蕉筆萬菊丸軒の圖 (枇杷園隨筆所載)

芭蕉年表

第一 發句集……………(1)

總目次

年代順芭蕉發句集……………(1)

類題芭蕉發句集(目次あり)……………(五)

第二 連句集……………(九)

第三 句評集(目次あり)……………(三七)

第四 韻文集……………(三七)

第五 紀行日記集(目次あり)……………(五七)

第六 文集(目次あり)……………(四〇)

第七 書簡集……………(四三)

第八 遺語集(目次あり)……………(四七)

索引

年代順芭蕉發句集

明曆三年

戊と申の世の中よかれ酉の年

(芭蕉翁句鑑)

寛文四年

姥櫻さくや老後の思ひ出

(佐夜中山集)

月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿

(同)

同 六年

降音や耳もすうなる梅の雨

(續山井)

杜若にたりやにたり水の影

(同)

夕顔に見とるゝや身もうかりひよん

(同)

岩躑躅染る泪やほととぎす

(同)

しばしまもまつやほととぎす千年

(同)

七夕のあはぬこゝろや雨中天

(同)

たんだすめ住ば都ぞけふの月

(同)

影は天の下てる姫か月のかほ

(同)

發句集

寝たる萩や容顔無禮花の顔 (同)

月の鏡小春にみるや目正月 (同)

時雨をやもどかしがりて松の雪 (同)

子におくれたる人の本にて

しをれふすや世はさかさまの雪の竹 (同)

霞まじる帷子雪はこもんなか (同)

霜枯に咲は辛氣の花野哉 (同)

同 七年

さかりなる梅にす手引風もがな (同)

あち東風や面々さばき柳髪 (同)

花の本にて發句望れ侍て

花に明ぬなげきや我が歌袋 (同)

花の顔にはれうてしてや臘月 (同)

春風にふき出し笑ふ花もがな (同)

夏近し其口たばへ花の風 (同)

糸櫻こや歸るさの足もつれ (同)

初瀬にて人々花見けるに

うかれけり人やはつせの山櫻 (同)



二「鷹筑波」に
「大と猿の中
立なれや西の
年一葉子」
とあり

三「耳無草」に
「夕風の花に
心やうかりひ
よん」とあり

(一)この句を陶家
の同僚城孫太
夫の門に貼し
て國を去ると
云ふ、昔助寛
文六年の事と
なせど今山崎
藤吉氏説に從
ふ

風吹は尾ほそうなるや大櫻
花は賤のめにもみえけり鬼薊
五月雨に御物遠や月のかほ
雲とへだつ友かや雁の生別れ

(續山井)
(同)
(芭蕉翁句集)

同 十年

山邊郡宇知山
うち山や外様しらすの花盛

(大和巡禮)

吉野郡見馴河

五月雨も瀬ぶみ尋ねぬ見馴河

(同)

同 十二年

きても見よ甚兵衛が羽織花ごろも
女夫鹿や毛に毛が揃うて毛むつかし

(貝おほひ)

延寶元年

かつら男すますなりけり雨の月
浪の花と雪もや水にかへり花

(如意寶珠)
(同)

同 四年

天秤や京江戸かけて千代の春
我も神のひさうやあふく梅の花
植る事子のごとくせよ見櫻

(當世男)
(續連珠)

たかうなや半もよの篠の露

(同)

雲を根に富士は杉なりの茂かな
見るに我もおれる計ぞ女郎花

(同)

けふの今宵寝る時もなき月見かな
詠るや江戸にはまれな山の月

(芭蕉翁句集)

武藏野や一寸ほどな鹿の聲

(當世男)

重陽

盃の下ゆく菊や朽木盆

(同)

同 五年

門松や思へば一夜三十年
この梅に牛も初音と啼きつべし
秋來にけり耳をたづねて枕の風
水學も乗物かさんあまの川
木を伐て木口見るやけふの月
雨の日や世間の秋を堺町

(六百番發句合)
(梅の牛)
(江戸廣小路)
(同)
(同)
(同)

(二)「芭蕉翁發句
集」に「見ば
や」とあり

(一)「芭蕉翁發句
集」に「戸田權
太夫亭にて」と
前書あり

(三)「一葉集」等に
「今朝の春」と
あり

(四)「芭蕉翁發句
集」に「御字か
とよ」とあり

(五)「一葉集」に
「江竹が尺八
に」とあり

(六)「江戸廣小路」
に「しの字を
引て」とあり

(七)「一葉集」に
「名月の」とあ
り

(八)「芭蕉翁發句
集」に「赤坂
か」とあり

(九)初案は「とま
りたるや」とま
て「東日記」に
さやうに出で
たり

唐柜や軒端の萩の取ちがへ

(同)

一時雨礫や降て小石川

(同)

白炭や彼浦島が老の霜

(同)

あら何ともなやきのふは過ぎてふぐと汁

(桃青三百韻)

成にけりなりにけり迄年の暮

(江戸廣小路)

同 六年

(一)庭訓の往來誰が文庫より明の春

(芭蕉翁句集)

(二)内裡雛人形天皇の御宇とかや

(江戸廣小路)

(三)猫の妻籠の崩れより通ひけり

(同)

(四)先づ知るや江竹が竹に花の雪

(芭蕉翁發句集)

(五)大比叡やしを引捨てし一かすみ

(芭蕉句選)

(六)あやめ生り軒の鬮のされかうべ

(芭蕉翁發句集)

(七)五月雨や龍燈揚る番太郎

(江戸新道)

(八)梢よりあたに落ちけり蟬のから

(芭蕉翁發句集)

(九)佐夜の中山にて

(同)

命なりわづかの笠の下涼み

(同)

武藏守泰時仁愛を先とし政以し去れ欲先とす

發句集

(六)明月の出るや五十一箇條

(庭籠集)

見渡せば詠れば見れば須磨の秋

(芭蕉翁發句集)

(七)鹽にしてもいざことづてむ都鳥

(江戸十歌仙)

實にや月間口千金の通り町

(江戸通り町)

針立や肩に榎うつから衣

(江戸新道)

行雲や犬の逃ほえむらしぐれ

(同)

同 七年

於春々大なる哉春と云々

(芭蕉句選拾遺)

杉風夢想

さげたり二月中旬初茄子

(芭蕉翁句集)

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

(江戸蛇の鮒)

雨降れば

(同)

草履の尻折りて歸らむ山ざくら

(同)

(八)夏の月御油より出で、赤坂や

(芭蕉句選)

花木權はだかわらべのかさしかな

(東日記)

(九)枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

(曠野)

蒼海の浪酒臭しけふの月

(坂東太郎)

盃や山路の菊と是を干す

(同)

(一) 連屋屋五十一書
入本に「一本
風をかたし
く」とある旨
記す

(二) 「東日記」に
「干鮭」とあり

(三) 「初蝶集」に
「まねくや」と
あり

(四) 萬禪の「伊勢
紀行」に「こ
の句の前書
屋の隙あり坡
翁ふた、び
此句を侘て屋
漏の句を作る
其世の雨をば
せを葉にきき
て閑寂の草の
戸」とあり

(五) 「芭蕉翁句集」
に「この句「柴
の戸」とあり
て「前書」こ
の「とせの春
の」とあり
侘びて市中に
依る市に住
川の名はと
移す長安は
來名利の地
手にして金
かたしとい
けむ人のか
は此身のと
ぼる

しき故に「ヤ」
とあり
(六) 「武藏曲」に
この句の前書
「深川冬夜の
感」とあり
(七) 書簡集参照
(八) 「一葉集」等
に「芭蕉翁發句
集」に「おの
こかな」とあ
り「芭蕉句選」
には「を」とこ
「芭蕉」あり
(九) 「世の中」に
あり「和漢文
採」に「世にふ
るは」とあり
(一〇) 「泊船集」に
「芭蕉句選」に
「花ざかり」と
あり
(一一) 一本に「門人
杉風子夏の料
とて帳子を調
じ贈りける」と
前書して「
句「よき衣着
たり」とあり
(一二) 「一葉集」に
この句考證の部
に「一葉集」に
この句考證の部
におく

霜をきて衣かたしく捨子かな (坂東太郎)

今朝の雪根深を蘭の枝折かな (同)

富家喉肌肉丈夫喫菜根予は乏し (東日記)

雪の朝ひとり干鱈をかみ得たり (書簡)

色付くや豆腐に落ちて薄紅葉 (芭蕉移風兩吟百員)

わすれ草菜飯につまむ年の暮 (江戸蛇の鮓)

天和九年

山吹の露菜の花のかこ顔なるや (芭蕉翁發句集)

蜀魂まねくか麥のむら尾花 (芭蕉句選)

愚にくらく茨をつかむ疊かな (同)

夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて (武藏曲)

月をわび身をわび掛きをわびてわぶと答へむと
すれど問ふ人もなしなほわびく (同)

侘びてすめ月侘齋が奈良茶歌 (同)

茅舎の感

芭蕉野分して盟に雨をきく夜哉 (同)

貧山の釜霜に鳴く聲さむし (同)

冬月江上に居をうつして寒を侘々茅舎の三句

草の戸に茶を木葉かくあらし哉 (芭蕉翁發句集)

消炭に薪わる音か小野の奥 (同)

槽の聲波を打て腸氷る夜や涙 (武藏曲)

ほね柴や斯と見るより蝶の壳 (もとの水)

天和二年

梅柳さぞ若衆かな女かな (武藏曲)

芭蕉植えて先づくむ荻の二葉かな (袖珍鈔)

武藏野の月の若ばえや松島種 (松島陸軍集)

三日月や朝顔の夕つぼむらむ (虚栗)

朝顔に我は食食ふ男かな (同)

くだれる世にもといひけむことわりなるや杉風が探
茶庵に涼みて (芭蕉翁句集)

雪の鈍左露水無月の鰓 (虚栗)

憶老社

いにてや我よき布着たり蟬衣 (一葉集)

霞聞くや此身はもとの古柏 (一葉集)

寛文延寶天和年中

かびたんもつくばはせけり君が春 (芭蕉翁句集)

恵方から曳くや今年も牛の玉 (同)

我年を棚にあげてや若えびす (同)

年や人に取られていつも若夷 (同)

四方にうつ舞もしどろもどろ哉 (同)

和歌の跡とふや出雲の八重霞 (同)

勢ひあり氷消えては瀧津魚 (一葉集)

古里の梅や難波の二年ごし (芭蕉翁句集)

梅咲くや白の掘木のよき曲り (同)

梅が香やしらす落窪京太郎 (忘梅)

竹内一枝軒にて (芭蕉翁句集)

世に匂へ梅花一枝のみそさゝぬ (芭蕉翁句集)

(一)「芭蕉翁句集」の句考證の部におく

(二) さみだれに寒いまゝなり旅すがた (芭蕉翁句集)
別ればや笠手にさげて夏羽織 (白馬集)
白芥子や時雨の花の咲きつらむ (鶴尾冠)

忘れずば佐夜の中山にて涼め (芭蕉翁句集)
松風の落葉か水の音すとし (芭蕉翁句集)
わが宿は四角な影を恋の月 (同)

馬ほく／＼われを繪に見る夏野哉 (同)
もの一つ瓢はかろき我世かな (一葉集)
江上の破屋を出づる程風の聲ぞる寒げなり

野ざらしを心に風のしむ身かな (野ざらし紀行)
秋十とせかへつて江戸をさす故郷 (同)
霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き (同)

富士川を行くに三つばかりの捨子の泣くあり、此川

の早瀬にかけてうき世の浪をしのぐにたへず露ばかりの命まつ間と捨置きけむ小萩がもとの秋の風こよひや散らむ明日やしをれむと袂より噴物投げて通るに
猿をきく人捨子に秋の風いかに (同)
馬上の吟

道のべの木槿は馬に喰はれけり (同)
杜牧が早行の殘夢、小夜の中山にいたりて忽ち驚く馬に寝て殘夢月遠し茶のけふり (同)
田中の法蔵寺にて

刈あとや早稲かた／＼の鳴の聲 (芭蕉翁句集)
暮れて外宮に詣で侍りけるに一の花表の陰ほのぐらく御燈所々に見えてまた上もなき峰の松風身にしむばかり深き心をおこして

三十日月なし千とせの杉を抱く風 (野ざらし紀行)
西行谷の麓に流あり女どもの芋洗ふを見るに
芋洗ふ女西行ならば歌よまむ (同)

二見の浦にて
硯かと拾ふやくぼき石の露 (芭蕉翁句集)
ある茶店の傍にやすらひしに我を見しり侍るにや内へ請じて家女の料紙持出で、曰く我は此家の遊女な

幸にして尊し
僧朝顔いく死かへる法の松 (同)
芳野にてある坊に一夜をかりて
枯うつてわれに聞かせよや坊が妻 (同)
西上 人の草の庵の跡は奥の院より二町ばかり分けるほどとく／＼の清水あり昔にかはらずと見え今もとく／＼と零落ちける

露とく／＼こゝろみにうき世すゝがばや (野ざらし紀行)
後醍醐帝の御陵を拜む

御廟年を経てしのぶは何を忍草 (同)
大和より山城を経て近江路に入て美濃にいたるに今須山中を經ていにしへの常盤が墳あり伊勢の守武がいひける義朝どのに似たる秋風とはいづれの所か似たりけむ我もまた

義朝の心に似たり秋の風 (同)
不 破

秋風や藪も如も不破の關 (同)
大垣にとまりける夜は木因が家を主とす武藏野を出でし時野ざらしを心に思ひて旅立ちければ

死もせぬ旅寝の果よ秋の暮 (芭蕉翁句集)

發句集

野に臥し山に臥しても樂しきや否とあるじの問ひければ

さみだれに寒いまゝなり旅すがた (芭蕉翁句集)
別ればや笠手にさげて夏羽織 (白馬集)
白芥子や時雨の花の咲きつらむ (鶴尾冠)

忘れずば佐夜の中山にて涼め (芭蕉翁句集)
松風の落葉か水の音すとし (芭蕉翁句集)
わが宿は四角な影を恋の月 (同)

馬ほく／＼われを繪に見る夏野哉 (同)
もの一つ瓢はかろき我世かな (一葉集)
江上の破屋を出づる程風の聲ぞる寒げなり

野ざらしを心に風のしむ身かな (野ざらし紀行)
秋十とせかへつて江戸をさす故郷 (同)
霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き (同)

富士川を行くに三つばかりの捨子の泣くあり、此川

りしを今のあるじの妻となし侍る也先のあるじも鶴といふ遊女を妻とすその頃難波の宗因此所にわたり給ふを見て句を願ひ請ひたると例をかき事まで言ひ出で、顔りに望み侍ればいなみ難くてかの難波の老人が句に葛の葉のおつるかうらみ夜の霜と云ふ句を前書にしててふといひける女にあたふ

蘭の香や蝶の翅にたきものす (芭蕉翁句集)
閑人盧牧亭をとひて

葛植ゑて竹四五本のあらし哉 (同)
長月のはじめ故郷にかへる北堂の萱草も霜枯れはて

、今は跡だになし何事も昔にかはりてはらからの髪白く眉皺よりてただ命ありてとのみ言ひて詞はなきに兄の守袋より取出で、母の白髪拜めよ浦島が子が玉手箱汝が眉もや、老いたりと暫く泣きて

手にとらば消えむ泪ぞあつき秋の霜(野ざらし紀行)
大和の國に行脚して竹の内といふ所に至る此處は例の千里が舊里なれば日頃といまりて足を休む、藪より奥に家あり

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥 (同)
當麻寺へ詣で、庭上の松を見るに凡そ千とせも經たるならむ大さ牛をかくすとも云ふべけむ彼れ非前といへども佛膝にひかれて斧斤の罪をまぬがれたるぞ

發句集

(一)「つ松」に『御廟千とせ』とあり

(二)書簡に『似たる』とあり

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす (野ざらし紀行)

草の枕に寝あきてまだほの暗きに濱の方へ出で、地蔵堂の柱に書きつく (芭蕉翁發句集)

曙や白魚しろきこと一寸 (芭蕉翁發句集)

熱田に詣づ社頭大に破れ築地はたふれて草むらにかくる (芭蕉翁發句集)

しのぶさへ枯れて餅かふ宿りかな (同)

熱田にて

遊び來ぬ鈍釣りかねて七里まで (同)

名古屋に入る道のほど風吟す

狂木がらしの身は竹齋に似たるかな (野ざらし紀行)

草枕犬もしぐるゝか夜の聲 (同)

雪見にありきて抱月亭

市人にいではうらむ雪の笠 (芭蕉翁發句集)

旅人を見る

馬をさへながむる雪のあしたかな (野ざらし紀行)

海邊に日をくらして

海暮れて鴨の聲ほかに白し (同)

林氏桐葉のぬし心ざし淺からざりければ暫くとどま

らむとせし程に

此海に草鞋を捨てむ笠しぐれ (芭蕉翁發句集)

くれくれ餅を木魂の侘寝かな (同)

爰に草鞋をとまかしこに杖を捨て旅寝ながらに年の暮れければ (芭蕉翁發句集)

年暮れぬ笠着て草鞋はきながら (野ざらし紀行)

貞享二年

山家に年を越えて

誰ぞ齒柴に餅おふうしの年 (同)

伊賀のある方にて

旅がらす古果は梅になりけり (芭蕉翁發句集)

子日しに都へ行かむ友もがな (同)

梅が香に追ひもどさるゝ寒かな (兼小田)

奈良へ出づる道のほど

春なれや名も無き山の朝霞 (野ざらし紀行)

二月堂に籠りて

水取やこもりの僧の杵の音 (芭蕉翁發句集)

京に登りて三井秋風が鳴瀧の山家をとふ

梅白しきのふや鶴をぬすまれし (同)

(一)「熱田三歌仙」
「發日記」に「雪
上五文字」
「雪
うすし」とあ
り、後に「曙
や」に直りた
り
(二)「甲子紀行」
へ「芭蕉翁發句
集」
「市人よこの
翁」とあり
(三)「芭蕉翁發句
集」
「考」は「この
句
をこの年の吟
とするを疑ふ
とす」
(四)「葉集」
「甲
子紀行」に「米
の僧」とあり
(五)「芭蕉翁發句
集」
「考」の推測に
從ひて「こゝに
置く」
(六)「書簡集」に
「よりてこゝに
入れたる」
「芭蕉翁發句
集」
「芭蕉翁全
傳」等に「元禄
七年」作
なるが如し

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ (同)

或人の山家に至りて

櫻木の花にかまはぬ姿かな (同)

野中の日影

蝶の飛ぶばかり野中の日影かな (同)

伏見西岸寺任口上人にあふとて

わが衣にふしみの桃の雫せよ (同)

鳴海湯眺望

舟足も休む時あり濱の桃 (同)

顔に似ぬ發句も出でよ初ざくら (同)

大津に出づる道山路を越えて

山路来て何やら床しすみれ草 (芭蕉翁發句集)

鶴の巢も見らるゝ花の葉ごし哉 (同)

湖水眺望

辛崎の松は花より臙にて (同)

晝の休ひとて旅店に顔をかけて

躑躅生けてその陰に干鱈さく女 (同)

吟行

菜畑に花見顔なる雀かな (同)

水口にて廿年を経て故人土芳大仙寺にあふ (芭蕉翁發句集)

命ふたつの中に活たる櫻かな (野ざらし紀行)

伊豆の國経が小島の桑門これも去年の秋より行脚しけるに我名を聞きて草の枕の道づれにもと尾張の國まであとをしたひ來りければ

いざともに穂麥くらはむ草枕 (同)

此僧我に告げて曰く圓覺寺大願和尚としむ月のはじめ遷化し給ふよしまことや夢の心地せらるゝにまづ道より其角が方へ申遣しける

梅戀て卵の花拜む涙かな (梅の牛)

思ひ出す木曾や四月の櫻がり (芭蕉翁發句集)

知足亭庭前にて

杜若われに發句のおもひあり (同)

贈杜國子

白芥子に羽もぐ蝶のかたみかな (同)

盤齋のうしろむきたる像

世の中をうしろになして山里にそむきはてゝもすみ染の袖といふに

團扇とつてあふがむ人のうしろむき (同)

二度桐葉子が許にありて今や東に下らむとするに

(七)「熱田三歌仙」
に「何やはな
し」とあり「赤
草紙」に「初め
何となく何
やら床し」と
ありきと
(八)「鶴の巢」と書
きたる書もあ
り
(九)「芭蕉翁發句
集」等に「の」
の字なし
(一〇)「赤草紙」及び
書簡に「この
句上五」
「團扇
もて」とあり
下五「せなか
つき」とある
書あり、團扇
とつて……う
しろむきは再
案ならむと云
へり、「泊船
集」
「發日記」
に「背つき」と
あり、うしろ
つき、とよむ
なり

〔二八〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔二九〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三〇〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三一〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三二〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三三〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三四〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三五〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三六〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三七〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三八〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔三九〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり
 〔四〇〕芭蕉翁句鑑に「這ひ登る」とあり

むら雨を背中に負うて柴胡掘 (芭蕉翁句鑑)

草庵の雨

起上る菊ほのかなり水のあと (續 虛 栗)

鶏の聲に時雨るゝ牛家かな (芭蕉翁句鑑)

鮭馬の影見む關の渡し舟 (同)

饒別會 江戸を出づるとて

はやこなたへといふ露の。むぐらの宿はうれたく

とも。袖をかたしきて御とまりあれやたび人。

旅人とわが名呼ばれむ初時雨 (千 鳥 掛)

一尾根は時雨るゝ雲か富士の雪 (芭蕉翁句鑑)

三河の下地の茶店にて

ごを焚て手拭あぶる寒さ哉 (同)

呼織の濱はくれてから笠寺は雪のふる日

星崎の間を見よとや啼く千鳥 (同)

鳴海の驛本陣美言亭に泊りけるに飛鳥井兼章の君都

をへだてと詠て主へ給りけるを見て

京まではまだ半空や雪の雲 (同)

越人と吉田の驛にて

寒けれど二人たび寝ぞたのもしき (同)

あまつ繩手海より吹上ぐる風いと寒き所なり

冬の日や馬上に氷る影法師 (同)

伊良古崎は南の海の果にて鷹のはじめて渡る所とい

へりいらこ鷹など歌にもよめりけりと思へば猶あは

れなる折節

鷹一つ見付けてうれしいらこ崎 (同)

杜國が庵を尋ねて

さればこそあれたきまゝの霜の宿 (同)

麥はえてよきかくれ家や畠むら (同)

杜國が不幸をいらこ崎に尋ねて鷹の聲を折節聞きて

夢よりも現の鷹ぞ頼もしき (同)

杜國亭にて中あしき人の事などとりつくろひて

雪と雪今宵師走の名月か (芭蕉翁句鑑)

熱田の宮御座置なりぬ

磨直す鏡も消し雪の花 (熱田三歌仙)

兼日の會に

ためつけて雪見にまかる紙子哉 (同)

いざさらば雪見にころぶ所まで (同)

ふる里や隣に泣く年の暮 (同)

貞享五年

元禄元年

宵のとし空の名残惜まむと酒のみ夜更して元日晝ま

で寝ねて餅くひはづしぬ

二日にもぬかりはせじな花の春 (同)

風琴亭二句

春立てまだ九日の野山かな (同)

あこくその心はしらす梅の花 (同)

山 家

手鼻かむ音さへ梅のさかり哉 (同)

伊賀山家にうにといふ物あり土の底より掘出て薪と

す石にもあらざ木にもあらざ黒色にしてあしき香あ

りそのかみ高梨野也これを考へて曰く本草に石炭と

いふ物ありいかに申傳へて此國にのみ焼きならはし

けむいとめづらし

香に匂へうに掘る岡の梅の花 (同)

阿波の莊に新大佛と云ふあり此所は南都東大寺の聖

徳乗上人の舊跡なり舊友宗七宗無一人二人を誘ひも

と「芭蕉集」にあり、されば「いざさらば」は三案なり

〔一〕「泊船集」に「探梅」と前書あり「梅の牛」に「水見る」とあり

〔二〕「笈の小文」に「初春」と前書あり
 〔三〕「芭蕉翁句鑑」に「遺」に「心も」とあり

〔四〕「卯辰紀行」に「や、陽炎の」とあり

鍛冶出羽守氏雲亭にて

面白し雪にやならむ冬の雨 (千 鳥 掛)

箱根こす人もあるらし今朝の雪 (卯辰紀行)

防川亭

香を採る梅に藏見る軒端かな (同)

如行亭にて

琵琶行の夜や三味線の音散 (芭蕉翁句鑑)

十二月九日一井亭

旅寝よし宿は師走の夕月夜 (一 葉 集)

師走十日餘名古屋を出でゝ舊里に入らむとす

旅寝して見しやうき世の煤拂 (同)

病 中

薬のむさらでも霜の枕かな (芭蕉翁句鑑)

多度権現を過ぐるとて

宮人よわが名をちらせ落葉川 (同)

桑名より處々馬に乗て杖突抜引上すに荷鞍うちかへ

りて馬より落ちぬ便なの乗人や獨旅さへあるをと馬

士に叱られながら

歩行ならば杖突坂を落馬かな (同)

山城へ井手の駕籠かる時雨かな (同)

(一)「忘水」に、は
 じめは「陽炎」
 とありきと「
 三冊子」に
 高丈六分陽炎
 陽炎に上つ
 人にも石の上
 かくれ上り聞
 かせつて自らも
 再吟あつて丈
 六の方定る丈
 旨あり

(二)「卯辰紀行」に
 「細代民部雪
 堂に會」とあ
 り書簡に「や
 どり木の」と
 あるあり

(三)「卯辰紀行」に
 は「伊勢山田」
 とあり「伊勢
 紀行」にこの
 一旬の節書
 だ増賀の名
 みのこれま
 となりけらし
 とあり「山月
 集」に「山行」
 とあり「反故集」に
 「伊勢御神前
 にて何の木
 句かな」とあり

のしてかの地に到る仁王門鐘樓の跡は枯れたる草の
 底にかくれて松物いはゞことゝはむ礎ばかり葦のみ
 してといひけむも斯る氣色に似たらむ猶分入りて蓮
 花坐獅子の坐などはいまだ昔の跡を殘せり御佛は後
 へたる岩窟に埋れてわづかに見えさせ給ふ御ぐしは
 かりはいまだつゝがもなく上人の御影を崇め置きた
 る草堂の傍に安置したり誠にこゝらの人の力を費し
 たる上人の御願いたづらになり侍ることも悲しく涙
 も落ちて物語もなしむなしき石臺にぬかづきて

丈六に陽炎高し石の上 (芭蕉翁發句集)

伊勢にて

神垣や思ひもかけず涅槃像 (同)

神垣の内には梅一木も見えずいかなる故かと尋ねれ
 ばたゞ故はなく昔より一木もなし子良の館の後に
 一木ありといふに

御子良子の一もと床し梅の花 (同)

細代民部の息胡來にあひて

梅の木に猶やどり木や梅の花 (同)

捨物に梨の接穂や山屋敷 (芭蕉翁句鑑)

杵折の贊(文集参照)

此槌のむかし椿か梅の木か (同)

神路山を出づるとて西行の涙をしたひ増賀の信を悲
 しむ 二句

何の木の花ともしらす句ひ哉 (芭蕉翁發句集)

裸にはまだきさらぎのあらし哉 (同)

菩提山

山寺の悲しさ告げよ彌ほり (同)

柿 邊

盃に泥な落しそむら燕 (同)

二乗軒

藪椿門はむぐらの若葉かな (同)

龍ノ僧舎にあふ

物の名を先づ問ふ萩の若葉哉 (同)

伊賀上野薬師寺初會

初ざくら折しもけふはよき日なり (同)

咲きみだす桃の中よりはつ櫻 (同)

景清も花見の座には七兵衛 (同)

猿 邊

もろ／＼の心柳にまかすべし (芭蕉翁句鑑)

探丸子のきみ別墅の花見催させ給ひけるにまかりて
 古き事などおもひ出で侍るに

り「花はさく
 ら」に「貞享
 五」に「此末
 伊勢のつづ
 踏前今五更
 及侍りぬ更
 つとしのひ
 にも老行ま
 にかしこき
 ほんひかり
 思ふとさき
 心地したし
 行のかたし
 なさにとよ
 けん誤の時
 なつかしけ
 ば扇うちし
 砂にかしら
 たふけなか
 ら」と前書あ
 り

(四)「卯辰紀行」に
 「この山の」と
 あり

(五)「笈日記」伊勢
 の部に「桶部」
 とあり「一葉
 集」にこの句
 考證の部にお
 く

(六)「卯辰紀行」に
 「前書」草庵會
 とあり、句上
 五「芋植て」と
 あり

(七)「卯辰紀行」に
 「芦の若葉」と

様々の事思ひ出すさくらかな (芭蕉翁發句集)

龍門にて 二句

龍門の花や上戸の土産にせむ (同)

酒のみにかたらむかゝる瀧の花 (同)

西河にて

ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音 (同)

櫻待きどくや日々五里六里 (同)

壘は椿木とかや谷の老木のいへる事ありきのふは夢
 と過ぎて明日はいまだ來らずたゞ生前一椀のたのし
 みの外に壘は／＼と言ひくらしめて終に賢者の譏を受
 く

さびしさや花のあたりの翠檜 (芭蕉翁發句集)

紙ぎぬの濡るとも折らむ雨の花 (同)

扇にて酒くむ影やちる櫻 (同)

吉野にて

花ざかり山は日頃の朝ぼらけ (同)

しばらくは花の上なる月夜かな (同)

若清水

凍解て筆に汲ほすしみづ哉 (同)

よし野西行庵

硯洗ふ知慧は出でたり若清水 (一葉集)

春雨の木下にかゝる雪かな (一葉集)

吉野を下る時

飯貝や雨に泊りて田螺聞く (もとの水)

大和國草尾村にて

花の陰誦に似たる旅寝かな (芭蕉翁發句集)

高野にて

父母のしきりに戀し雉子の聲 (同)

行春に和歌の浦にて追付たり (同)

春風や人聲うつる三笠山 (芭蕉翁句鑑)

旅行

一つ脱てうしろにおひぬ衣更 (芭蕉翁發句集)

山路にて

夏來てもたゞ一つ葉の一つ哉 (野)

奈良にて鹿の子を生むを見て此日においてをかしければ (同)

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉 (同)

招提寺にて鑑眞和尚の御影を拜し御日の首させ給ふ事を思ひつゞけて (芭蕉翁發句集)

若葉して御目の雪ぬぐはゞや (卯辰紀行)

奈良にて故人に別る

二股にわかれ初めけり鹿の角 (芭蕉翁發句集)

峯入や一里おくるゝ小山伏 (芭蕉翁句鑑)

大阪にて或人のもとのにて

燕子花かたるも旅のひとつ哉 (卯辰紀行)

須磨 二句

月はあれど留守のやうなり須磨の夏 (同)

月見ても物足らはずや須磨の夏 (同)

海人の軒ちかき芥子の花のたえんゝに見渡さる (同)

海士の顔まづ見らるゝやけしの花 (同)

きすこといふ魚を朝して眞砂の上にはしらしけるを鳥の飛來りてつかみ去るをにくみて弓をもておどすぞ海士のわざとも見えずもし古戦場の名残をとめてかゝる事をなすにやといとゞ罪深く翁昔の戀しきまゝに (同)

須磨の蟹の矢先に啼くや郭公 (芭蕉翁發句集)

時鳥消え行くかたや鳥一つ (卯辰紀行)

須磨寺やふかぬ笛きく木下聞 (同)

此境はひわたるほどいへるも愛の事にや

蝸牛角ふりわけよ須磨あかし (芭蕉翁發句集)

明石夜泊

長途の愁をなぐさむほど

山陰や身をやしなはむ瓜畑 (同)

またたくひ長良の川の鮎なます (同)

長良川にのぞみたる賀島氏が水樓にて十八樓の記あり

此あたり目に見ゆるもの皆涼し (同)

鷓鴣を見る鷓鴣舟も通り過ぐる程に歸るとて

おもしろうてやがて悲しき鷓鴣哉 (同)

岐阜山

城あとや古井の清水先づ問はむ (同)

桑門已白亭に日頃ありて

やどりせむ藜の杖になる日まで (同)

杉の竹葉軒といふ庵を尋ねて

粟稗にまづしくもあらず草の庵 (同)

七月十三日鳴海眺望

初秋や海も青田の一みどり (一葉集)

知足の弟金右衛門が新宅を賀す

よき家や雀喜ぶ背戸の粟 (芭蕉翁發句集)

大曾根成就院の歸るさに

何事の見たてにも似ず三日の月 (同)

「鹿の角まづれ哉」とあり

「夏はあれど留守のやうなり須磨の月」とあり

「芭蕉翁發句集」に見

「芭蕉翁發句集」に見

「芭蕉翁發句集」に見

「芭蕉翁發句集」に見

「芭蕉翁發句集」に見

「芭蕉翁發句集」に見

「芭蕉翁發句集」に見

「まづしくも
日」に「秋の
くもあらず」とあり

(一)「笈日記」に
「こけて露け
し」とあり
(二)「小文庫」に
「佛は」とあり

(三)「陸奥衛」に
「蓮池の主翁
又菊を愛すき
寔をふは盧山
を其酒の餘り
はすめて獨り
吟のたはふれ
ふとなす猶おも
ふ明年誰かす
こやかならん
事を」と前書あり

發句集

木曾路の旅思ひ立て大津にとどまり勢田の螢を見に出で、

この螢田毎の月にくらべ見む (芭蕉翁句鑑)

さらしな月見むと旅立ちける頃人々廓外に送りて三盃をかたむけゝる

朝顔は酒も知らぬ盛りかな (芭蕉翁發句集)

ひよろ／＼と猶露けしや女郎花 (同)

留別

送られつ送りつはては木曾の秋 (同)

棧やまづ思ひ出す駒迎へ (更科紀行)

いでの月のあるじに酒ふるまはむといへば盃持出でたりよのつねに一めぐりも大きに見えてふつ／＼かなる蒔輪をしたり都の人ばかり南に西市に横にもふれざりけるに思ひもかけぬ興に入て瑠璃玉冠の心地せらるゝも處がらなり

あの中に蒔繪書きたし宿の月 (同)

娘捨山は八橋といふ里より一里ばかり南に西市に横をれてすさまじく高くもあらずかど／＼しき岩なども見えずたゞあはれ深き山の姿なりなぐさめかねしといひけむもことわりしられてそゞろに悲しきに何

故にか老いたる人を捨てたらむと思ふにいと涙も落ちそひければ

佛や嫉ひとり泣く月の友 (同)

善光寺

月影や四門四宗もたゞ一つ (同)

十六夜もまた更科の郡かな (同)

更科や三夜さの月見雲もなし (芭蕉翁句鑑)

身にしみて大根からし秋の風 (更科紀行)

木曾の椽うき世の人のみやげかな (同)

吹きとばす石は浅間の野分かな (同)

旅行

さらでさへ秋よ野守のひとつ鐘 (芭蕉翁句鑑)

中秋の月は更科の里娘捨山になぐさめかねて猶哀れさの日にもはなれずながら長月十三夜になりぬ

木曾の瘦もまだ直らぬに後の月 (同)

素堂亭

いさよひのいづれか今朝に残る菊 (芭蕉翁發句集)

夕顔や秋はいろ／＼の飄かな (同)

西行の草鞋もかゝれ松の露 (同)

(一)「庭園集」に

「尾張十越路
人となればな
り栗飯茶の市
たよりに日中
に隠れ二日遊
とめ三日つとめ
び三日つとめ
性酒をこのみ
酔和する時は
平をうたふは
これ我友な
り」とあり
この句出づ

(二)「泊船集」に
「信濃路を通
りて」と前書
あり「芭蕉翁
「深川草庵」に
「亡甲信濃行信
濃を過ると
て」とあり
さらば天和二
年の作なり
(三)「芭蕉句選」に
「朝寒も」とあ
り

(四)「芭蕉句選」に
「書簡に『蛤に
けふは』とあ
り
(五)「芭蕉句選」に
「は『我肩にあ
る』とあり
「雪丸け」伊
「達衣」等には
「たつ」とあり

行秋や身に引きまよふ三布蒲團 (同)

留主の間にあれたる神の落葉哉 (同)

二人見し雪はことしも降りけるか (同)

口上に書おとしけり土大根 (もとの水)

御命講や油のやうな酒五升 (鹿獅子集)

雪ちるや穗屋の薄のかり残し (猿 篋)

大通庵の主道圓居士芳名をきく事久しきまゝにまみえむ事を契りて終にその日を待たず初冬一夜の霜と消えぬけふは、や一めぐりにあたるといふを聞きて

そのかたち見ばや枯木の杖の長 (小 文 庫)

冬籠りまた寄り添はむ此はしら (芭蕉翁發句集)

生きながら一つに氷る海鼠かな (同)

少年をうしなへる人に

埋火も消ゆや泪の煮る音 (同)

臘梅や昔永井の金わたし (芭蕉翁句鑑)

年波や蟻があまたの伊勢参り (同)

盗人にあうた夜もあり年の暮 (同)

皆拜め二見の七五三を年の暮 (一 葉 集)

朝よさをたれ松島ぞ片こゝろ (芭蕉翁發句集)

貞享年中

發句なりばせを桃青宿の春 (芭蕉翁選拾遺)

元祿二年

元日に田毎の日こそ戀しけれ (芭蕉翁發句集)

正月も美濃と近江や閏月 (もとの水)

蒔藟にけふは賣りかつ若菜かな (鹿獅子集)

春雨や蓬をのばす草の道 (芭蕉翁發句集)

菴さへ若葉やさしや破れ家 (同)

塔山旅宿にて

陽炎の我肩にたつ紙子かな (同)

酒のみ居る人の輪に (同)

月花もなくて酒のむひとりかな (同)

半日の雨より長し糸櫻 (芭蕉翁句鑑)

歌よみの先達多し山櫻 (同)

發句集

(一)「蕉翁句鑑」にあり

鶴の巢にあらしの外の櫻かな (芭蕉翁句鑑)

田家春の暮を思ふ

入相の鐘も聞えず春の暮 (同)

留別

鮎の子の白魚送るわかれかな (同)

住める方は人に譲り杉風が別墅にうつるに

草の戸も住みかはる代ぞ鎌の家 (奥の細道)

千じゆといふ所にて船を上れば前途三千里の思ひ胸にふさがりて幻のちまたに離別の涙をそよぐ

行春や鳥啼き魚の目はなみだ (同)

室八鳥

糸遊に結びつきたるけふりかな (芭蕉翁發句集)

日光山にて

あらたふと青葉若葉の日の光 (奥の細道)

郭公うらみの瀧のうらおもて (芭蕉翁發句集)

暫時は瀧にこもるや夏のはじめ (奥の細道)

みちのく一見の桑門同行二人那須のしのはらを尋ねてなほ殺生石見むといそぎ侍もほどに雨降り出でければ先づ此所に留る

落来るやたかくの宿の子規 (芭蕉翁發句集)

陸奥にくだらむとして下野國まで旅立けるに那須の黒羽と云所に翠桃何某の住けるを尋て深き野を分入る程道もまがふばかり草ふかければ

馬草負ふ人を枝折の夏野かな (陸奥 齋)

修驗光明寺にて行者堂を拜む

夏山に足駄を拜む首途かな (奥の細道)

雲岸寺の奥に佛頂和尚の山居の跡あり石上の小庵岩窟にむすびかけた

木啄も庵はやぶらす夏木立 (同)

那須雲岸寺佛頂禪師の小庵を尋ねて

留主に來て棚さがしする藤の花 (芭蕉翁句鑑)

那須の温泉大明神の相殿に八幡宮を移し奉りて兩神一方に拜まれ給ふ

湯を結ぶちかひもおなじ岩清水 (芭蕉翁發句集)

むすぶよりはや齒にひびく清水かな (一葉集)

殺生石はその石の毒氣いまだほろびず蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬ程かさなり死す

石の香や夏草赤く露暑し (芭蕉翁句鑑)

秋鴉主人の佳景に對す

しのぶの里もぢぢりの石を尋ねて

早苗とる手もとや昔しのぶ摺 (奥の細道)

田や麥や中にも市の時鳥 (芭蕉翁句鑑)

佐藤莊司が舊跡の寺に義經の大刀辨慶が笈をとめて什物とす

笈も太刀も五月にかざれ紙幟 (奥の細道)

みのお笠島の道祖神も此ごろの五月雨に道いとあしく身つかれ侍ればよそながら眺めやりて

笠島はいづこ五月のぬかり道 (同)

阿武隈川の水もとにて

五月雨は瀧降埋む水かさ哉 (芭蕉翁句鑑)

武隈の松が根は土際より二木にわかれて昔の姿うしなはずと知らる皁白といふものゝ武隈の松見せ申で遅櫻と餞別したりければ

櫻より松は二木を三月ごし (奥の細道)

仙臺に入るあやめふく日なり畫工嘉右衛門と云ふものあり紺の染緒付けたる草鞋を餞す

あやめ草足にむすばむ草鞋の緒 (同)

松島

島々や千々にくできて夏の海 (芭蕉翁句鑑)

松島や水を衣裳に夏の月 (同)

(一)「芭蕉翁句鑑」にあり

(二)「奥の細道」にあり

(三)「伊達衣」にあり

(四)「桑門可伸」にあり

(五)「雪丸」にあり

(六)「かくれ家」にあり

(七)「花を軒の栗」とあり

(八)「芭蕉翁發句集」にあり

(九)「芭蕉翁發句集」にあり

(一〇)「芭蕉翁發句集」にあり

(一一)「芭蕉翁發句集」にあり

(一二)「芭蕉翁發句集」にあり

(一三)「芭蕉翁發句集」にあり

(一四)「芭蕉翁發句集」にあり

(一五)「芭蕉翁發句集」にあり

(一六)「芭蕉翁發句集」にあり

(一七)「芭蕉翁發句集」にあり

(一八)「芭蕉翁發句集」にあり

(一九)「芭蕉翁發句集」にあり

(二〇)「芭蕉翁發句集」にあり

(二一)「芭蕉翁發句集」にあり

(二二)「芭蕉翁發句集」にあり

(二三)「芭蕉翁發句集」にあり

(二四)「芭蕉翁發句集」にあり

(二五)「芭蕉翁發句集」にあり

(二六)「芭蕉翁發句集」にあり

(二七)「芭蕉翁發句集」にあり

(二八)「芭蕉翁發句集」にあり

を思ひ催し侍
れどこのころ
の雨にみかさ
まさりて河を
渡る事かなは
ずといひてや
みにければ
と前書あり
(七)「抽珍鈔」には
出せり、「一葉
集」に「この句
考證の部に
(八)「一葉集」にこ
の句、考證の
部におく、な
ほ同書に「夏
を衣裳の水と
月」とあり
(九)「佛指生駒堂」
に「平泉古職
場路亦が語り
しを聞て」と
前書ありて、
この句出づ。
但し「兵ども
の」とあり。
これを信ぜば
頃地を見ざる
頃の作となる
(一〇)「初蟬集」に
「さびしきや
岩にしみ込
とあり、「こが
らし」に「さ
びしさの」と
あり
(一一)「雪丸け」に

高館

夏草や兵どもが夢のあと (奥の細道)
光堂は三代の棺を納め三尊の佛を安置す七寶散りう
せて珠の扉風にやぶれ金の柱霜雪に朽て既類廢空虛
の叢となるべきを四面新に圍て雲を覆て風雨を凌暫
時千歳の記念とはなれり
五月雨の降りのこしてや光堂 (同)
三日風雨あれてよしなき山中に逗留す
蚤虱馬の尿する枕もと (同)
百里來たるほどは雲井の下涼し (芭蕉翁發句集)
尾花深清風亭
涼しさをわが宿にしてねまるなり (奥の細道)
遣ひ出でよかひやが下のひきの聲 (同)
まゆはきを俤にして紅粉の花 (同)
立石寺
閑さや岩にしみ入る蟬の聲 (同)
仙人堂岸に立つ水漲りて舟あやふし
五月雨をあつめて早し最上川 (同)
風の香も南に近し最上川 (芭蕉翁發句集)
新莊風法亭興行

谷の奥水空尋ぬる柳かな

羽黒山に登る會覺阿闍梨の憐愍の情こまやかにして
南谷の別院に合して
有難や雪をかをらす南谷 (奥の細道)
涼しさやほの三日月の羽黒山 (同)
雲の峰いくつ崩れて月の山 (同)
語られぬ湯殿にぬらす袂かな (同)
羽黒山に籠りて後鶴が岡にいたり重行亭にて
めづらしや山を出羽の初なすび (芭蕉翁發句集)
酒田の淡園庵不玉の許にて
あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ (奥の細道)
寺島彦分亭 (一葉集)
暑き日を海に入れたり最上川 (同)
象潟や雨に西施がねふの花 (同)
汐越や鶴はぎぬれて海すゞし (同)
小鯛さす柳すゞしや海士が軒 (芭蕉翁發句集)
花の上滑ぐとよまれし櫻の老木西行法師の記念をの
こす
夕ばれや櫻にすゞむ浪の花 (同)
コウチ法印の靈地にて

大石田高野
平左衛門亭に
て「と前書あ
りて「あつと
て涼し」とあ
り
(一二)「芭蕉翁發句
集」に「水の奥」
とあり
(一三)「花つみ」に
「雪をめぐら
す風の香」と
あり
(一四)「類柑子」に
「海島曲浦長
汀の吟」とあ
り、「類」に
「あつみ山」と
ありて「や」の
字なし
(一五)「一葉集」に
「抽」浦の「眺
望」と前書あ
り、「雪丸け」
に「すゞしき
や海に入ら
る」とあり
(一六)「芭蕉句選」に
「象潟の雨や
西施が合歡の
花」とあり
(一七)「雪丸け」に
「海士が妻」と
あり
(一八)「芭蕉翁發句
集」に「花
拾遺」に「花
ヲうへこぐと

みな月やから鮭拜む野栖山

越後の國出雲崎といふ所より佐渡が島へは海上十八
里となり初秋のうす霧立ちもあへず流石に波も高か
らざればたゞ手の上の如くに見わたさるゝ
荒海や佐渡によこたふ天の川 (奥の細道)
文月や六日も常の夜には似ず (同)
越後の新潟にて
海にふる雨や戀しきうき身宿 (芭蕉翁發句集)
高田醫師細川青庵にて
薬園にいづれの花を草枕 (雪丸け)
枕引きよせて寝ねたるに一間隔てゝ若き女の聲二人
ばかりと聞ゆ年老いたる男の聲も交りて物語するを
聞けば越後の國新潟といふ所の遊女なりし伊勢參宮
するとして此園までをこの送りて翌は故郷へかへす
文したゝめてはかなき言傳などしやるなり
一家に遊女も寝たり萩と月 (奥の細道)
加賀の國に入る
わけの香や分け入る右は有磯海 (同)
一笑といふものは此道にすける名のほのく聞えし
に去年の冬早世したりとてその兄追善を催すに
塚も動け我が泣く聲は秋の風 (同)

加賀の國を過ぐるとて

熊坂がゆかりやいつの玉まつり (芭蕉翁發句集)
少幻庵にいざなはれて
秋すゞし手毎にむけや瓜茄子 (奥の細道)
くりからや二度起きても落し水 (芭蕉翁發句集)
旅愁なぐさめかねてものうき秋もやゝいたりぬれば
流石に目に見えぬ風の香づれもいと悲しくなるに
残暑猶やまさりければ
あか〜と日はつれなくも秋の風 (奥の細道)
柳陰軒にて
散る柳あるじも我も鐘を聞く (芭蕉翁發句集)
小松といふ所にて
しをらしき名や小松ふく萩すゞき (奥の細道)
観水亭雨申の會
ぬれて行く人もをかしや雨の萩 (芭蕉翁發句集)
太田の神社にて實盛が甲錦の切あるを見て
むざんやな甲の下のきり〜す (奥の細道)
那谷寺とは那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ奇石
さま〜に古松植ゑならべて殊勝の土地なり
石山の石より白しあきの風 (同)

山中の温泉

よみ給ひけむ
古きくらも
いまだ蜷函寺
の後に残して
かげ波をひた
せる夕晴いと
涼しければ
と前書あり

(二五)「一葉集」に
この句、考證の
部におく

(二九)「みとせ草」に
「醫家入」と前
書ありて「藥
欄」にあり

「俳諧集」に
あり、芭蕉翁發
句集に「藥
欄」とあり

(三〇)「編者云」いづ
む「この誤なら
む

(三二)「西の雲」に
「殘暑しはし」
「約塞」に「秋
の故事」に「花
の幻庵にて」
「碧智く手毎に
れうれ」とあ
り

(三三)「芭蕉句選」に
「加賀の小松
にて」と前書
あり、「雪丸
け」に「をか
き」とあり

山中や菊はたをらぬ湯のほひ (奥の細道)

この處十景あつて高瀬の漁火と云その一つなれば

いさり火にかじかや浪の下むせび (東西夜話)

湯の名残幾度見るや霧の本 (芭蕉翁眞蹟拾遺)

湯の名残今宵は肌寒からむ (同)

桃天の名をつけて (同)

桃の木その葉ちらすな秋の風 (芭蕉翁發句集)

遠流の天行法印を悼む

その玉を羽黒にかへせ法の月 (同)

曾良に別るゝとて (同)

今日よりや書付消さむ笠の露 (奥の細道)

全昌寺にとまる曙の空かく堂下に下るを僧ども紙

視をかへて追ひ来る折ふし庭の柳の散りければ (芭蕉翁發句集)

庭掃て出づるや寺に散る柳 (奥の細道)

浅水の橋をわたる俗にあさうづといふ清少納言の橋

はとありて一條あさむつのと書ける所とぞ

あさむつや月見の旅の明けはなれ (芭蕉翁發句集)

月見せよ玉江の芦をからぬ先 (同)

燈が山

よみ給ひけむ
古きくらも
いまだ蜷函寺
の後に残して
かげ波をひた
せる夕晴いと
涼しければ
と前書あり

(二五)「一葉集」に
この句、考證の
部におく

(二九)「みとせ草」に
「醫家入」と前
書ありて「藥
欄」にあり

「俳諧集」に
あり、芭蕉翁發
句集に「藥
欄」とあり

(三〇)「編者云」いづ
む「この誤なら
む

(三二)「西の雲」に
「殘暑しはし」
「約塞」に「秋
の故事」に「花
の幻庵にて」
「碧智く手毎に
れうれ」とあ
り

(三三)「芭蕉句選」に
「加賀の小松
にて」と前書
あり、「雪丸
け」に「をか
き」とあり

義仲の寢覺の山か月悲し (同)

金澤の北枝といふもの見送りて此處までしたひ来る

今既に別に望みて (同)

物書て扇引きさく餘波かな (奥の細道)

湯尾崎 (同)

月に名を包みかねてやいもの神 (芭蕉翁發句集)

教習守榮院 (一葉集)

門に入れば蘇鐵に蘭のほひ哉 (芭蕉翁發句集)

宿教習 (一葉集)

あの雲は稻妻を待つたよりかな (芭蕉翁發句集)

氣比の明神に夜參す往昔遊行二世の上人自ら土石を

荷ひ泥濘をかかわせて參詣往來の煩ひなし古例今に

絶えず神前に眞砂を荷ひ給ふ是を遊行の砂持と申侍

る (同)

月清し遊行のもてる砂の上 (奥の細道)

等我に尋逢て (同)

名月の見處間はむ旅寢せむ (芭蕉翁句鑑)

教習にて (同)

名月や北國日和さだめなき (奥の細道)

濱

月のみか雨に相撲もなかりけり (一葉集)

鐘が時にて (同)

月いづこ鐘はしづめる海の底 (芭蕉翁發句集)

種濱に遊ぶ (同)

寂しさや須磨にかちたる濱の秋 (奥の細道)

浪の間や小貝にまじる萩の塵 (同)

小はぎ散れますほの小貝小さかづき (芭蕉翁發句集)

想水別墅 (同)

籠り居て木の實草の實拾はゞや (同)

木因亭 (同)

かくれ家や月と菊とに田三反 (同)

胡蝶にもならで秋ふる菜虫かな (芭蕉句選)

如行亭 (同)

瘦せながらわりなき菊のつぼみかな (芭蕉翁發句集)

如行が席上の饗應を制して (同)

白露のさびしき味をわするゝな (袖日記)

左柳亭 (同)

はやく咲け九日も近し菊の花 (笈日記)

發句集 (同)

發句集 (同)

發句集 (同)

濱

斜暈平戸をひらけば西に山あり伊吹といふ花にもよ

らず雲にもよらずたゞこれ孤山の徳あり (同)

そのまゝに月もたのまじ伊吹山 (同)

旅の物うさもいまだ止まざるに長月六日になれば伊

勢の遷宮拜まむと又舟にのりて (同)

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ (奥の細道)

内宮はことをさまりて外宮の遷宮拜み侍りて (同)

たふとさにみな押合ひぬ御遷宮 (芭蕉翁發句集)

宇治の中村といふ所にて (同)

秋風や伊勢の墓原猶すこし (同)

伊勢の國又玄が宅にとゞめられ侍るところその妻の男

の心にひとしくものごとまめやかに見えれば旅の

心を安くし侍りぬかの日向守の妻髪を切て席をまら

けられし心ばせ今更申出でて (一葉集)

月さびよ明智が妻のはなしせむ (芭蕉翁發句集)

菊の露落ちて拾へばぬかご哉 (同)

遊女畫譜 (同)

枝ぶりの日にくかはる芙蓉哉 (同)

蜻蛉やとり付きかねし草の上 (同)

茸狩やあぶない事に夕しくれ (同)

伊賀山越 (芭蕉翁句鑑)

はつ時雨猿も小裘をほしげなり (猿 篋)
みの虫やおのれひとり冬の構 (芭蕉翁發句集)

人々をしぐれよ宿は寒くとも (同)

冬庭や月もいとなる虫の吟 (同)

初雪に兎の皮の髭作れ (同)

いざ子ども走りありかむ玉あられ (同)

金屏の松の古びや冬ごもり (同)

はつ雪やいつ大佛の柱たて (同)

先づ祝へ梅を心の冬ごもり (同)

いかめしき音や霞の檜木笠 (同)

長嘯の墳もめぐるか鉢たき (一葉集)
勝所草庵を人々訪ひけるに (芭蕉翁發句集)

何にこの師走の市に行くからす (同)

元禄三年

都ちかき所に年をとりて (同)

薦を着て誰人いまず花の春 (芭蕉翁發句集)

澄や伊勢の白子の店さらし (同)

うたがふならしほの花も浦の春 (芭蕉翁發句集)

暖簾の奥ものゆかし北の梅 (同)

うぐひすの笠落したる椿かな (同)

陽炎や柴胡の原の薄曇り (同)

一里はみな花守の子孫かや (同)

似合はしや豆粉めしに櫻がり (同)

淺水、玉江、揚屋、燧山の句を並べその次に「雪」と云ふ題を出してこの句を出だせり
芭蕉翁發句集に「猿の髭」と書けり
素蘭の「奥の細道」にも其角筆の同書とあれど「泥濘」の誤ならむ
芭蕉翁發句集に「一葉集」に「仲秋の夜つるがに泊りぬあるじの物語の沈みて待るを國の守のあまをいづるをさへ給へど龍頭下ざまに落ち引揚ぐべきたよりもしと聞きて」と前書あり
芭蕉翁發句集に「秋の聲」とあれど、甲に誤なり、

伊賀の山中にて (一葉集)

種芋や花のさかりを賣りありく (芭蕉翁發句集)
此種と思ひこなさじ厨がらし (芭蕉翁發句集)

土手の松花や木ぶかき殿作 (一葉集)

不性さやかき起されし春の雨 (芭蕉翁發句集)

畠うつ音やあらしの櫻あさ (芭蕉翁發句集)

雲雀啼く中の拍子や雉子の聲 (同)

蛇くふと聞けば恐ろし雉子の聲 (同)

木のもと汁も鱈もさくらかな (同)

四方より花吹き入れてにほの海 (芭蕉翁發句集)

當歸よりあはれは墳のすみれ草 (同)

草の葉を落つるより飛ぶ螢かな (同)

ほたる見や船頭酔うて覺東な (同)

石山のおく國分山といふ處に人の住捨てたる庵あり

幻住庵といふ清陰梨微の住境いとめでたき眺望になむ侍れば卯月のはじめ尋入りて

先づたのむ椎の木もあり夏木立 (同)

夕にも朝にもつかず瓜の花 (同)

花と實と一度に瓜のさかり哉 (同)

わが宿は蚊の小さきを馳走哉 (同)

日の道や葵かたぶく五月雨 (同)

頼のまつり見て來よ瀬田のおく (同)

夏山や紙すく里は飯時分 (芭蕉翁發句集)

やがて死ぬけしきは見えす蟬の聲 (芭蕉翁發句集)

鼓子花のみじか夜ねふる晝間哉 (同)

旅癖や寝冷煩ふ秋の山 (芭蕉翁發句集)

發句集

「奥の細道」に「一葉集」に「仲秋の夜つるがに泊りぬあるじの物語の沈みて待るを國の守のあまをいづるをさへ給へど龍頭下ざまに落ち引揚ぐべきたよりもしと聞きて」と前書あり
芭蕉翁發句集に「秋の聲」とあれど、甲に誤なり、
芭蕉翁發句集に「一葉集」に「仲秋の夜つるがに泊りぬあるじの物語の沈みて待るを國の守のあまをいづるをさへ給へど龍頭下ざまに落ち引揚ぐべきたよりもしと聞きて」と前書あり
芭蕉翁發句集に「秋の聲」とあれど、甲に誤なり、

物は其かた下にあらざ下位に在ても上智の人ありといへり猶石心鐵肝たゆむことなかれあるじも其善をわするべからずと前書あり

(四二)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(四三)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(四四)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(四五)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(四六)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(四七)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(四八)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

蒟蒻と柿とうれしき草の庵 (芭蕉翁發句集)
合歡の木の葉ごしもいとへ星の影 (同)

木曾墳草庵墓所近し
魂まつりけふも焼場のけふりかな (同)

木曾墳の舊草にありて敵戸の人々に對す
草の戸をしれや穂藪に唐がらし (同)

撫子の曇さわする、野菊かな (芭蕉翁發句集)
田莊酒家(一葉集)

桐の木に鶉啼くなる堀の内 (同)
稻雀茶の木はたけや逃所 (芭蕉翁發句集)

頂いて落穂拾はむ關の前 (芭蕉翁發句集)
白髪ぬく枕の下やきりくす (芭蕉翁發句集)

洛の桑門雲竹自らの像にやあらむあなたの方に顔ふりむけたる法師を畫きてこれに讀せよと申されければ君は六十年あまり予は既に五十にちかしとも夢中にして夢の形をあらはす是にくはふるに寢言をもつてす

こちらむけ我もさびしき秋の暮 (同)
九月九日乙州が一樽を携へ來りければ

草の戸や日暮れてくれし菊の酒 (同)

舊里の道すがら
時雨るゝや田のあら株の黒むほど (同)

きりくすわすれ昔に啼く火燧かな(同)
木がらしや頬はれいたむ人の顔 (同)

冬知らぬ宿や扱する音あられ (芭蕉翁發句集)
大津にて

三尺の山もあらしの木の葉かな (同)
洛御靈別當景桃丸興行

半日は神を友にやとしわすれ (同)
いねく人と人に言はれても猶喚ひあらず旅のやどりの殊更寒き居心を詫びて

住みつかぬ旅のこゝろや置炬燵 (同)
旅行

はつ雪や聖小僧の笈の色 (同)
大雪や婆々ひとり住む藪の家 (芭蕉翁發句集)

ふるき世をしのびて
霜の後なでしこ咲ける火桶かな (同)

果の朝日の朝から

之部「花のさかりに」とあり、書簡に「手種」とあり

(四九)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(五〇)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(五一)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(五二)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(五三)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(五四)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(五五)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(五六)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

(五七)「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」
「芭蕉翁發句集」

節季候の來れば風雅も師走かな (同)

かくれけり師走の湖のかいつふり (己ヶ光)
行脚の五器一具難波に残し置きたるを年経て路通が送りけるを見て

これや世の煤にそまらぬ古盒子 (芭蕉翁發句集)
おのが音の誰人となむ世にきたせられて老の後志賀の里にかくれ侍りしとなりいま大津松本あたり智月といふ老尼のもとに尋ねてかゝる事など語りけるつひでおもしろさに

少將の尼のはなしや志賀の雪 (同)
支梁亭口切の日

口切に堺の庭ぞなつかしき (同)
湖水眺望

比良三上雪かけわたせ鷺の橋 (同)
から鮭も空也の瘦も寒の内 (同)

まだ埋火の消えやらす臘月すゑ京都を立出で乙州が新宅に春をもちて

人に家をかはせて我は年わすれ (同)

元祿四年

湖頭の無名庵に春をむかふ時三日口を閉ちて 題正 月四日

大津繪の筆のはじめは何佛 (同)
乙州が江戸へ赴く時

梅わか菜まりこの宿のとろゝ汁 (同)
山里は萬歳遅しうめの花 (同)

卓袋亭月待 (同)
月待や梅かたげ行く小山伏 (同)

古川にこびて芽をはる柳かな (一葉集)
田家において 二句

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻 (芭蕉翁發句集)
こまかなる雨や二葉の茄子だね (同)

葉にそむく椿や花の餘所心 (芭蕉翁發句集)
尙白と難波へ行く時 (同)

たゞ一夜桃に宿借る木幡かな (同)
春の夜は櫻にあけてしまひけり (芭蕉翁發句集)

萬手別墅
年々やさくらをこやす花のちり (同)
尾張の人より淡酒一樽木曾の獨活茶一種送りしを門人にひろむるとて

句前書に『四月廿七日』とあり
 『泊船集』に『けしき』とあり
 『一葉集』に『奇香』とあり
 『芭蕉句選』に『机の下や』とあり
 『火桶』ともあり
 『芭蕉句選』に『来ては』とあり
 『小文庫』に『筆のはじめ』とあり
 『芭蕉句鑑』に『春雨や』とあり
 『芭蕉句鑑』に『前踏ふる』とあり
 『芭蕉句鑑』に『春雨や』とあり
 『芭蕉句鑑』に『種をとりて』とあり
 『芭蕉句鑑』に『種此たねとお』とあり
 『芭蕉句鑑』に『唐辛子芋種や』とあり
 『芭蕉句鑑』に『花の盛を費り』とあり
 『芭蕉句鑑』に『へるまゝに申』とあり

飲明けて花生にせむ二升樽 (芭蕉翁發句集)
 花のかげ硯にかはるまる瓦 (芭蕉翁句鑑)
 雪間より薄むらさきの芽獨活かな (一葉集)
 嵐山にて (芭蕉翁句鑑)
 花の山二町のぼれば大悲閣 (芭蕉翁句鑑)
 留主といふ小僧なぶらむ山櫻 (同)
 句空への文に (同)
 うらやまし浮世の北の山櫻 (同)
 山吹や笠にさすべき枝の形 (芭蕉翁發句集)
 相國寺にて (芭蕉翁句鑑)
 鶯に感ある竹のはやしかな (同)
 山吹や宇治の焙爐の匂ふ時 (同)
 支考東行の餞別 (芭蕉翁句選)
 此ころ推せよ花に五器一具 (同)
 雀子と聲啼きかはす鼠の巢 (同)
 闇の夜や巢をまどはして啼く千鳥 (同)

裾山や虹吐くあとの夕つゝじ (芭蕉翁句鑑)
 望湖水惜春 (芭蕉翁發句集)
 行春を近江の人と惜しみける (同)
 京にても京なつかしや時鳥 (同)
 短夜や驛路の鈴の耳につく (芭蕉翁句鑑)
 手をうてば木魂に明くる夏の月 (芭蕉翁發句集)
 夏の夜は木魂に明くる下駄の音 (芭蕉翁句鑑)
 光明寺にて (同)
 汗の香に衣ふるはむ行者堂 (同)
 蟻帳にて (同)
 子規大竹原をもる月夜 (芭蕉翁句選)
 あらし山藪のしげりや風の筋 (芭蕉翁發句集)
 小督屋敷にて (同)
 うきふしや竹の子となる人の果 (同)
 竹の子や稚き時の繪のすさみ (同)
 或寺にひとり居て (同)
 うき我をさびしがらせよかんこ鳥 (同)
 落柿舎 (同)
 袖の花にむかし忍ばむ料理の間 (同)

ついで鏡御芳 (芭蕉翁句鑑)
 存候以上 (芭蕉翁句鑑)
 三月廿三日 (芭蕉翁句鑑)
 嵐雪丈とあり (芭蕉翁句鑑)
 『陸奥傳』に『加州白山奉納』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『浮世の北』に『序文に』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『はげを庵の』に『武の深川』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『り越のしらね』に『れし奉納の句』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『あり』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『芭蕉翁句鑑』に『察せよ』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『泊船集』に『夏』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『陸奥傳』に『冬』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『の部にのせた』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『一葉集』に『の句考證の』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『小文庫』に『月』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『芭蕉翁發句集』に『大竹』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『芭蕉翁發句集』に『大竹』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『この句の前書』とあり (芭蕉翁句鑑)
 『この句元祿二』とあり (芭蕉翁句鑑)

五月雨や色紙へきたる壁のあと (蝶嶺日記)
 粽結ふ片手にはさむひたひ髪 (芭蕉翁發句集)
 麥の穂や涙に染て啼雲雀 (同)
 ひと日く麥あからみて啼雲雀 (芭蕉翁句鑑)
 能なしのぬふたし我を行々子 (芭蕉翁發句集)
 正成像鐵肝石心此人之情 (同)
 撫子にかゝるなみだや楠の露 (同)
 酔て寝む撫子咲ける石の上 (同)
 丈山の像に調す (芭蕉翁句選)
 風かをる羽織や襟もつくろはず (芭蕉翁發句集)
 水無月はふく病やみの曇かな (芭蕉翁發句集)
 井狩氏水樓 (同)
 世の夏や湖水にうかぶ波のうへ (同)
 己が火を木々の螢や花の宿 (同)
 四條の川原すゞみとて夕月夜の頃より有明過ぐる頃 (同)
 まで川中に床をならべて夜すがら酒のみ物くひ遊ぶ (同)
 女は帯の結びめいかめしく男は羽織ながう着なして (同)
 法師老人共にまじはり桶屋かちやの弟子々までいと (同)
 ま得顔にうたひのしるさすすがに都のけしきなるべし (同)

川風や薄かき着たる夕すゞみ (己ヶ光)
 本間主馬が亭にまねかれしに大夫が家名を稱して (同)
 ひらく／＼とあぐる扇や雲の峯 (芭蕉翁發句集)
 丹野が舞臺にあそびて (同)
 選の香に目をかよはずや面の鼻 (浮世の北)
 大津湖仙亭 (芭蕉翁發句集)
 此宿は水鶏もしらぬ扉かな (芭蕉翁發句集)
 曲翠亭に遊て田家といへる題を置て (同)
 飯あふく鳴が馳走や夕涼み (芭蕉翁句鑑)
 はつ秋やたゞみながらの蚊屋の夜着 (芭蕉翁發句集)
 盆過ぎて宵聞くらし蟲の聲 (同)
 秋風の吹けども青し栗のいが (同)
 坐右銘 人の短をいふことなかれ (同)
 己が長をいふことなかれ (同)
 ものいへば唇さむし秋の風 (同)
 牛部屋に蚊の聲聞き残暑哉 (同)
 畫 露もこぼさぬ萩のうねりかな (同)
 霧雨の空を芙蓉の天氣かな (同)

年伊勢桑名郡長島村の大智院に宿りし時の吟にて、その座五「秋の寺」とあり

或智識のたまはくなま禪大疵のもととかやいと有難く覺えて

稲妻にさとらぬ人のたふとさよ (己ヶ光)

粟津にて (芭蕉翁發句集)

稲妻や海の面をひらめかす (芭蕉翁發句集)

正秀亭初會 (一葉集)

月代や膝に手をおく宵の内 (芭蕉翁發句集)

名月やわが家へもどる門徒坊 (芭蕉翁發句集)

於義仲庵 (同)

三井寺の門たゝかばやけふの月 (芭蕉翁發句集)

米くるゝ友をこよひの月の客 (同)

古寺飯月 (同)

名月や兒達ならば堂の縁 (同)

名月や海にむかへば七小町 (同)

名月や坐に美しき顔も無し (同)

望月の殊興翁やまず二三子いさめて舟を堅田の浦に

はす (同)

鎖明けて月さし入れよ浮御堂 (同)

いざよひや海老煮るほどの宵の闇 (芭蕉翁發句集)

打出の濱にて (類柑子)

やす／＼と出でいざよふ月の雲 (同)

堅田にて 二句 (一葉集) (芭蕉翁發句集)

病雁の夜寒に落ちて旅寝かな (同)

蟹の屋は小海老にまじるいと哉 (同)

曲翠亭にて 題夜寒 (同)

乳麵の下焼立る夜寒かな (同)

東寺を過ぐるに (同)

萩の穂や頭をつかむ羅生門 (同)

むかし聞けちゝぶ殿さへ相撲取 (同)

猿引は猿の小袖をきぬたかな (同)

驚の目も今や暮れぬと啼く鶉 (同)

鬼灯は實も葉もからも紅葉哉 (同)

柴の庵ときけばいやしき名なれども世にこのもしき物にぞありける此歌は東山に住みける僧を尋ねて西行のよませ給ひけるよし山家集に載せられたりといかなる住ひにやとまづその坊のなつかしければ (同)

柴の戸の月やそのまゝ阿彌陀坊 (同)

見所のあれや野分の後の菊 (同)

田家にやどりて (同)

風」とありきとあり

「類柑子」にあり

「白書讀」にあり

「芭蕉句選」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

「芭蕉翁發句集」にあり

稲こきの姥もめでたし菊の花 (同)

大門通を過ぐるにて (同)

琴箱や古もの店の背戸の菊 (同)

堅田の何某木匠師の兄の亭に招かれて自ら茶をたて酒をもてなされる野菜八珍の中に菊花の繪いと芳しければ (同)

蝶も来て酔を吸ふ菊の繪かな (同)

同柳瀬可休亭 (同)

祖父と親その子の庭や柿みかん (同)

秋風や桐に動きて蕩の霜 (同)

尾の露川より宮重をおくり来る (同)

三十里尾張大根のはなしかな (芭蕉翁發句集)

庵にかけむとて句空がかゝせける兼好の繪に (同)

庵の秋ぬかみそ壺もなかりけり (はゝそ原)

しづかさや繪かゝる壁のきりくす (一葉集)

大風のあしたも赤し唐がらし (同)

野水が旅行を送りて (同)

見送りのうしろや寂し秋の暮 (同)

石山に詣でける道 (同)

見送りのうしろや寂し秋の暮 (同)

石山に詣でける道 (同)

見送りのうしろや寂し秋の暮 (同)

石山に詣でける道 (同)

橋桁のしのぶは月の名残かな (芭蕉翁發句集)

旅窓長夜 (同)

九度起きても月の七つかな (同)

月の澤と聞え侍る明照寺に羈旅の心を澄して尊かるなみだや染めてちる紅葉 (同)

同寺御堂奉加の詞書に曰く竹樹密に土石老いたりと誠に木立物ふりて殊勝に覺え侍れば (同)

百年のけしきを庭の落葉かな (同)

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜 (同)

かりて寝む案山子の袖や夜半の霜 (芭蕉翁發句集)

美濃垂井の宿垣外がもとに冬籠して (同)

作り木の庭をいさめる時雨かな (同)

美濃耕雲別墅 (同)

木がらしにほひやつけし歸り花 (同)

千川亭 (同)

折々に伊吹を見てや冬ごもり (芭蕉翁發句集)

菊の後大根の外さらになし (同)

熱田梅人亭裏の閑を思ひよせて (同)

水仙や白き障子のともうつり (芭蕉翁發句集)

見送りのうしろや寂し秋の暮 (同)

石山に詣でける道 (同)

見送りのうしろや寂し秋の暮 (同)

石山に詣でける道 (同)

發句集

「いざよふ月
見かな」とあ
り
「一葉集」に
あり
「芭蕉句選」に
あり
「芭蕉の日の」と
あり
或實蹟に「草
の戸の」とあ
る旨「芭蕉句
選年考」に記
せり
「同突」に「片
田阿某が亭に
て」とあり
「芭蕉句選」に
「酢和哉」とあ
り
「一葉集」に
「森淵」とあ
り「蘇のさか
えや」とある
集もあり
「赤草紙」に、
はじめは「桐
動く秋のをは
りや萬の霜」と
ありきとあ
り「芭蕉句選」
に「蘇林の景
色を」と前書
あり「芭蕉句
選」に「動
いて」とあり

三河にて白雪といへるものゝ子二人に桃先桃後と名
をつけあたへて

そのほひ桃より白し水仙花 (芭蕉句選)

同新城の家中菅沼權右衛門宅

京に飽てこのこがらしや冬住居 (同)

梅橋早咲ほむ保美の里 (同)

風來寺に參籠して

夜着一つ祈り出したる旅寝かな (同)

木がらしに岩吹きとがる杉間かな (同)

島田の驛塚本が家にいたりて

宿かして名をなのらする時雨哉 (同)

馬がたはしらし時雨の大井川 (同)

霜月はじめ武江にいたる

都出て神も旅寝の日数かな (芭蕉翁發句集)

三秋を經て草庵に歸れば舊友門人日々にむらがり來
りていかにと問へば答へ侍る

ともかくもならでや雪の枯尾花 (同)

日頃にくむ鳥も雪の朝かな (芭蕉句選)

草庵に土あり

木まぐらの油ぬぐふや夜の雪 (芭蕉翁句鑑)

四〇

夷子講酢賣に袴着せにけり (芭蕉翁發句集)

ある家にあるき奴僕ありて堅く聖の教をまもる

兄弟のくすし憎むや河豚汁 (芭蕉翁句鑑)

小町畫譜

たふとさや雪ふらぬ日も衰と笠 (同)

仙化が父の遺書

袖の色よごれて寒しこいねずみ (同)

元起和尚より酒をたまはりけるかへしにたてまつり
ける

水寒く寝入りかねたるかもめ哉 (同)

旅行

煤掃は杉の木の間あらしかな (同)

畫譜

夜すがらや竹氷らする今朝の霜 (同)

素堂亭忘年

さし籠る葎の友か冬菜賣 (同)

節季候を雀のわらふ出立かな (芭蕉翁發句集)

魚鳥の心はしらすとしわすれ (同)

五百丸へ元服の祝として

春や立つまた春や見む此師走 (芭蕉翁句鑑)

行年や藥に見たき梅の花 (同)

元祿五年

人も見ぬ春や鏡のうらの梅 (芭蕉句選)

春もやけしきとふのふ月と梅 (同)

うぐひすや柳のうしろ藪の前 (同)

待ちかねて隣の梅を折りに行く (芭蕉翁句鑑)

鶯や餅に痰する縁の先 (芭蕉翁發句集)

草庵に桃櫻あり門人に其角嵐雪あり

兩の手に桃と櫻や草の餅 (芭蕉句選)

かぞへ來ぬ屋敷々々の梅柳 (同)

猫の戀やむ時間の臘月 (同)

題しらず

木曾の情雪や生えぬく春の草 (同)

おとろへや齒に喰ひあてし海苔の砂 (同)

親子圖譜

白魚や黒き目をあく法の網 (同)

時鳥啼くや五尺のあやめ草 (芭蕉翁發句集)

不卜一周忌祭風動進

郭公啼音やふるき硯箱 (芭蕉句選)

發句集

鎌倉を生きて出でけむ初鯉 (芭蕉翁發句集)

五月雨や蠶わづらふ桑のはた (同)

夕顔や酔て顔出す窓の穴 (同)

子ども等よ畫顔咲きぬ瓜むかむ (同)

晋の調明をうらやむ

窓形に畫寝の豪やかむしろ (同)

水無月や鯛はあれども鹽くちら (同)

素堂の母七十餘り七としの秋七月七日にことぶきす
る菓葉七種をもて題とす

七株の萩の千本や星の秋 (同)

何某の御代官に隨身して四國へおもむく人におくる

七夕や裸視の俄旅 (芭蕉翁句鑑)

草いろ／＼おの／＼花の手がらかな (同)

青くてもあるべきものを唐がらし (同)

この寺は庭一ばいの芭蕉哉 (芭蕉翁發句集)

三日月の地は臘なり蕎麥の花 (芭蕉句選)

名月や門にさしこむ潮がしら (同)

名月や西にもほしき窓一つ (芭蕉翁句鑑)

閉關の説(文集を見よ)の終に

院の御門の賞
めさせ給ふ地
なるによりて
ほら美といふ
由里人の語り
侍るをいづれ
の文に書きと
めたるとも
知らず侍れど
もいとかしこ
く覺え侍るま
い梅椿早咲ほ
めん保美の
里」とあり
(九三)『笈日記』「陸
軍衛」に「新り
出して」とあ
り「芭蕉句選」
に「新り出し
たる寒かた」と
あり
(九四)「一葉集」に
「馬士は」と記
す
(九五)「芭蕉句選年
考」にこの句
元禄六年にや
とあり
(九六)「芭蕉翁發句
集」に「常に
くむ」とあり
(九七)「續猿蓑」に
「肩せにける」
とあり
(九八)「陸奥衛」
に「年のくれ」と
あり

朝顔や晝は鎖おろす門の垣 (芭蕉翁句鑑)
柱は杉風積風が情を削り住ひは曾良借水が物敷寄を
わぶなほ明月のよそほひと芭蕉五本を植ゑて
芭蕉葉を柱に懸けむ庵の月 (同)
松茸やかぶれた程は松の形 (同)
松茸やしらのぬ木の葉のへばり付 (芭蕉句選)
はつ茸やまだ日敷経ぬ秋の露 (芭蕉翁發句集)
小名木澤樹笑興行
秋に添て行かばや末は小松川 (芭蕉句選)
嵐雪におくる
淋しさを問うてくれぬか桐一葉 (芭蕉翁句鑑)
許六を尋ねてあはざりければ柱に書きつけて戻り
ぬ (同)
秋のくれ客か亭主か中柱 (一葉集)
許六が繪に
勝角力いづも上手に米の飯 (同)
秋の野や草の中行く風の音 (同)
行秋の猶たのもしや青蜜柑 (芭蕉翁發句集)
けふばかり人も年よれ初時雨 (同)
鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の棚 (同)

爐開きや左官老いゆく鬢の霜 (同)
深川大橋半かゝりける頃
初雪や掛けかゝりたる橋のうへ (同)
同橋成就せし時
有難やいたゞいて踏む橋の霜 (同)
打ちよりにて花入探れ梅椿 (同)
寝酒なき夜はたのむぞや紙衾 (芭蕉翁句鑑)
月花の愚に針立てむ寒の入 (芭蕉翁發句集)
葱白く洗ひ上げたる寒さかな (同)
納豆きる音しばし待て鉢たゞき (同)
せつかれて年忘れする機嫌かな (同)
蛤のいける甲斐あれ年のくれ (同)

元禄六年
年々や猿に着せたる猿の面 (芭蕉句選)
去來のもとへなき人の事など云遣はずとて
蒟蒻のさしみもすこし梅の花 (芭蕉翁發句集)
梅柳わたすか年の御撫もの (芭蕉翁句鑑)
二月吉日とて是橋が刺髪入醫門を賀す

初午に狐のそりし頭かな (芭蕉翁發句集)
傘に押分け見たる柳かな (同)
肅山子のもとにて探雪が畫ける琴の譜に
ちる花や鳥もおどろく琴の塵 (同)
清水ほど海の流るゝ汐干かな (芭蕉翁句鑑)
ものすきや匂はぬ草にとまる蝶 (同)
鐘つかぬ里は何をか春の暮 (同)
僧専吟餞別
鶴の毛のくろき衣や花の雪 (芭蕉翁發句集)
露沾公にて
西行の庵もあらむ花の庭 (同)
大垣の城主日光御代參勤めさせ給ふに恩從す岡田何
某に送る
笹の露袴にかけし茂り哉 (同)
森川許六餞別 二句
椎の花の心にも似よ木曾の旅 (同)
うき人の旅にもならへ木曾の蠅 (同)
一聲の江に横たふや郭公 (同)
ほととぎす聲横たふや水の上 (同)

なまぐさし小なぎが上の饒の腸 (同)
新麥や竹の子時の草の庵 (芭蕉翁句鑑)
文月七日の夜風雲空にみち白浪銀河の岸をひたして
鳥籠も橋杭をながし一葉棍を折るけしき二星も屋形
をうしなふべし今宵なほ只に過ぎむも残おほしと一
燈かゝげ添る折ふし通照小町が歌を吟ずる人あり是
によつて此一首を探して兩星の心をなぐさめむとす
高水に星も旅寝や岩のうへ (小文庫)
發 畧
夏かけて名月あつき涼み哉 (芭蕉句選)
朝顔や是もまた我が友ならず (芭蕉翁發句集)
老の名の有りとも知らで四十雀 (同)
榎の實ちる棕の羽音や朝あらし (同)
畫 讚
鶏頭や雁の來る時猶あかし (同)
深川のすゑ五本松といふ所に舟さして
川上とこの川下や月の友 (同)
いさよひは僅に闇のはじめかな (同)
嵐蘭を悼

(九五)「芭蕉翁發句集」に「元禄六年に置く」
(九六)「芭蕉翁發句集」に「この句、考證の部におく」
(九七)「芭蕉翁發句集」に「おとろひや」とあり、元禄四年の「西の雲」に「喘當る身のおとろへや海苔の砂」とあり
(九八)「類柑子」に「鎌倉は」とあり
(九九)「約集」には「茶ばたけ」とあり
(一〇〇)「赤草紙」に「はじめは」とあり、「書寝ありて」とあり、
(一〇一)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一〇二)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一〇三)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一〇四)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一〇五)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一〇六)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一〇七)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一〇八)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一〇九)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一〇)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一一)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一二)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一三)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一四)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一五)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一六)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一七)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一八)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一一九)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、
(一二〇)「芭蕉翁發句集」に「浮世の北」とあり、

あき風に折れて悲しき桑の杖

(芭蕉翁發句集)

嵐蘭初七日詣墓(一葉集)

見しやその七日は墓の三日の月

(芭蕉翁發句集)

東風老人は湖上に生れて東野に終をとれり

入月のあとは机の四隅かな

(同)

露氷亭にて

影まぢや菊の香のする豆腐ぐし

(同)

八町堀にて

きくの花咲くや石屋の石の間

(同)

一露もこぼさぬ菊の水かな

(同)

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る事はその頃花

いまだめぐみもやらず菊花開時節重陽といへる心よ

りかっぱは展重陽のためしなきにしもあらねばなほ秋

菊を詠じて

菊の香や庭にきれたる履の底

(同)

鞍つぼに小坊主のるや大根引

(同)

頭布着た顔さしこむや細漣

(芭蕉翁句鑑)

ふり賣の雁あはれなり夷子講

(芭蕉翁發句集)

寒菊や粉糰のかゝる白のはた

(同)

曲翠旅館にて

埋火や壁には客の影法師

(同)

壁につゝみてぬくし鴨の足

(同)

玄虎子旅館にて柴根を喫して終日丈夫に談話す

武士の大根からき嘶かな

(一葉集)

籬炊に煙霧さく軒の霞かな

(芭蕉翁發句集)

勇み立つ鷹引きすゆる霞哉

(芭蕉翁句鑑)

木曾路にて落馬の時

馬士に落さるゝ身は木の子かな

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

竹の諧

たわみては雪まつ竹のけしきかな

(芭蕉翁發句集)

芹焼やすそ輪の田井の初氷

(芭蕉句選年考)

瓶破るゝ夜の氷の寢覺かな

(芭蕉翁發句集)

探持は己が棚つる大工かな

(同)

有明も三十日にちかし餅の音

(同)

分別の底たゝきけり年の暮

(同)

元禄七年

蓬萊に聞かばや伊勢の初便

(同)

この句、考證の部におく

(一〇七)「芭蕉翁發句集」に「へばりつき」とあり

(一〇八)「一葉集」に

「此吟は井伊家の邸に許六を尋ねし時竹六たまし、家にあらざるを待つらるの作なり」とぞ其中柱といふもの

は、今も猶井伊家とありと云ふと註あり

又同書に、この句考證の部におく

(一〇九)「一葉集」に

「この句、考證の部におく」

「芭蕉句選年考」に元禄六年の吟にやと云へり

(一一〇)「一葉集」に

「この句考證の部におく」

「芭蕉翁發句集」と題し

「このむぞよ寝酒なき夜の紙衾」とあり

陸奥街に

「給も」とあり

(一一一)「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

「芭蕉翁發句集」に

『とりわけ聞』とあり
 (一〇)『陸奥衛』にあり
 『のせて』とあり
 (一一)『一葉集』にこの句、考證の部におく
 (一二)貞享元年の『琵琶行』の夜やの再案にやと一句選年考』にいへり
 (一三)『芭蕉翁發句集』『笈日記』に『蘇輪』とあり、これにてスツワとよみしにや
 (一四)『芭蕉翁發句集』『若菜哉』とあり
 (一五)『有識海』などにて『さ』はる柳とあり、これ誤なりと去來云へり
 (一六)『花はさく春雨いと静に降る頃近きあたりなる柳見光きよらかなる中にもしたる』

世を旅に代かく小田の行戻り (芭蕉翁發句集)
 露川がともがら佐屋まで道送りしてともに隠士山田氏が亭にかりねす
 水鶏なくと人のいへばや佐屋泊り (同)
 野水閑居を思ひ立ちけるに
 涼しさは指圖に見ゆる住ひ哉 (同)
 美濃路より李由のもとへ文の音信に
 晝顔に晝寝せうもの床の山 (同)
 藤田氏に遊て
 柴付けし馬の戻りや田植樽 (同)
 雪芝が庭に松を植うるを見て
 涼しさや直に野松の枝のなり (同)
 去來が別墅にて
 朝露によごれて涼し瓜の泥 (同)
 東武より登りて人々に對面す
 東路の毛すねはづかし床涼み (芭蕉翁選拾遺)
 柳ごり片荷は涼し初眞瓜 (芭蕉翁發句集)
 小倉山常寂寺にて
 松杉をほめてや風のかをる音 (同)
 六月や峯に雲おくあらし山 (同)

野明亭
 涼しさを繪にうつしけり嵯峨の竹 (同)
 清瀧や浪に散り込む青松葉 (同)
 夕顔に干瓢むいて遊びけり (同)
 之道に對して
 われに似な二つにわれし眞桑瓜 (同)
 人々つどひて瓜の名所数多いひ出でたる中に
 瓜の皮むいた所や蓮豪野 (同)
 曲翠亭
 夏の夜や崩れて明けしひやし物 (同)
 游刀亭納涼 二句
 さゞ浪や風の薫りの相拍子 (芭蕉翁選)
 湖や暑ををしむ雲の峯 (同)
 天津木節亭
 秋近き心よるや四疊半 (芭蕉翁發句集)
 草庵 二句
 道細し相撲取草の花の露 (同)
 ひや／＼と壁をふまへて晝寝かな (同)
 七夕や秋をさだむる夜のはじめ (同)

りいまだを
 やみなげれ
 ば』と前書あり
 (一七)『芭蕉翁發句集』『芭蕉句選』に『櫻を花と』とせらは誤りて當字したるなり
 (一八)『赤草紙』に『はじめ』涅槃會や』とあり
 (一九)『芭蕉翁發句集』『品川まで送りたる旨記したる』とあり
 (二〇)『泊船集』に『うからに』とあり
 (二一)『芭蕉句選』に『箱根の關越えて』と前書あり
 (二二)『忘水』に『はじめは』飛驒の内匠がさし圖かな』とあり
 (二三)『赤草紙』に『この句は』しめ瓜の土』とあり
 (二四)『一葉集』遺

大津に侍りしを兄の許より消息せられければ舊里に歸りて盆會をいとなみて
 家はみな杖に白髪の墓参り (同)
 屋壽貞が身まかりけると聞きて
 敷ならぬ身とな思ひを玉まつり (同)
 本間主馬が宅に骸骨どもの笛鼓をかまへて能する所を畫きて舞臺の壁に掛けたりまことに生前の戲などか此遊に異ならむやかの御體を枕として終に夢うつゝをわきたざるものもたゞこの生前を示さるゝものなり
 稻妻や顔の所がすゝきの穂 (同)
 稻妻や闇の方行く五位の聲 (同)
 藤堂玄虎子の庭なかに作りしを見て
 風色やしどろに植ゑし庭の萩 (同)
 猪の床にも入るやきり／＼す (同)
 床に來て軒に入るやきり／＼す (芭蕉翁選)
 目にかゝる雲やしばしの渡り鳥 (芭蕉翁發句集)
 冬瓜や互にかはる顔の形 (芭蕉翁選)
 名月の花かと思えて綿蟲 (芭蕉翁發句集)
 名月に麓の霧や田の曇り (同)

みの虫庵にて (芭蕉翁句鑑)
 今宵たれ芳野の月も十六里 (芭蕉翁發句集)
 伊勢の斗笠に山家をとはれて
 蕎麥はまだ花でもてなす山路かな (同)
 片野望翠宅にて
 里ふりて柿の木もたぬ家もなし (同)
 行秋や手をひろげたる栗のいが (同)
 水清くなつて柳の散る日かな (芭蕉翁句鑑)
 南都にて
 菊の香や奈良には古き佛達 (芭蕉翁發句集)
 きくの香や奈良は幾代の男ぶり (同)
 びいと啼く尻聲悲し夜の鹿 (同)
 間峠にて
 菊の香にくらがり登る節句哉 (同)
 生玉邊より日をくらしして
 菊に出て奈良と難波は宵月夜 (同)
 住吉の市に立ちて
 升買て分別かはる月見かな (同)
 車廂亭 二句

語之部」にこの句落柿舎にての吟なる旨見ゆ

(二三五)「忘水」に、はじめは「大井川浪に塵なし夏の月」とありきとあり

(二三六)「鳥の道」に「元祿七年六月廿一日大津木簡庵にて」と前書あり

(二三七)「一葉集」に「秋草庵」と前書あり

(二三八)「一葉集」に「この句の前書は、翠津の庵にて残暑の心を」とあり

(二三九)「泊船集」に「はじめの夜」とあり

(二四〇)「陸田集」に「一家みな白髪に杖や」とあり

(二四一)「一葉集」に「この句、考證の部におく」とあり

(二四二)「西車集」に「此句は伊賀に居給へる時は老女に逢ひて

發句集

秋の夜をうち崩したる嘶かな (芭蕉翁發句集)

おもしろき秋の朝寝や亭主ぶり (同)

白菊の目に立てゝ見る塵もなし (同)

この秋は何で年よる雲に鳥 (同)

秋ふかき隣は何をする人ぞ (同)

清水寺の茶店に遊びけるにあるじの男のふかく望みけるに (同)

松風の軒をめぐりて秋暮れぬ (同)

此道や行く人なしに秋の暮 (同)

人聲や此道かへる秋の暮 (同)

其柳亭 (同)

秋もはやはらつく雨に月の形 (同)

昨止亭にて月下に兒を送るといふ題を置きて (同)

月すむや狐こはがる兒の供 (同)

十月八日病中吟 (同)

旅に病て夢は枯野をかけ廻る (同)

年代不知の部

高き屋にのぼりて見ればの御製のありがたきを今もなほ (芭蕉句選)

寂慮にてにぎあふ民や庭籬 (芭蕉句選)

伊勢に居て見るそらいかに初日の出(近古名流手蹟)

前髪もまだ若草のにほひかな (一葉集)

何某新八去年の二月十三日身まかりしを一周忌の程に父梅丸子の方へ申遣しける (芭蕉翁發句集)

梅が香にむかしの一字あはれなり (芭蕉翁發句集)

梅咲てよろこぶ鳥のけしき哉 (同)

入口は柳にのぼるよし野かな (芭蕉句選拾遺)

贈社國 (同)

笠の緒に柳縮る旅出かな (もとの水)

まどふとな犬ふみつけて猫の戀 (一葉集)

壁土の家する木曾のつばめ哉 (芭蕉句選拾遺)

花に來て花野に歸る燕かな (同)

煤ほりてごみ焼家に啼燕 (同)

年木亭

蝶の羽の幾度越る屏のやね (芭蕉翁發句集)

吹くたびに蝶の居直る柳かな (一葉集)

氣のつかぬ所を土堤の葦かな (この華)

浅草千里がもとにて (芭蕉翁發句集)

海苔汁の手際見せけり浅黄桜 (はつ茄子)

入りかゝる日も糸遊の名残かな (芭蕉翁眞蹟拾遺)

人の氣や花に乘行くさくら川 (書簡集参照)

蝙蝠も出でようき世の花に鳥 (芭蕉翁發句集)

路通がみちのくに赴く時 (同)

草枕まことの花見しても來よ (一葉集)

聲よくばうたはむものを櫻ちる (同)

鐘きえて花の香は撞く夕べかな (同)

蛙子は目すり鱈を啼く音かな (同)

坦堂和尚を悼 (同)

地にたふれ根により花のわかれ哉 (芭蕉翁句鑑)

畫贊

この畫かきたる人は外記何がしていまだ十一にな

り待るよしまことにやさしき筆のすさみに興もよほされてされ句書付侍る (芭蕉翁發句集)

霞やら花のくもやらけふりやら (禹柳伊勢紀行)

落ちさまに水こぼしけり花つばき (芭蕉句選年考)

富士に行椿にかくれ家に出つ (反故集)

ひとり尼わら家すげなし白鷺 (芭蕉句選拾遺)

橋やいつの野中の時鳥 (一葉集)

晝見れば首筋赤き壺かな (芭蕉翁發句集)

木因亭にて竹睡日 (同)

降らずとも竹植うる日は蓑と笠 (同)

紫陽花や帷子時の薄淺黄 (同)

圓の住素牛のぬし大垣の旅店を訪れけるかの藤しろみさかといひけむ花は宗祇のむかしにほひて (同)

藤の實は誹諧にせむ花のあと (同)

遊素堂蓮池 (同)

雨の矢に蓮を射る芦戦へり (後藤龜一氏藏輻)

勢田に泊りて曉石山に詣かの源氏の間を見る (同)

曙はまだむらさきにほととぎす (芭蕉翁眞蹟拾遺)

曙やまた朝日にほととぎす (芭蕉翁發句集)

野明亭(一葉集)

は「人聲」の句の後、実なりとあり、書簡に「此道」とあり
 (一四九)「忘水」に、はじめは「昨日からちよつ雨哉」とあり
 (一五〇)「笑日記」に「なほかけ廻る夢心」とも作りみて「夢は枯野」と定まる
 (一五一)「芭蕉翁行状」に「芭蕉翁は旅に病んで夢は枯野をかけたまはる」とあり
 (一五二)「芭蕉翁選拾遺」に「古木亭にて」とあり
 (一五三)「芭蕉翁眞蹟拾遺」に「うたはうもの」とあり
 (一五四)「芭蕉翁」の部に「考證」

清瀧の水波みよせてとてころてん (芭蕉句選年考)
 行末は誰肌ふれむ紅の花 (同)
 聲にみな鳴きしまうてや蟬のから (芭蕉句選拾遺)
 住みける人の外に隠れて養生しげる古跡を訪て (一葉集)
 瓜つくる君があれなと夕涼み (同)
 皿鉢もほのかにやみの宵涼み (同)
 かけて置く拂子は知慧の土用干 (芭蕉句選拾遺)
 夏のむしうなぎやく日をしらぬかな (森斗鏡氏眞蹟)
 木啄の柱をたゝく住居かな (芭蕉句選拾遺)
 富士の風や扇にのせて江戸みやげ (同)
 手の届く水際うれしきつばた (芭蕉翁發句集)
 足洗てつい明易き丸寝かな (芭蕉翁眞蹟拾遺)
 不卜母追悼
 水向てあとゝひ給へ道明寺 (芭蕉翁發句集)
 夕顔やかいまはるほど秋は來ぬ (一葉集)
 蓮池や折らで其まゝ玉まつり (芭蕉翁發句集)

蝶鳥のしらぬ花あり秋の空 (芭蕉句選拾遺)
 三日月やはや手にさはる草の露 (一葉集)
 朝顔の花に鳴行く蚊のよわり (芭蕉句選拾遺)
 玉川の水におぼれそ女郎花 (芭蕉翁發句集)
 秋海棠西瓜の色に咲きにけり (同)
 瓢の銘
 米のなき時は瓢に女郎花 (一葉集)
 畫 贊
 鶴啼くやその聲に芭蕉やれぬべし (芭蕉翁發句集)
 かゝさぬぞ宿は菜汁にとうがらし (芭蕉句選年考)
 江鉦ありもやすらむ富士の湖 (芭蕉句選拾遺)
 嵐嶺は遠く聞く蓬萊方丈は仙の地なりまのあたり土峯地を拂て蒼天をおさへ日月の爲に雲門をひらくかとむかふ處みなおもてにして美景千變す詩人も句を盡さず才士文人も言を斷ち畫工も筆を捨てゝ走るもし藝姑射の巧の神人ありて其詩をよくせむか其畫をよくせむか
 雲霧の暫時百景を盡しけり (一葉集)
 水油なくて寝る夜や窓の月 (もとの水)
 名月や鶴脛高き遠干潟 (一葉集)

(一五五)「一葉集」の部に「考證」
 (一五六)「一葉集」の部に「考證」
 (一五七)「反故集」に「向後」とありて「不知作者」とす
 (一五八)「一葉集」の部に「考證」
 (一五九)「一葉集」の部に「考證」
 (一六〇)「芭蕉の耳」に「一葉集」に「かくさぬぞ」とあり
 (一六一)「書簡集参照」
 (一六二)「芭蕉傳授」に「美濃の山中にて」と前書あり
 (一六三)「一葉集」の部に「考證」
 (一六四)「一葉集」の部に「考證」
 (一六五)「一葉集」の部に「考證」
 (一六六)「芭蕉傳授」に「美濃の山中にて」と前書あり
 (一六七)「一葉集」の部に「考證」
 (一六八)「一葉集」の部に「考證」
 (一六九)「一葉集」の部に「考證」
 (一七〇)「一葉集」の部に「考證」

山寒し心の底や水の月 (同)
 近江路を通りける頃日野山のほとりにて胡麻といふものに上のきぬを取られて (芭蕉句選拾遺)
 剝れたる身にはきぬたのひゞき哉 (芭蕉句選拾遺)
 聲澄みて北斗にひゞく砧かな (一葉集)
 かり跡や物にまぎれぬ蕎麥のくき (芭蕉翁發句集)
 月の雁羽裏も見せて渡りけり (芭蕉翁眞蹟拾遺)
 雁の聲寢處廣う覺えけり (同)
 堅田祥瑞寺にて
 朝茶のむ僧しづかなり菊の花 (芭蕉句選拾遺)
 濃柿や一口はくふ猿のつら (芭蕉翁發句集)
 菊花の讚
 折ふしは酢になる菊のさかな哉 (芭蕉句選)
 何くうて小家は秋の柳陰 (芭蕉翁發句集)
 朝な／＼手習すゝむきり／＼す (一葉集)
 塵土佐の腰張へけて秋の暮 (芭蕉翁眞蹟拾遺)
 人の方へ始めて行きて
 初時雨初の字をわが時雨かな (一葉集)
 新薬の出そめて早き時雨かな (芭蕉翁發句集)

道のほとりにて時雨にあひて
 かさもなき我をしぐるゝかこは何と(葉草)
 離 別
 しぐれ行くや船の軸繩に取りつきて(芭蕉句選年考)
 菊鶏頭切盡しけり御影講 (忘れ梅)
 から／＼と折ふし凄し竹の霜 (芭蕉翁發句集)
 紙子にも霜やおくかと撫でゝ見し (同)
 深草や是も浅草火鉢かな (一葉集)
 寒山白晝讚
 庭掃いて雪をわするゝはゝき哉 (芭蕉翁發句集)
 湖水より光り出しけり比良の雪 (一葉集)
 五つ六つ茶の子に並ぶるろり哉 (茶のさうし)
 我黒髮撫付けにして頭巾かな (芭蕉句選拾遺)
 貞徳翁の姿を讚して
 をさな名や知らぬ翁の丸頭巾 (芭蕉句選年考)
 夜着に寝てかりがね寒し旅の宿 (芭蕉句選拾遺)
 ふぐ汁や鯛もあるのに無分別 (芭蕉翁發句集)
 ふぐ汁やあはうになりとならばなれ(華鳥文庫)
 雁さわぐ鳥羽の田づらや寒の雨 (西華集)

海ある所にたばねたる柴の盡に
須磨の浦の年とりものや柴一把
(芭蕉翁發句集)

隣庵の僧宗波族におもむかれけるを
(六六)
ふるすたゝあはれなるべき隣かな
(葉集)

子に飽くと申す人には花もなし
(二葉集)

暗山産葉の爲に江府に居る事三月予はかれが朝寝を
おどろかせば彼は己が宵寝をたゞきて方寸をくみし
り寝食をともにしたる人に似たりけふや故郷へ歸る
を見おくらむと杖を曳てよろほひ出でたるに秋の名
残もともにをしまれて

むさし野やさはるものなき君が笠
(續 寒菊)

霊岸島に住みける人かたり更けて我草の戸に入り來
るを案内する人に其名をとへばおのゝ七郎兵衛と
なむ申侍るをかの獨酌の興によせていさゝかたはふ
れとなしけり

盃にみつの名をのむこよひ哉
(芭蕉翁眞蹟拾遺)

餅花をしら糸となす柳かな
(續 山井)

上巳

龍宮もけふの汐路や土用干
またぬのに菜賣は來たか時鳥
(六百番句合)

あすは粽難波の枯葉夢なれや
(同)

近江蚊屋汗やさど波夜の床
(同)

今宵の月磨出せ人見出雲守
(同)

枝もろし緋唐紙やぶる秋の風
(同)

富士の雪廬生が夢をつがせけり
(同)

不二の山蚤か茶臼の覆かな
(錢龍賦)

名月や我と筆架の影法師
(もとの水)

名月はふたつ過ても瀬田の月
(西の雲)

すゝはきや暮ゆく宿の高舩
(小文庫)

追記
七頁上段「此忘れ流るゝ年の浣ならむ」の句を削る。
「葛の松原」には「芭蕉」とあれど、「挑ねぶり」に素堂
の句なる旨を記す。

類題別芭蕉發句集

春の部 目次

初日の出	(光)	筆始	(杏)	梅柳	(杏)
元日	(同)	七種	(同)		
正月	(同)	子日	(同)	猫の戀	(同)
歳旦	(同)	東風	(同)	白魚	(同)
立春	(同)	凍解	(同)	鰯祭魚	(同)
春の春	(同)	氷消ゆ	(同)	接木	(同)
宿の春	(同)	霞	(同)	雲雀	(同)
明の春	(同)	陽炎	(同)	次郎月	(同)
今朝の春	(同)	糸遊	(同)	二月	(同)
君が春	(同)	春風	(同)	臘	(同)
千代の春	(同)	貝寄風	(同)	春の暮	(同)
花の春	(同)	春雨	(同)	春の夜	(杏)
庭隨	(同)	若菜	(同)	臘月	(同)
松飾	(同)	若草	(同)	初午	(同)
齒染	(同)	若草	(同)	涅槃會	(同)
燈	(同)	春草	(同)	涅槃會	(同)
蓬菜	(同)	若草	(同)	水取	(同)
恵方	(同)	齊草	(同)	彼岸	(同)
若夷	(同)	若菜	(同)	初櫻	(同)
		柳梅	(同)	種芋	(同)
		紅梅	(同)	芥子二葉	(同)
		海棠	(同)	菜の花	(同)
		烟打	(同)	菜の花	(同)
		野老	(同)	齊花	(同)
		獨活	(空)		
		土筆	(同)		
		春草	(同)		

菅	菰	萩の若葉	燕	歸雁	雉子	雀子	蛙	蝶	蛇	田螺	鯉	沙干	阿闍陀渡る	蓮	草餅	峰入	桃	初花	待花	櫻	山櫻	犬ざくら	八重櫻
.....
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)
櫻	花見	花の雲	花の雪	落花	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪	花の雪
.....
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)
撫子	麥	穂	新	若	青	藤	木	夏	茂	夏	木	夏	茂	夏	木	夏	茂	夏	木	夏	茂	夏	木
.....
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)

夏の部

鹿の袋角	蝸牛	夏蟲	蠅	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊	蚊
.....
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)
百合	紫陽花	瓜の花	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子	茄子
.....
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)
夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜	夏の夜
.....
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)

道明寺……………(同)
 散松葉……………(同)
 夏の月……………(同)
 秋の月……………(同)
 夏籬……………(同)

秋の部

文月……………(空)
 今朝の秋……………(同)
 初秋……………(同)
 残暑……………(同)
 稻妻……………(同)
 七夕……………(同)
 天の川……………(夫)
 墓參……………(同)
 魂祭……………(同)
 盆置……………(同)
 扇置……………(同)
 角力……………(同)
 綿弓……………(同)
 一葉……………(同)
 野分……………(同)
 秋の風……………(同)

秋の空……………(同)
 散柳……………(同)
 木槿……………(七)
 朝顔……………(同)
 芒花……………(同)
 蘭花……………(同)
 女郎花……………(同)
 秋海棠……………(同)
 芭蕉……………(同)
 萩草……………(同)
 萩草……………(同)
 角觚草……………(同)
 葛灯……………(同)
 鬼灯……………(同)
 草花……………(同)
 野菊……………(同)
 草の種……………(同)
 葱椒……………(同)
 蕃椒……………(同)
 粟黍……………(同)
 唐黍……………(同)
 芋瓜……………(同)
 冬瓜……………(同)

蟲……………(同)
 蓼……………(同)
 龜馬……………(同)
 蜻蛉……………(同)
 糞蟲……………(同)
 かじか……………(同)
 鮎……………(同)
 江鮎……………(同)
 鶉……………(同)
 鳴……………(同)
 鹿……………(同)
 秋の夜……………(同)
 身に入む……………(同)
 肌寒……………(同)
 夜寒……………(同)
 秋の暮……………(同)
 秋の山……………(同)
 秋の野……………(同)
 八朔……………(同)
 二百十日……………(同)
 露……………(同)
 霧……………(同)
 胸迎……………(同)
 三日月……………(同)

名月……………(同)
 今日月……………(同)
 月見……………(同)
 十六夜……………(同)
 月……………(同)
 砧……………(同)
 芙蓉……………(同)
 雁來紅……………(同)
 栗……………(同)
 蕎麥の花……………(同)
 初茸……………(同)
 松茸……………(同)
 木の子……………(同)
 茸……………(同)
 柴胡……………(同)
 早稻……………(同)
 稻穂……………(同)
 落穂……………(同)
 刈田……………(同)
 落し水……………(同)
 渡り鳥……………(同)
 四十雀……………(同)
 木啄……………(同)
 雁……………(同)

冬の部

去の月……………(同)
 後市……………(同)
 升宮……………(同)
 御遷宮……………(同)
 秋の霜……………(同)
 重陽……………(同)
 菊……………(同)
 菊の酒……………(同)
 紅葉……………(同)
 紅葉……………(同)
 葛葉……………(同)
 木の實……………(同)
 椴の實……………(同)
 椴……………(同)
 ぬかご……………(同)
 柿……………(同)
 ひつち田……………(同)
 秋深……………(同)
 暮秋……………(同)
 行秋……………(同)
 秋籬……………(同)

初時雨……………(空)
 時雨……………(同)
 木枯……………(同)
 冬空……………(同)
 初雪……………(同)
 小春……………(同)
 冬構……………(同)
 冬籠……………(同)
 冬閉……………(同)
 口切……………(同)
 神の留守……………(同)
 神の旅……………(同)
 御命講……………(同)
 夷講……………(同)
 冬枯……………(同)
 散紅葉……………(同)
 落葉……………(同)
 木の葉……………(同)
 大根……………(同)
 大根引……………(同)
 葱……………(同)
 枯葱……………(同)
 枯尾花……………(同)

冬牡丹	水	寒	臘	枯	霜	霜	麥	雪	雪	雪	雪	雪	雪	雪	氷	凍	霰	寒	氷	火	炭	火	埋	頭	紙	夜	蒲	紙	衣	衣	配
仙	菊	梅	野	枯	枯	野	生	待	雲	見	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	着	着	着	着	着	着	着
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(念)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(念)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	
煤	古	節	探	早	寒	師	鷹	千	鴨	都	鴨	乾	生	河	水	芹	冬	冬	冬	鉢	紙	蒲	紙	衣	着	着	着	着	着	着	
掃	肝	候	梅	咲	走	走	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鮭	鼠	豚	魚	鱧	雨	雨	雨	賣	賣	賣	賣	賣	賣	賣	賣	賣	賣	賣	
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(念)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	
冬	行	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
雜	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)

春の部

初日の出

伊勢に居て見るそらいかに初日の出

元日

元日や思へばさびし秋の暮
元日に田毎の日こそ戀しけれ

正月

正月も美濃と近江や四月

歳旦

戌と申の世の中よかれ酉の年
年々や猿に着せたる猿の面

立春

春立てまだ九日の野山哉

(年立つや) 春立つや新年ふるき米五升

於春々大なる哉春と云々

宿の春

發句なり芭蕉桃青宿の春

明の春

(今朝の春) 庭訓の往來誰が文庫より明の春
今朝の春

誰やらが姿に似たり今朝の春

發句集

(前書あり)

(前書あり)

君が春
かびたんもつくばせけり君が春

千代の春

天祥や京江戸かけて千代の春
伊勢が賣家にも來たり千代の春

花の春

二日にもぬかりはせじな花の春
(誰人か) 藪を着て誰人います花の春

庭

散慮にてにぎあふ民や庭

松飾

門松や思へば一夜三十年
幾霜に心ばせをの松かさり

齒

餅を夢に折結ふ齒の草枕
誰ぞ齒榮に餅おふうしの年

橙

橙や伊勢の白子の店さらし

蓬菜

蓬菜に聞かばや伊勢の初便

惠方

惠方から曳くや今年も牛の玉

若夷

年や人にとられていつも若えびす

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

發句集

我年を棚にあげてや若えびす

筆始

大津繪の筆のはじめは何佛(あ)

七種

四方に打つ齊もしどろもどろ哉

子日

子日しに都へ行かむ友もがな

東風

あち東風や面々さばき柳髪

凍解

凍解て筆に沈ぼすしみづかな

氷消ゆ

勢ひあり氷消えては濫津魚

霞

夕霞赤石の浦を帆のおもて

春なれや名もなき山の朝霞

和歌の跡とふや出雲の八重霞

大比叡やしを引捨てし一かすみ

陽炎

丈六に陽炎高し石の上

陽炎や柴胡の原の薄曇り

陽炎の我肩にたつ紙子かな

かれ芝やまだ陽炎の一二寸

糸遊

(前書あり)

入りかゝる日も糸遊の名残かな
糸遊に結びつきたるけふりかな

(前書あり)

春風や煙管くはへて船頭殿

春風や人聲うつる三笠山

具寄風

貝よする風の手品や和歌の浦

不性さやかき起されし春の雨

春雨の木下にかゝる雫かな

春雨や蓬をのばす草の道

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏

春雨や糞ふきかへす川柳

若菜

葛蔕にけふは賣りかつ若菜かな

一とせに一度つまるゝ薺かな

古畑や薺つみゆく男ども

若草

前髪もまだ若草のにほひかな

木曾の情雪や生えぬく春の草

土筆

麻福田が袴よそふか土筆

土筆

麻福田が袴よそふか土筆

土筆

獨活

雪間より薄むらさきの芽獨活かな

野老獨

山寺の悲しき告げよところほり

畑打

島打つ音やあらしの櫻あさ

海苔

鯛よりも海苔をは老の賣りもせで

海苔汁の手際見せけり淺黄梅

おとろへや齒に喰ひあてし海苔の砂

箸の先に花咲かせけり櫻海苔

梅

梅が香やしらゝ落くば京太郎

手鼻かむ音さへ梅のさかり哉

里の子等梅折りのこせ牛の鞭

月待や梅かたげ行く小山伏

梅吹てよるこぶ鳥のけしき哉

葛蔕のさしみもすこし梅の花

梅が香にむかしの一字あはれあり

この梅に牛も初音と啼きつべし

古里の梅や難波の二年ごし

暖簾の奥ものゆかし北の梅

世に匂へ梅花一枝のみそさゝる

わするなよ藪の中なる梅の花

發句集

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

古川にこひて芽をはる柳かな
はれ物に柳のきはるしなへかな
笠の緒に梅縮る旅出かな
傘に押分け見たる柳かな
もろくしの心柳にまかすべし

(前書あり)

(前書あり)

梅やなぎさぞ若衆哉女哉
かぞへ來ぬ屋敷の梅柳
梅柳わたすか年の御撫物

椿

落ちざまに水こぼしけり花つばき
うぐひすの笠落したる椿かな
葉にそむく椿や花の餘所心
逃水や椿ながる竹の奥
富士に行椿にかくれ家に出つ

猫の戀

猫の妻龜の崩れより通ひけり
猫の戀やむ時間の臘月
まどふとな犬ふみつけて猫の戀
夢めしにやつる戀か猫の妻

(前書あり)

(前書あり)

晴や白魚しろきこと一寸
藻にすだく白魚や取らば消えぬべき
白魚に傾あるこそ恨なれ

白魚や黒き目をあく法の細
鮎の子の白魚送るわかれ哉

(前書あり)

鰯祭魚

鰯のまつり見て來よ瀬田のおく

(前書あり)

接木

捨物に梨の接穂や山屋敷

鶯

鶯や茶袋かゝる庵の垣

鶯や餅に糞する縁の先

鶯に感ある竹のはやしかな

うぐひすや柳のうしろ藪の前

雲雀

雲雀より空に休ふ紳かな

ながき目を囁りたらぬ雲雀かな

原中や物にもつかず啼く雲雀

次郎月

去年ははやそこへすされよ次郎月

二月

さげたり二月中旬はつ茄子

裸にはまだきさらぎのあらし哉

臘

辛崎の松は花よりおぼろにて

春の暮

(前書あり)

(前書あり)

(同)

鐘撞かぬ里は何をか春のくれ
入相の鐘も聞えず春の暮

(前書あり)

春の夜

春の夜は櫻に明けてしまひけり
春の夜や籠り人床し堂の隅

臘月

花の顔にはれうてしてや臘月

初午

初午に狐のそりし頭かな

涅槃會

神垣や思ひもかけず涅槃會

水取

水取やこもりの僧の杵の音

彼岸

けふ彼岸菩提の種を蒔く日かな

初櫻

初ざくら折しもけふはよき日なり
咲きみだす桃の中よりはつ櫻
顔に似ぬ發句も出でよ初櫻

芹

我ためか鶴啼幾す芹の飯

種芋

種芋や花のさかりを賣りありく

茄子の二葉

茄子の二葉

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

菜畑に花見顔なる雀かな

花

(前書あり)

よく見れば齊花咲く垣根哉

菖

菖摘て貧なる女機に倚る

荇の若葉

藪椿門はむぐらの若葉かな

荇さへ若葉やさしや破れ家

萩の若葉

物の名を先づ問ふ萩の若葉哉

芭蕉植ゑて先づにくむ萩の二葉かな

燕

壁土の家する木曾のつばめ哉

煤ほりてごみ焼家に啼燕

盃に泥な落しそむら燕

歸雁

雲とへだつ友かや雁の生き別れ

雌子

父母のしきりに戀し雌子の聲

燒石と啼かはしたる雌子かな

蛇くふと聞けば恐ろし雌子の聲

雲雀啼く中の拍子や雌子の聲

(前書あり)

(同)

發句集

雀子

雀子と聲啼きかはす鼠の巢

蛙

蛙子は目すり輪を啼く音かな

古池や蛙飛こむ水の音

蝶

蝶の羽の淺度越る屏のやね

起きよ〜わが友にせむ寝る小蝶

唐土の俳諧とはむ飛ぶ胡蝶

蝶の飛ぶばかり野中の日影かな

君や蝶我や莊周か夢心

ものずきや句はぬ草にとまる蝶

蛇

花に遊ぶ蛇なくらひそ友すよめ

田 蝶

飯貝や雨に泊りて田蝶開く

袖よごすらむ田蝶の海士のひまをなみ

雛

内裡雛人形天皇の御宇とかや

草の戸も住み替る世ぞ雛の家

沙 干

龍宮もけふの沙路や土用干

清水ほど海の流るゝ沙干かな

青柳の泥にしだるゝ沙干かな

六四

阿闍陀渡る

阿闍陀も花に來にけり馬に鞍

連 日

遅き日にかわかぬ網の左り袖

暮遅き四谷過ぎけり紙草履

草 餅

雨の手に桃と櫻や草の餅

峰 入

峰入や一里おくるゝ小山伏

桃

舟あしも休む時あり濱の桃

煩へば餅こそ喰はね桃の花

古寺の桃に米ふむ男かな

わが衣にふしみの桃の掬せよ

たゞ一夜桃に宿借る木幡かな

初 花

初花にいのち七十五年ほど

待 花

待花や藤三郎がよし野山

櫻

鶴の巢にあらしの外の櫻かな

半日の雨より長し糸櫻

木のもと汁も輪もさくらかな

糸櫻こや歸るさの足もつれ

(前書あり)

(前書あり)

(同)

芳野にて櫻見せうぞ榊木笠

植うる事子のごとくせよ見櫻

姥櫻咲くや老後の思出

様々の事思ひ出すさくらかな

命ふたつの中に活たる櫻かな

山 櫻

草履の尻折りて歸らむ山ざくら

歌よみの先達多し山櫻

留守といふ小僧なぶらむ山櫻

山ざくら瓦ふくものまぶ二つ

うらやまし浮世の北の山ざくら

うかれけり人やはつせの山櫻

犬ざくら

風吹は尾細らなるや犬ざくら

八重櫻

奈良七重七重七重八重櫻

櫻 狩

櫻狩きどくや日々に五里六里

思ひ出す木曾や四月の櫻がり

似合はしや豆粉めしに櫻がり

花 見

四つ五器の揃はぬ花見ごゝろ哉

花見にとさす舟遅し柳原

京は九萬九千群集の花見かな

(前書あり)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

六四

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

六五

鐘きえて花の香は撞く夕かな
花ざかり山は日頃の朝ぼらけ
花の陰謀に似たる旅寝かな
（日は花にくれてさびしやあすなふし）
さびしきや花のあたりの翠檜
龍門の花や上戸の土産にせむ
酒のみにかたらむかゝる瀧の花
紙衣のぬるとも折らむ雨の花
古香や花の旅出の拾ひばき
樞木の花にかまはぬ姿かな
見渡せば花ばかりなり春や京
花に酔へり羽織着て刀さす女
花を宿にはじめ終や廿日ほど
年々や櫻をこやす花のちり
花に寝ぬこれもたぐひか鼠の巢
西行の庵もあらむ花の庭
土手の松花や木ぶかき殿作り
此心推せよ花に五器一具
蝙蝠も出でようき世の花に鳥
うち山や外縁しらずの花盛
花の山二町のぼれば大悲閣
飲明けて花入にせむ二升樽
子に飽くと申す人には花もなし
落 花

(前書あり)
(同)
(同)
(前書あり)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)

四方より花吹入れてにほの海
扇にて酒くむ影やちる櫻
ちる花や鳥もおどろく琴の塵
花の雪
先づ知るや宜竹が尺八に花の雪
鶴の毛のくろき衣や花の雪
花 衣
きても見よ甚兵衛が羽織花ごろも
花 守
一里はみな花守の子孫かや
花は賤の目にも見えけり鬼薊
薊 獨
ひとり尼わら家すげなし白つゝじ
露生けてその陰に干鱗さく女
裾山や虹吐くあとの夕つゝじ
藤
留守に來て棚さがしする藤の花
草臥て宿かるところや藤の花
山 吹
ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音
山吹や宇治の焙煙の匂ふ時
山吹や笠にさすべき杖の形
山吹の露菜の花のかこち顔なるや

(前書あり)
(前書あり)
(前書あり)
(前書あり)
(前書あり)
(同)
(同)
(前書あり)
(同)
(前書あり)
(同)
(同)
(同)
(前書あり)
(同)
(同)
(前書あり)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)

當歸よりあはれは墳のすみれ草
山路來て何やら床しすみれ草
氣のつかぬ所を土堤の菫かな
茶 摘
摘けんや茶を風の秋ともしらで
行 春
行春に和歌の浦にて追付たり
行春や鳥啼き魚の目はなみだ
行春を近江の人と惜しみける
夏 近 近
夏近し其口たばへ花の風

(前書あり)
(同)
(同)
(同)
(前書あり)
(同)
(同)

梅わか菜まりこの宿のとろゝ汁
うたがふならしほの花も浦の春
霞やら花のくもやらけぶりやら
春もやけしきとよのふ月と梅
しほ尻のしりもすわらぬ春の駒
此種と思ひこなきじ唐がらし
此種のみかし椿か梅の木か
何の木の花ともしらげむひ哉

(前書あり)
(同)
(同)
(同)
(前書あり)
(同)
(同)
(同)
(同)

夏の部

一つ脱いでうしろにおひぬ衣更
(夏はなにおひぬ)
灌 佛
灌佛や兼手合はする数珠の音
灌佛の日に生れあふ鹿の子哉
牡 丹
寒からぬ露や牡丹の花の蜜
牡丹蓋深く分け出づる蜂の余波かな
杜 若
かきつばた似たりや似たり水の影
燕子花かたるも旅のひとつかな
杜若われに發句のおもひあり
有難き姿拜まむかきつばた
手のとゞく水際うれしきつばた
こゝも三河むらさき麥のかきつばた
罌 粟
海士の顔まづ見らるゝやけしの花
白芥子に羽もぐ蝶のかたみかな
白芥子や時雨の花の咲きつらむ
撫 子
撫子にかゝるなみだや楠の露
酔うて寝む撫子咲ける石の上
麥
行駒の麥になぐさむやどりかな
穗 麥

(前書あり)
(前書あり)
(前書あり)
(前書あり)
(同)
(同)
(前書あり)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(前書あり)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(同)
(前書あり)
(前書あり)
(前書あり)

いととも穂麥くらはむ草枕
 麦の穂をたよりにつかむわかれかな
 麦の穂や涙に染て啼雲雀
 ひと日く麦あからみて啼雲雀
 新 麥
 新麥や竹の子時の草の庵
 若 葉
 若葉して御日の葉ぬぐはゞや
 青 葉
 あらたふと青葉若葉の日の光
 藤の實
 藤の實は誹諧にせむ花のあと
 木下闇
 須磨寺に頼ぬ笛きく木下闇
 夏木立
 木塚も庵はやぶらず夏木立
 先づたのむ椎の木もあり夏木立
 茂
 あらし山藪のしげりや風の筋
 笹の露袴にかけし茂かな
 雲を根に富士は杉なりの茂かな
 夏 草
 夏草や兵どもが夢のあと
 石の香や夏草赤く露暑し

(前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (同)

柚の花
 柚の花やむかし忍ばむ料理の間
 卯の花
 卯の花やくらき柳の及びごし
 卯の花も母なき宿ぞすさまじき
 梅戀て卯の花拜む涙かな
 橘
 駿河路や花橘も茶のにはひ
 椎の花
 椎の花の心にも似よ木曾の旅
 筍
 たかうなや雫もよゝの篠の露
 うきふしや竹の子となる人の果
 竹の子や稚き時の繪のすさび
 鯉
 鎌倉を生きて出でけむ初鯉
 また越えむ小夜の中はつ鯉
 かつを賣いかなる人を酔はすらむ
 鮎
 またたぐひ長良の川の鮎なます
 麥 秋
 秋や須磨須磨や秋知る麥日和
 杜 鵑
 またぬのに菜實は来たか時鳥

(前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)

ほととぎす招くか麦のむら尾花
 子規大竹原をもる月夜
 ほととぎすいまだ俳諧師なき世かな
 時鳥啼くや五尺のあやめ草
 なげやなげ耳のすうなるほととぎす
 ほととぎす正月は梅の花咲けり
 鳥賊賣の聲まぎらはし時鳥
 黒煙釜破て捨てけりほととぎす
 見えばやな出立々々のほととぎす
 橘やいつの野中の時鳥
 田や麥や中にも市の時鳥
 口すべれ油月夜の郭公
 岩つゝじ染る涙やほととぎす
 木がくれて茶摘もきくや郭公
 鳥さしも竿や捨てけむ郭公
 須磨の鬢の矢先に啼くや郭公
 野を横に馬牽きむけよ郭公
 曙はまだむらさきにほととぎす
 あけぼのやまた期日にほととぎす
 清く聞かむ耳に香炷いて郭公
 京にても京なつかしや時鳥
 子規なくや黒戸の濱びさし
 郭公うらみの瀧のうらおもて
 郭公啼音や古き硯箱

(前書あり)
 (前書あり)
 (同)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (同)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (同)
 (前書あり)
 (同)
 (前書あり)

時鳥消え行くかたや鳥一つ
 おち来るやたかくの宿の子規
 子規なきく飛ぶぞいそがはし
 しばし間もまつや時鳥千年
 戸の口に宿札名のれ郭公
 一聲の江に横たふや郭公
 ほととぎす聲横たふや水の上
 関古鳥
 うき我をさびしがらせよかんど鳥
 行々子
 能なしのねぶたし我を行々子
 老 鶯
 うぐひすや竹の子藪に老を啼く
 鶉 飼
 おもしろうてやがて悲しき鶉舟哉
 乗りたやと子の聲くらき鶉舟かな
 鹿の袋角
 二股にわかれ初めけり鹿の角
 蝸 牛
 蝸牛角ふりわけよ須磨あかし
 夏 蟲
 夏のむしうなぎやく日をしらぬかな
 蠅
 うき人の旅にもならへ木曾の蠅

(前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)

わが宿は蚊の小さきを馳走哉
蟾 遣ひ出でよかひやが下のひきの聲

雨 蛙 松明に酔ふか柱に雨蛙

蝮 ぼたる見や船頭酔うて豊東な

此ほたる田ごとの月にくらべみむ
草の葉を落つるより飛ぶ蝮かな
雲見れば首筋赤き蝮かな

己が火を木々の蝮や花の宿
愚に聞く荆をつかむ蝮かな

蝮

不二の山蝮が茶臼の覆かな

蝮 蚤虱馬の尿する枕もと

五月

海ははれてひえ降の寺五月哉

蟬 午 あすは粽難波の枯葉夢なれや

笈も太刀も五月にかざれ紙帆

五月雨

降音や耳もすうなる梅の雨

五月雨も潤ふみ尋ねぬみなれ川

五月雨に御物遠や月のかほ
笠島はいづこ五月のぬかり道

五月雨の雲吹落せ大井川

笠寺や宿ももらげ五月雨

五月雨は瀧降埋む水かさ哉

髪はえて容顔蒼し五月雨

五月雨に岩檜葉の翠いつまでぞ

五月雨や色紙へぎたる壁のあと

五月雨や蚤わづらふ桑のはた

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

五月雨の降りのかしてや光堂

さみだれに寒いまゝなり旅すがた

五月雨をあつめて早し最上川

五月雨に鳩の浮巢を見に行かむ

五月雨やこの笠もりをさしも草

日の道や葵かたぶく五月雨

五月雨や龍燈あける番太郎

梅雨晴

梅雨ばれの私雨や雲ちざれ

五月富士

日にかゝる時やこと更五月富士

粽結ふ片手にはさむひたひ髪

青ざし

(前書あり)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

青ざしや草餅の穂に出でつらむ

葛 蒲

あやめ生り軒の鮎のされかうべ

あやめ草足にむすばむ草鞋の緒

花 葛 蒲

花あやめ一夜にかれしもとめ哉

竹 酔 日

降らずとも竹植うる日は義と笠

田 植

柴付けし馬の戻りや田植樽

風流のはじめやおくの田植うた

田一枚植て立去る柳かな

代 撮 く

世を旅に代かく小田の行戻り

早 苗

早苗とる手もとや昔しのお摺

早苗にも我色黒き日敷かな

西か東かまづ早苗にも風の香

雨折々思ふ事なき早苗かな

わすれ草

淋しさよ右も左もわすれ草

紅の花

まゆはきを佛にして紅粉の花

行末は誰肌ふれむ紅の花

百 合 美しき其姫ゆりや后がね

紫陽花 紫陽花や藪を小庭の別座敷

紫陽花や帷子時の薄淺黄

瓜の花 瓜の花零いかなる忘れ草

夕にも朝にもつかず瓜の花

茄 子

めづらしや山を出羽の初なすび

菫はまだ青葉ながらや茄子汁

藜

やどりせむ藜の杖になる日まで

一つ葉

夏来てもたゞ一つ葉の一葉哉

桑の實 權の實や花なき蝶の世すて酒

李

李青く竹笠破れて石あぶなし

栗の花

世の人の見付けぬ花や軒の栗

鐵線花

ちらば散れ千里一風の鐵線花

(前書あり)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

どんみりと楊や雨の花ぐもり (前書あり)

合歡の花 (金田の雨)

象潟や雨に西施がねふの花

水 鷄

此宿は水鷄もしらぬ扉かな

關守の宿を水鷄に問はうもの

水鷄なくと人のいへばや佐屋泊り

六月 六月

水無月 六月

雪の皚を雪水無月の鯉

水無月はふく病やみの暑かな

水無月や鯛はあれども鹽くじら

みな月やから鮭拜む野栖山

土用干 前書あり

なき人の小袖も今や土用干

かけて置く拂子は知慧の土用干

夏衣 前書あり

夏衣いまだ風をとり盡さず

帷子 前書あり

いでや我よき布着たりせみ衣

汗 前書あり

汗の香に衣ふるはむ行者堂

汗水やし野泊りの笠山伏

暑

暑き日を海に入れたり最上川

蛤の口しめて居る暑さ哉

夏座敷 (海)

山も庭もうごき入るゝや夏座敷

夏羽織 (前書あり)

辨慶は夏も紙子の羽織かな

別ればや笠手にさげて夏羽織

雲の峰 (前書あり)

雲の峰いくつ崩れて月の山

ひら／＼とあぐる扇や雲の峰

湖や暑をしむ雲の峰

夏山 (前書あり)

夏山に足駄を拜む首途かな

夏山や杉に夕日の一里鐘

夏山や紙すく里は飯時分

夏の夜 (前書あり)

夏の夜は木魂に明くる下駄の音

夏の夜や崩れて明けしひやし物

短夜 (前書あり)

短夜や驛路の鈴の耳につく

明易き (前書あり)

足洗てついで明易き丸寝かな

夏の海 (前書あり)

沙越や鶴はぎぬれて海すまし

東路の毛すね恥かし床すまし

川風や薄がき着たる夕すまし

風鈴もほのかにやみの宵涼

小鯛さす柳すましや海士が軒

涼しきは指圖に見ゆる住ひ哉

涼しさを我宿にしてねまるなり

百里來たるほどは雲井の下涼し

涼しさやほの三日月の羽黒山

涼しさや直に野松の枝のなり

涼しさを繪にうつしけり鱧の竹

破風口に日影やよわる夕涼み

此あたり目に見ゆるもの皆涼し

清 水 (前書あり)

さざれ蟹足はひ上る清水哉

むすぶよりはや齒にひやく清水かな

城あとや古井の清水先づ問はむ

湯を結ぶちかひもおなじ岩清水

硯洗ふ知慧は出でたり昔清水

水鳥の巢 (前書あり)

闇の夜や巢をまどばして鳴鶴

窠形に晝寝の臺やたかむしろ

扇 (前書あり)

どんみりと楊や雨の花ぐもり (前書あり)

合歡の花 (金田の雨)

象潟や雨に西施がねふの花

水 鷄

此宿は水鷄もしらぬ扉かな

關守の宿を水鷄に問はうもの

水鷄なくと人のいへばや佐屋泊り

六月 六月

水無月 六月

雪の皚を雪水無月の鯉

水無月はふく病やみの暑かな

水無月や鯛はあれども鹽くじら

みな月やから鮭拜む野栖山

土用干 前書あり

なき人の小袖も今や土用干

かけて置く拂子は知慧の土用干

夏衣 前書あり

夏衣いまだ風をとり盡さず

帷子 前書あり

いでや我よき布着たりせみ衣

汗 前書あり

汗の香に衣ふるはむ行者堂

汗水やし野泊りの笠山伏

鳥々や千々にくだきて夏の海

夏 野 (前書あり)

馬草負ふ人を枝折の夏野哉

馬ほく／＼われを繪に見る夏野哉

もろき人にたとへむ花も夏野哉

夏の雨 (前書あり)

僧山や柴して戻る夏の雨

水 室 (前書あり)

谷の奥水室尋ぬる柳かな

風 蒸 (前書あり)

さざ波や風の薫りの相拍子

風かをる羽織や襟もつくろはず

風の香も南に近し最上川

松杉をほめてや風のかをる音

涼 (前書あり)

箔押よどちも身のため夕涼み

飯あふぐ噓が馳走や夕涼み

南も佛草の臺も涼しかれ

松風の落葉か水の音すまし

あつみ山や吹雨かけて夕すまし

わすれずば小夜の中山にて涼め

命なりわづかの笠の下涼み

夕ばれや櫻にすむ浪の花 (前書あり)

富士の風や扇にのせて江戸みやげ

團扇 團扇とつてあふがむ人のうしろむき

蚊屋 近江蚊屋汗やさび波夜の床

蓮 雨の矢に蓮を射る芦戦へり
蓮の香に目をかよはすや面の鼻
枝なくて世にかまはらぬ蓮かな

晝顔 子ども等よ晝顔吹きぬ瓜むかむ

晝顔 晝顔に晝寝せうもの床の山

晝顔 晝顔に米搗涼むあはれなり

晝顔 鼓子花のみじか夜ねぶる晝間哉

夕顔 夕顔やかいまはるほど秋は来ぬ

夕顔 夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて

夕顔 夕顔や秋はいろくの瓢かな

夕顔 夕顔や酔て顔出す窓の穴

夕顔 夕顔に干瓢むいて遊びけり

夕顔 夕がほに見とるゝや身もうかりひよん

水葱 なまぐさしこなぎが上の鮎の腸

荻茂る

山賤のおとがひ閉づるむぐら哉

瓜 花と質と一度に瓜のさかりかな

朝露 朝露によごれて涼し瓜の泥

瓜 瓜の皮むいた所や蓮臺野

瓜 瓜つくる君があれなと夕涼み

瓜 山陰や身をやしなはむ瓜畑

眞桑瓜 眞桑瓜

眞桑瓜 開の夜を狐下はふ玉眞桑

眞桑瓜 初眞桑たてにやわらむ輪にやせむ

眞桑瓜 われに似た二つにわれし眞桑瓜

眞桑瓜 柳ごり片荷は涼し初眞桑

眞桑瓜 清瀧の水汲みよせてところてん

眞桑瓜 水向てあとゝひ給へ道明寺

眞桑瓜 散松葉

眞桑瓜 清瀧や浪に散り込む青松葉

眞桑瓜 閉さや岩にしみ入る蟬の聲

眞桑瓜 やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲

眞桑瓜 撞頭もひびくやうなり蟬の聲

眞桑瓜 木陰に蟬ばかり動く夕べ哉

眞桑瓜

眞桑瓜

眞桑瓜

眞桑瓜

眞桑瓜

眞桑瓜

眞桑瓜

眞桑瓜

眞桑瓜

富士の風や扇にのせて江戸みやげ

團扇 團扇とつてあふがむ人のうしろむき

蚊屋 近江蚊屋汗やさび波夜の床

蓮 雨の矢に蓮を射る芦戦へり
蓮の香に目をかよはすや面の鼻
枝なくて世にかまはらぬ蓮かな

晝顔 子ども等よ晝顔吹きぬ瓜むかむ

晝顔 晝顔に晝寝せうもの床の山

晝顔 晝顔に米搗涼むあはれなり

晝顔 鼓子花のみじか夜ねぶる晝間哉

夕顔 夕顔やかいまはるほど秋は来ぬ

夕顔 夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて

夕顔 夕顔や秋はいろくの瓢かな

夕顔 夕顔や酔て顔出す窓の穴

夕顔 夕顔に干瓢むいて遊びけり

夕顔 夕がほに見とるゝや身もうかりひよん

水葱 なまぐさしこなぎが上の鮎の腸

荻茂る

秋近き心のよるや四疊半

夏 櫻より松は二本を三月ごし

夏 暫時は漣にこもるや夏のはじめ

夏 遠くや夏の日の出の船ごころ

夏 世の夏や湖水にうかぶ浪の上

夏 有難や雪をかをらす南谷

秋 秋近き心のよるや四疊半

夏 櫻より松は二本を三月ごし

夏 暫時は漣にこもるや夏のはじめ

夏 遠くや夏の日の出の船ごころ

夏 世の夏や湖水にうかぶ浪の上

夏 有難や雪をかをらす南谷

秋 秋近き心のよるや四疊半

夏 櫻より松は二本を三月ごし

夏 暫時は漣にこもるや夏のはじめ

夏 遠くや夏の日の出の船ごころ

夏 世の夏や湖水にうかぶ浪の上

秋の部

文月

文月や六日も常の夜には似ず

今朝の秋 今朝の秋
張ぬきの猫も知るべし今朝の秋

發句集

(前書あり)

(同)

(同)

(前書あり)

(同)

(同)

(前書あり)

(同)

(同)

秋來ぬと妻こふほしや鹿の皮

天の川

水學も乗物かさむ犬の川

荒海や佐渡に横たふ天の川

慕 參

家はみな杖に白髪(二) 慕みな杖に白髪に杖かの慕參り

魂 祭

蓮池や折らで其まゝ玉まつり

數ならぬ身とな思ひそ玉まつり

魂まつりけふも焼場のけふりかな

熊坂がゆかりやいつの玉まつり

盆

夕風や盆挑灯も翫ばなれ

扇 置

物書いて扇引きさく餘波(マヨリ)かな

角 力

角髪や奥を出羽の相撲取

月のみか雨に相撲もなかりけり

むかし聞けちゝぶ殿さへ相撲取

勝角力いつも上手に米の飯

綿 弓

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

一 葉

淋しさを問うてくれぬか桐一葉

野分

さぞ野分人の淡たつ市の聲

吹きとばす石は淺間の野分かな

猪も共に吹かるゝ野分かな

秋の風

枝もろし緋唐紙やぶる秋の風

秋風や藪も烟も不破の關

身にしみて大根からし秋の風

石山の石より白し秋の風

あき風に折れて悲しき桑の杖

秋風や桐に動いて蕩の霜

如何と音を何と啼く秋の風

秋風のやり戸の口やとがり聲

秋風や伊勢の墓原猶すごし

あか／＼と日はつれなくも秋の風

猿をきく人捨子に秋の風いかに

義朝の心に似たり秋の風

ものいへば唇さむし秋の風

墳も動け我が泣く聲は秋の風

西東あはれさ同じ秋の風

桃の木その葉ちらすな秋の風

秋の空

蝶鳥のしらぬ花あり秋の空

散柳

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(前書あり)

庭掃いて出づるや寺に散る柳

散る柳あるじも我も鐘を聞く

水清くなりて柳の散る日かな

木 權

道のべの木權は馬に喰はれけり

花むくげ裸わらべのかざし哉

朝 顔

葦や晝は鎖おろす門の垣

朝顔や是もまた我が友ならず

朝顔にわれは飯食ふ男かな

朝顔は下手の書くさへあはれなり

朝顔は酒もり知らぬ盛りかな

僧朝顔いく死かへる法の松

朝顔の花に鳴行く蚊のよわり

芒

何ごともまねき果てたる芒かな

關

門に入れば蘇鐵に關のにほひ哉

蘭の香や蝶の翅にたきものす

香を残す蘭帳關のやどりかな

女郎花

見るに我もおれる計ぞ女郎花

米のなき時は瓢に女郎花

ひよろ／＼と猶露けしや女郎花

玉川の水におぼれそ女郎花

秋海棠

秋海棠西瓜の色に咲きにけり

芭蕉野分して鹽に雨をきく夜かた

この寺は庭一杯の芭蕉哉

鶴啼くやその聲に芭蕉やれぬべし

萩

萩の穂や頭をつかむ羅生門

萩の聲こや秋風の口うつし

ねたる萩や容顔無禮花の顔

萩原や一夜はやどせ山の犬

浪の間や小貝にまじる萩の塵

小はぎ散れますほの小貝小さかづき

ぬれて行く人もをかしや雨の萩

白露もこぼさぬ萩のうねりかな

風色やしどろに植ゑし庭の萩

角觥草

道細し相撲取草の花の露

葛

棧や命をからむ葛かつら

葛植ゑて竹四五本のあらし哉

鬼灯

鬼灯

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

(同)

(同)

(同)

(前書あり)

(前書あり)

鬼灯は實も葉もからも紅葉哉

草の花

薬園にいづれの花を草枕

草いろ／＼おの／＼花の手がらかな

撫子の曇さわるゝ野菊かな

草の種

花みな枯れて哀をこぼす草の種

葱

橋桁のしのぶは月の名残かな

御廟年を経てしのぶは何をしのぶ草

蕃 椒

草の戸をしれや穂蓼に唐がらし

大風のあしたも赤し唐がらし

かゝさぬぞ宿は菜汁にとうがらし

青くてもあるべきものを唐がらし

粟

粟稗にまづしくもあらず草の庵

よき家や雀喜ぶ背戸の粟

唐 黍

たうきびや軒端の萩の取りちがへ

手向けり芋は蓮に似たるとて

(前書あり)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

芋の葉や月待つ星のやけ島

冬 瓜

冬瓜や互にかはる顔の形

もの一つ瓢はかろき我世かな

蟲

盆過ぎて宵闇くらし虫の聲

夜竊に虫は月下の粟を穿つ

よるべをいつ一葉に虫の旅寝して

養

むざんやな甲の下のきりん／＼す

朝な／＼手習す／＼むきりん／＼す

猪の床にも入るやきりん／＼す

しづかさや繪かゝる壁のきりん／＼す

白髪ぬく枕の下やきりん／＼す

床に来て肝に入るやきりん／＼す

さびしさを釘にかけたるきりん／＼す

龜 馬

養の屋は小海老にまじらいと哉

蜻蛉やとり付きかねし草の上

養虫の音を聞きに來よ草の庵

(同)

(前書あり)

(前書あり)

かじか
いさり火にかじかや浪の下むせび

鯢 鱈

ひれふりてめじかもよるや男鹿島

江 鮭

あめのうをありもやすらむ富士の湖

桐の木に鶉啼くなる屏の内

鶯の目も今や暮れぬと啼く鶉

苺あとや早稻かた／＼の鳴の聲

鹿

女夫鹿や毛に毛が揃うて毛むづかし

びいと啼く尻聲悲し夜の鹿

武蔵野や一寸ほどな鹿の聲

秋の夜

秋の夜をうち崩したる嗚かな

身に入む

野ざらしを心に風の入む身かな

肌 寒

湯の名残り今宵は肌の寒からむ

夜 寒

乳麩の下焼立る夜寒かな

秋の暮

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

愚案ずるに冥途もかくや秋の暮

秋の暮客か亭主か中柱

死もせぬ旅寝の果よ秋の暮

塵土佐の腰張へげて秋の暮

こちらむけ我もさびしき秋の暮

幾千里へだつおもひや秋の暮

人聲や此道かへる秋の暮

此道や行く人なしに秋の暮

見送りのうしろや寂し秋の暮

雪の旅それらではなし秋の暮

秋の山

旅癖や寝冷煩ふ秋の山

秋の野や草の中ゆく風の音

八 朔

八朔や天の橋立たばねのし

二百十日

旅鳥二百十日も舟支度

露

西行の草鞋もかゝれ松の露

けふよりや書付消さむ笠の露

露とく／＼こゝろみにうき世すゝがばや

硯かと拾ふやくぼき石の露

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

白露の淋しき味をわするゝな

(前書あり)

松なれや霧えいさらえいと引く程に

(前書あり)

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

(同)

雲霧の暫時百景を盡しけり

(同)

湯の名残幾度見るや霧の本

(同)

棧やまづ思ひ出す駒迎へ

三日月

三日月や朝顔の夕つぼむらむ

(前書あり)

明ぼのや廿七夜も三日の月

(同)

何事の見たてにも似ず三日の月

(前書あり)

三日月やは手にさばる草の露

(同)

見しやその七日は暮の三日の月

(前書あり)

名月

名月の出づるや五十一箇條

(前書あり)

名月や北國日和さだめなき

(同)

名月や西にもほしき窓一つ

(同)

名月や門にさしこむ潮がしら

(前書あり)

名月の見處問はむ旅寝せむ

(同)

名月や見違ふ堂の縁

(前書あり)

名月や海にむかへば七小町

(同)

名月や座にうつくしき顔もなし

(同)

名月やわが家へ戻る門徒坊

(同)

名月や我と筆架の影法師

(前書あり)

名月は二つ過ても瀬田の月

(同)

名月に鶯の鶯や田の曇り

(同)

名月の花かと思えて縮畑

(同)

名月や鶴脛高き遠干湯

(同)

名月や池をめぐりて夜もすがら

(同)

名月の夜やおもくと茶うす山

(同)

今日の月

(同)

たんだすめ住ば都ぞけふの月

(同)

蒼海の浪酒臭しけふの月

(同)

三井寺の門たゝかばやけふの月

(同)

本を伐て本口見るやけふの月

(同)

見

(同)

けふの今宵寝る時もなき月見かな

(同)

あさんづや月見の旅の明けはなれ

(同)

座頭か人とに見られて月見かな

(同)

雲折々人を休むる月見かな

(同)

賤の子や稻すりかけて月を見る

(同)

月見せよ玉江の芦をからぬ先

(同)

寺に寝てまこと顔なる月見かな

(同)

更科や三夜さの月見雲もなし

(同)

十六夜

十六夜もまだ更科の郡かな

いざよひは僅に聞のはじめかな

いざよひや海老賣る程の宵の開

今宵の月磨出せ人見出雲守

武蔵野の月の若ばえや松島種

汐やかぬ須磨よ此湖秋の月

菊に出て奈良と難波は宵月夜

見る影やまた片なりも宵月夜

川上とこの川下や月の友

あの中に蒔繪書きたし宿の月

秋もはやはらつく雨に月の形

入月のあとは机の四隅かな

佛や姨ひとり泣く月の友

月やその鉢の木の日のした面

今宵たれ芳野の月も十六里

月ぞしるべこなたへいらせ旅の宿

實にや月間口千金の通り町

川舟やよい茶よい酒よい月夜

馬に寝て残夢月遠し茶のけむり

その玉を羽黒にかへせ法の月

芭蕉葉を柱に懸けむ庵の月

義仲の寝覺の山か月悲し

影は天の下てる姫や月の顔

やすくと出でいざよふ月の雲

詠るや江戸にはまれの山月

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(同)

鏡立や肩に槌打つから衣

芙蓉

霧雨の空を芙蓉の天氣かな

枝ぶりの日に〜かはる芙蓉哉

雁來紅

雞頭や雁の來る時猶あかし

栗

秋風の吹けども青し栗のいが

蕎麥の花

三日月の地は關なり蕎麥の花

蕎麥はまだ花でもてなす山路かな

初茸

はつ茸やまだ日數經ぬ秋の露

松茸

松茸やしらぬ木の葉のへばり付

松茸やかぶれた程は松の形

木の子

馬士に落さるゝ身は木の子かな

茸

茸狩やあぶないことに夕しぐれ

柴胡掘

むら雨を背中に負うて柴胡掘

早稻

わせの香や分け入る右は有磯海

稻雀

稻雀茶の木畑や逸所

落穂

頂いて落穂拾はむ關の前

刈田

刈かけし田面の鶴や里の秋

かり跡や物にまぎれぬ蕎麥のくき

落し水

くりからや三度起きても落し水

渡り鳥

目にかゝる雲やしほしの渡り鳥

四十雀

老の名のありとも知らで四十雀

木啄

木啄の柱をたゝく住居かな

雁

鳥の文かた田の雁よ片便宜

病雁の夜寒に落ちて旅寝かな

雁の聲聲處廣う覺えけり

月の雁羽裏も見せて渡りけり

去燕

花に來て花野に歸る燕かな

後の月

木曾の瘦もまだ直らぬに後の月

蛙

蛙馬の影見む關の渡し舟

升市

升買て分別かはる月見かな

御選宮

たふとさにな押合ひぬ御選宮

秋の霜

手にとらば消えむ泪ぞあつき秋の霜

重陽

盃の下行く水や朽木盆

菊

朝茶のむ僧しづかなり菊の花

起上る菊ほのかなり水のあと

稲こきの姥もめでたし菊の花

秋を經て蝶もなめるや菊の露

いざよひのいづれか今朝に残る菊

山中や菊はたをらぬ湯のにほひ

はやく咲け九日もちかし菊の花

瘦せながらわりなき菊のつぼみかな

見所のあれや野分の後の菊

菊の香にくらがり登る節句哉

きくの香や奈良は幾代の男ぶり

折ふしは酢になる菊のさかなかな

菊の香や奈良には古き佛達

きくの花咲くや石屋の石の間

一露もこぼさぬ菊の米かな

菊の香や庭にきれたる履の底

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

琴箱や古もの店の背戸の菊

蝶も來て酢を吸ふ菊の鱸かな

草の戸や日くれてくれし菊の酒

盃や山路の菊と是を干す

色付くや豆腐に落ちて薄紅葉

百景や杉の木の間のいろみ草

葛の葉は昔めきたる紅葉哉

能り居て木の實草の實拾はゞや

榎の實ちる椋の羽音や朝あらし

木曾の椋うき世の人のみやげかな

ぬかご

菊の露落ちて拾へばぬかご哉

柿

(前書あり)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

澁柿や一口はくふ猿のつら
里ふりて柿の木もたぬ家もなし
菟弱と柿とうれしき草の庵

(前書あり)
(同)

ひつち田に霜の花見るあした哉

(前書あり)

秋深き隣は何をする人ぞ

(前書あり)

松風の軒をめぐりて秋暮れぬ
露風を吹いて暮秋歎ずるは誰子ぞ

(前書あり)
(同)

行秋

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ
行秋や手をひろげたる栗のいが
行秋の猶たのもしや青蜜柑

(前書あり)
(同)

行秋や身に引きまよふ三布蒲團

(前書あり)

秋 雑

庵の秋ぬかみそ壺もなかりけり
しをらしき名や小松ふく萩すゝき

(前書あり)
(同)

この松の實ばえせし代や神の秋
祖父と親その子の庭や柿みかん
さらでさへ秋よ野守のひとつ鐘

(同)
(同)

この秋は何で年よる雲に鳥
見渡せば詠れば見れば須磨の秋

(同)

いく秋のせまりて器粟にかくれけり
一家に遊女も寝たり萩と月
世の中は稻刈頃か草の庵

(前書あり)
(同)

秋十とせかへつて江戸をさす故郷
秋すゞし手毎にむげや瓜茄子
秋にそうて行かばやすきは小松川

(前書あり)
(同)

何くうて小家は秋の柳陰
後家の秋物のあはれをとどめたり
雨の日や世間の秋を堺町

(前書あり)
(同)

胡蝶にもならで秋ふる菜蟲かな
寂しきや須磨にからたる濱の秋
影まぢや菊の香のする豆腐ぐし

(前書あり)
(同)

おもしろき秋の朝寝や亭主ぶり
送られつ送りつはては木曾の秋
かくれ家や月と菊とに田三反

(同)
(同)

文ならぬいろはもかきて火中かな

(同)

冬の部

初時雨
はつ時雨初の時をわが時雨かな
けふばかり人も年よれ初時雨
旅人とわが名呼ばれむ初時雨
はつ時雨猿も小糞をほしげなり

(前書あり)
(前書あり)

木がらしに岩吹きとがる杉間かな
京に飽てこのこがらしや冬住居

(前書あり)

我が爲に日はうらなり冬の空

(前書あり)

初雪や水仙の葉のたわむまで
初雪や掛けかゝりたる橋の上

(前書あり)
(同)

はつ雪や聖小僧の笈の色
はつ雪やいつ大佛の柱たて

(同)
(同)

初雪に兎の皮の艶作れ
はつ雪や幸ひ庵にまかりあり

(同)

月の鏡小春に見るや目正月

(前書あり)

糞虫やおのれひとり冬の冬構

(前書あり)

難波津や田螺のふたも冬籠
冬籠りまた寄り添はむ此はしら

(前書あり)
(同)

金屏の松の古びや冬ごもり
折々に伊吹を見てや冬ごもり

(前書あり)
(同)

先づ祝へ梅を心の冬ごもり

(前書あり)

爐 開
爐開きや左官老いゆく蟹の霜

(同)

口 切

時 雨

新霽の出そめて早き時雨かな
いづく時雨笠を手に提げて歸る僧
かさもなき我をしぐるゝかこは何と
草枕犬もしぐるゝか夜の聲

(前書あり)
(前書あり)

作り木の庭をいさめる時雨かな
此海に草鞋を捨てむ笠しぐれ
しぐれ行くや船の軸繩に取りつきて
時雨るゝや田のあら株の黒むほど

(前書あり)
(同)
(同)

宿かして名をなぬらす時雨哉
村時雨てれふれ町の名なるべし
山城へ井手の駕籠かる時雨かな
一しぐれ磔や降て小石川

(同)
(同)
(同)

鶏の聲に時雨るゝ牛家かな
火吹竹音や時雨て小豆飯
ゆく雲や犬の逃吠村時雨
馬方はしらし時雨の大井川

(前書あり)
(前書あり)

一尾根は時雨るゝ雲か富士の雪
人々をしぐれよ宿は寒くとも

(前書あり)

木 枯
木がらしの身は竹齋に似たるかな
こがらしや竹にかくれてしづまりぬ
木がらしや頼はれいたむ人の顔
木がらしにほひやつしけし歸り花

(前書あり)
(同)
(前書あり)
(前書あり)

口切に塀の庭ぞなつかしき

(前書あり)

神の留守

留守の間にあれたる神の落葉哉

都出て神も旅寝の日数かな

(前書あり)

御命講

御命講や油のやうな酒五升

菊鷄頭切り盡しけり御影講

夷講

ふり賣の雁あはれなり夷子講

夷子講酢賣に袴着せにけり

冬

冬枯や世はひと色に風の音

枯木

そのかたち見ばや枯木の杖の長

散紅葉

尊かるなみだや染めてちる紅葉

落葉

百年のけしきを庭の落葉かな

宮人よわが名を散らせ落葉川

木の葉

三尺の山もあらしの木の葉かな

草の戸に茶を木の葉かくあらしかな

大根

武士の大根からき嘶かな

(前書あり)

三十里尾張大根のはなし哉

菊の後大根の外さらになし

口上に書おとしけり土大根

大根引

鞍つばに小坊主のるや大根引

葱

葱白く洗ひ上げたる寒さかな

枯葱

しのぶさへ枯れて餅かふ宿りかな

枯尾花

ともかくもならでや雪の枯尾花

冬牡丹

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

水仙

そのにほひ桃より白し水仙花

水仙や白き障子のともうつり

寒菊

寒菊や粉粧のかゝる白のはた

臘梅

臘梅や昔永井の金わたし

枯野

旅に病て夢は枯野をかけめぐる

霜枯

(前書あり)

霜枯に咲くは辛氣の花野かな

霜

霜をきて衣かたしく捨子かな

初霜や寒冷初る腰の綿

かりて寝む案山子の袖や夜半の霜

夜すがらや竹氷らする今朝の霜

霜をふんでびつこひくまで送りけり

薬のむさらでも霜の枕かな

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜

貧山の釜霜に啼く聲寒し

からくしと折ふし凄し竹の霜

紙子にも霜やおくかと撫で、見し

さればこそあれたままの霜の宿

有難やいたゞいて踏む橋の霜

麥生ゆ

麥はえてよきかくれ家や島村

雪

富士の雪廬生が夢をつかせけり

黒森をなにといふともけさの雪

さそへ雲白衣の天狗比良の雪

市人にて是うらむ雪の笠

少將の尼のはなしや志賀の雪

木まぐらの油ぬぐふや夜の雪

二人見し雪はことしも降りけるか

發句集

(同)

(前書あり)

(前書あり)

(同)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

(前書あり)

雪を待つ上戸の顔やいな光り
 雪の雲
 京まではまだ半空や雪の雲
 雪見
 いざいざらば雪見にころぶ所まで
 雪丸け
 君火をたけよき物見せむ雪丸け
 雪がこひ
 深川や根ごしの芭蕉雪がこひ
 水
 水苦く鼠が咽をうるほせり
 瓶破るゝ夜の氷の寝覺かな
 凍る
 櫓の聲波を打て鴨米る夜や泪
 冬の日や馬上に氷る影法師
 霰
 いざ子ども走りありかむ玉あられ
 霰回くや此身はもとの古柏
 いかめしき音や霰の楡木笠
 琵琶行の夜や三味線の音霰
 雜炊に琵琶さく軒の霰かな
 勇み立つ鷹引きすゆる霰かな
 寒さ
 袖の色よごれて寒しこいねずみ

(前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)

ごを焚て手拭あぶる寒さ哉
 蠟燭に顔のてらづく寒かな
 鹽鯛の歯ぐき寒し魚の棚
 寒けれど二人旅寝ぞたのもしき
 むろり
 五つ六つ茶の子に並ぶるろり哉
 火燧
 住みつかぬ旅のこゝろや置巨燧
 硯好む奈良の法師が巨燧かな
 きりんすわすれ音に啼く火燧かな
 炭
 白炭や彼浦島が老の霜
 消炭に薪わる音か小野の奥
 小野放や手習ふ人の灰せり
 火桶
 霜の後なでしこ咲ける火桶かな
 あらかねの土よりおこる火桶かな
 深草やこれも淺草火鉢かな
 埋火
 埋火や壁には客の影法師
 埋火も消ゆや泪の煮る音
 頭巾
 我黒髪なでつけにして頭巾かな
 をさな名や知らぬ霜の丸頭巾

(同)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (註あり)
 (前書あり)

未買ひに雪の袋や投頭巾
 頭巾着た顔さしこむや綿蓑
 紙衣
 ためつけて雪見にまかる紙子哉
 夜着
 夜着は重し吳天に雪を見るあらむ
 夜着に寝てかりがね寒し旅の宿
 夜着一つ祈り出したる旅寝かな
 蒲團
 被ふ蒲團や寒き夜やすごき
 紙衾
 (たのむは) 寝酒なき夜はたのむぞや紙衾
 寝酒なき夜はたのむぞや紙衾
 鉢
 長嘘の墳もめぐるか鉢たゝき
 納豆きる音しばし待て鉢たゝき
 冬菜賣
 さし籠る荻の友か冬菜賣
 冬の雨
 面白し雪にやならむ冬の雨
 芹焼
 悲まむや墨子芹焼を見ても猶
 芹焼やすそ輪の田井の初水
 水魚
 震せよ湖代の水魚煮て出さむ

(同)
 (同)
 (同)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)

河豚
 遊び来ぬ鯉釣りかねて七里まで
 兄弟のくすし憎むや河豚汁
 あら何ともなやきのふは過ぎてふぐと汁
 ふぐ汁や鯛もあるのに無分別
 ふぐ汁やあはうになりとならばなれ
 生海鼠
 生きながら一つに氷る海鼠かな
 乾鮭
 乾鮭や何某殿は毛唐人
 鴨
 海幕れて鴨の聲ほのかに白し
 鶯につゝみてぬくし鴨の足
 都鳥
 鹽にしてもいざことづてむ都鳥
 鴨
 水寒く寝入りかねたるかもめ哉
 千鳥
 星崎の闇を見よとや啼千鳥
 一疋のはね馬もなし川千鳥
 蜜
 鷹一つ見付けてうれしいらこ啼
 夢よりも現の鷹ぞたのもしき
 師走

(前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)
 (前書あり)

發句集

何にこの師走の市に行くからす
かくれけり師走の海のかいつぶり

(前書あり)

すゝはきや暮ゆく宿の高軒
衣配
松島や雪のしら地の衣くばり

(同)

旅寝よし宿は師走の夕月夜
春や立つまた春や見む此師走

(同)

有明も三十日にちかし餅の香
くれく餅を木塊の捨寝かな

餅花

月花の愚に針たてむ寒の入
から能も空也の瘦も寒の内

(同)

餅花やかざしにさせる嫁が君
年波や曇がまたの伊勢参り

雁さわぐ鳥羽の田づらや寒の雨

(同)

年忘三人よりて喧嘩かな
せつかれて年忘れする機織かな

年忘

梅椿早咲ほめむ保美の里

(前書あり)

半日は神を友にや年わすれ
魚鳥の心はしらずとしわすれ

厄拂

香を探る梅に藤見る軒端かな
打よりて花入探れ梅椿

(前書あり)

人にかはせて我は年わすれ
魚鳥の心はしらずとしわすれ

年忘

節季候の来れば風雅も師走かな
節季候を雀のわらふ出立かな

(同)

偽の舌に骨なし厄はらひ
年の市
一休が土器かはむ年の市

年の市

うか／＼と年よる人や古曆

(前書あり)

年とり物
須磨の浦の年とりものや柴一把

年の暮

煤掃は己が糊つる大工かな
煤掃は杉の木の間のおらしかな

(同)

月花のこれやまことの主達
月花もなくて酒のむひとりかな

年の暮

旅寝して見しやうき世の煤拂
これや世の煤にそまらぬ古盒子

(同)

歩行ならば杖突坂を落馬かな
朝よさにたれ松嶋ぞ片ごころ

年の暮

月雪とのさばりけらし年の暮
なりにけり／＼まで年の暮

(前書あり)

ほね柴や斯と見るより蝶の殻
世にふるもさらに宗祇のやどりかな

(同)

みな拜め二見の注連を年の暮
盗人にあうた夜もあり年の暮

(同)

月花のこれやまことの主達
月花もなくて酒のむひとりかな

(同)

わすれ草菜飯に摘まむ年の暮
ふる里や隣に泣く年の暮

(同)

朝よさにたれ松嶋ぞ片ごころ
古すたゝあはれなるべき隣かな

(同)

蛤のいける甲斐あれ年のくれ
めでたき人の数にも入らむ年の暮

(前書あり)

山鳥よ我もかも寝む宵までひ
海にふる雨や懸しきうき身宿

(同)

行年や薬に見たき梅の花
行年や汝の親の小松賣り

(前書あり)

子を背山妹山おろし兎原越
むさし野やさはるものなき君が笠

(同)

雪と雪今宵師走の名月か
冬庭や月もいとなる蟲の吟

(前書あり)

梅干にかよふ鶯あはれなり
語られぬ湯殿にぬらす袂かな

(同)

冬
冬知らぬ宿や頼する音あられ
石かれて水しほめるや冬もなし

(同)

雑の部

盃にみつの名をのむこよひ哉
琵琶の湖南よ疎顔か松の律

(同)

發句集

連
句
集

連句集

寛文五年

一 附句五 (芭蕉翁全傳)

(この附句は貞徳十三回忌追善百韻に芭蕉が附けし十八句の中なりと

月暮るゝまで汲むもゝの酒

其一

宗房

ならで通ふはむしやうやみの夜

其二

宗房

有明の影法師のみ友として

其三

宗房

竹弓も今は卒都婆に引替て

其四

宗房

なにの風情も茶飯ばかりぞ

其五

宗房

寛文七年

二 附句三 (續山井)

其一

かたに着物かゝるものかはうき難所
今をたうげとあつき日の岡

宗房

後生ねがひとみ侍がた
しやかの鑪あみだやすりのつば刀

其二

松宗房

賤が寝さまの寒さつらしな
おだ巻のへそくりかねて酒をかはん

其三

いかに野宗房

寛文十年

三 三句二 (一葉集)

其一

君も臣もさぞな三肌をあはせ衣

助勝

夏しりがほにゆるり國民

正朝

がけ作り河原おもてに見渡して

宗房

其二

抜けば露の玉散る太刀か一葉切

長忠

はなつ矢の根につよき秋風

定就

冷しき石はさながら虎に似て

宗房

延寶三年

四 百韻 (談林詩譜)

延寶三卯五月東武にて

いと涼しき大徳也けり法の水
軒を宗と因む蓮池
反橋のけしきに扇ひらき来て
石壇よりも夕日こぼるゝ
領境松に残して一時雨
雲路をわけし跡の山公事
或は日月は海から出るとも
よみくせいかに渡る雁がね
四季もはや漸く早田刈ほして
あの間に秋風ぞふく
夕暮は袖引次第局かた
座頭もまよふ懸路なるらし
そびへたりおもひ積て加茂の山
室のとまりの共遊ひもの
草枕おきつ汐風立わかれ

この百韻は川
西和露氏蔵
「談林詩譜」と
題する寫本中
より額原退藏
氏が發見し潮
介「誌上」に紹
介せるもの

宗 礎 幽 桃 信 木 吟 少 似 執
因 畫 山 青 章 也 市 才 春 筆 畫 因 山 也

一生はたゞ萍におなじ
わびぬればとなん云ひしもきのふ今日
それ初秋の金のなし口
十年を爰に勤て袖の露
おほん賀仰ぐ山のはの月
春は花栴の頃は西の丸
參内過て既に在江戸
時を得たり法印法橋其外も
新筆なれどあたひいくばく
歌のこと世上に眼高ふして
明石の浦は蟹もしるらん
蛸にも其入道の名は有ぞかし
八日くは見えし堂守
今もかも例をたがへぬ佛生會
夏花やつゝじ咲匂ふらん
あの山の風をもがたと窓明けて
月の前なる雲無心なり
露時雨ふる借錢の其上に
見し太夫さま色替えぬ松

章 市 因 山 春 因 畫 山 春 因 市 才 章 青 春 因 畫 也 市 春 市 才 山 因 市 畫

作者「春」は
「青」ならん

空起請烟となるも理りや
夜討むなしき野邊の夕暮
あてのみの酒氣を風や盜むらん
雨一とをり願ふ川ごし
名號の本尊をかけよ鳥の聲
それ西方に別路の雲
口舌事手をさら／＼とおしもんで
しら紙ひたす涙也けり
高面をのぞく障子の穴床し
ゆびのさきなる中川の宿
蒔繪さへ寺町物と成にけり
數寄は茶湯に化野の露
石灯籠月常住の影見えて
雪隠につゞく築山の色
ますぎ垣南山並に花の枝
うり家淋し春の黄昏
欠落の跡は霞の立替り
雪崩れする其岩のはな
松明の柱につゞく白湯かた

又

山 因 春 吟 也 章 市 青 才 因 山 春 市 因 畫 青 春 山 因 市 春 山 章

果しあふよに出あへや出あへ
聲高のみなもと聞ば衆道也
よりに芝居の垣間見をせん
おもほえず古巾着の錢をさぐり
めくら腰ぬけ夢の世の中
慮外者さはらばなどと眩を張
上様風の吹旅の空
御荷物に唐船一艘つくられたり
蜘蛛ふ虫も糸のわけ口
髪を撫て來べき宵也月の下
伽羅の油に露ぞこぼるゝ
戀草の色は外郎氣付にて
はながみ袋形見なりけり
さる間三年はこゝにさし枕
親の細工をあらためずして
何物か人のかたちと成やらん
しばし樂屋の内ぞ床しき
來て見れば有し昔にかはら町
小石をひろひ塔となしけり

因 畫 市 吟 春 山 才 因 春 畫 也 春 才 青 因 市 山 也 章

(一)作者「春」は「青」ならん

ない物ぞ眞の舍利は求めても
 誰かしつつる天竺の秋
 浪人を尋出たる空の月
 霧にこもりし城の遠近
 花折る事附り堀の魚取事
 すり餌によする梅のうぐひす
 やよ見たか祇園あたりのはるの空^{ナオ}
 うしろ帯して塗笠編笠
 屋敷者跡にたつたは年こはい
 順の舞には小々性が先
 常紋の袴のそばをかいとりて
 雨にも風にもかよはうよなる
 夢うつゝ女姿のちみどろに
 胸にたくのを別火とやいふ
 しゝくふた酬いを戀にしられたり
 たが參宮の伊勢ものがたり
 見たい事ちや松坂こえてかけ蹄
 遠く遊ばぬ盆の夕暮
 住つけば残る暑さも苦にならず

畫春因市章也山因春吟市春才市市章山因春畫

月はこととふうら店の奥
 秋の風棒にかけたる干菜賣^{ナヲ}
 賤がこゝろも明燈にあり
 綱手をもくり返しぬる網のうち
 あこぎが浦や牛のかけ聲
 みづらいふわつばも清き渚にて
 馴れてもつかへたてまつる院
 そも是は大師以來の法の華
 工の氣にも道や云ふらん

才春畫章市山因青山

延寶四年

五 附句四 (續 連珠)

其一

松のこず糸にうつる日の入
 飾竹のよは夢よつゝ年の果

松尾氏 青

其二

川かぜ寒き夜半の雪隠
 都出てけふみかのはら痛むらし

松尾氏 青

其三

むつくりとしてどこやらはかどあらせ
 寝てねごゝろのよいはりまくら
 其四 桃 青
 たまのちぎりに玉ぞとらるゝ
 さりとてはあうて別のうかりひよん
 伊州松尾氏 桃 青

六 附句三 (講語當世男)

其一

草の庵夏を一種のたのしみに
 茄子の煮物やまほとゝぎす
 其二 桃 青

其二

焼亡はきのふと過て葛城や
 あな藏のふたあくる佗しき
 其三 桃 青

其三

月の中の桂は凡そ何程ぞ
 がねにてかはん雲の一むら
 桃 青

七 百韻 (梅の牛)

奉納

連句集

此梅に牛も初音と啼きつべし
 ・ましてや蛙人間の作
 春雨のかるうしやれたる世の中に
 醉味喰交りの野邊の下萌
 摺鉢に若紫のすりころも
 庭働の男置きけり
 尻のひらけかゝりし二日月
 爪立て行く足曳の山
 五寸ほど手の届かざる歌の道
 ひとかい餘り住よしの松
 淡路島さつと咄のよそに見て
 友呼ぶ千鳥笑ひ聲なる
 去程におも白鷺の權之巫
 森の下風さわんくんと
 眞葛原踏まれて這うて逃げにけり
 蟲鳴くまでむごう靡かぬ
 戀の秋爰にたとへのあるぞとよ
 吉祥天もそれ程の月
 あつらへの瓔珞かゝる山かつら

芭蕉庵 桃信堂 青 章、青、章、青、青、青、青、青、青、青、青、青、青、青、青、青、青、青、青、青、青

(一)此卷及次の百韻の一巻を「江戸雨吟集」と云ふ「梅の牛」は延享四年再刻のものなるがその巻尾に「延寶七年三月」とあり
 (二)「葉集」「捐鉢を」
 (三)「同」「むかしはたらきの男ありけり」
 (四)「同」「ひらけそめたる空の月」一本「開けそめたる宵の月」
 (五)「葉集」「仕形ばなしの」
 (六)「葉集」に、「友呼ぶ鳥の」
 (七)一本「權之進」
 (八)「葉集」に、「青鷺の權之允」
 (九)「葉集」に、「森の下風木葉六ばら」
 (十)一本「むかし鳥までむがうなびかぬ」

(一)一本『わかれ』

何とて松はすねて見ゆらむ
うす柿とも茶ともわからぬ峯の雲

浅間の土を焼きかへしよて

物語伊勢白粉とよまれたり

平家の秋に産あれ行く

かみそりも内侍所も水の月

のうれん懸けしとこやみの霧

衣屋もすでに彌勒の花待て

かねの御嶽を兩替の春

岩橋やりんとかけたる一霞み

天につらぬく虹のつつばり

その四隅多門は手木を横たへて

日備の札に悪魔をさむる

獨過都鄙安全になすべしと

慈悲は上よりさがる米の直

人として思はざらむや親の五器

願によつて雪の竹箸

いきの松ひねり艾葉の百までも

氣根の色を小謠に見す

朝より庭訓今川童子經

さてこなたには二條喜右衛門

宿の月城を弓手にひぢまがり

後陣はいまだ横町の露

上々新蕎麥面もふらず切て出す

大根の精たちかくれけり

夜もすがら此本草を讀誦する

南無いき薬師來迎の時

紫の蛸は雲路にはひ出て

とがり矢二筋まなばしの先

軍は花追手勝手をもみ合

その勢何百きさらぎの巻

延寶五年

九百韻 (江戸三吟)

あら何ともなやきのふは過ぎてふくと汁

寒さしさつて足の先まで

居あひぬき霞の玉や亂すらむ

拙者名字は風のしのはら

桃 信 信

青 章 德 青

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

(一)『葉集』に
『むじりり』

相應の御用もあらば池のほとり

海老さこまじり折節は餅

醬油の後は湯水に月澄て

更けてしばし小便の露

きゝ耳や餘所にあやしき萩の聲

難波の芦は伊勢のよもいち

屋敷方あなたへざらりこなたへも

爲替小判や袖にこぼるる

ものぎはよ理り知らぬ我泪

干鱈四五枚是式の戀を

寺のぼり思ひそめたる衆道とて

短き心錐で肩つく

ぬか釘の僅のことを云ひつのもり

露がつもつて鐘鐺の功德

うそつきの坊主も秋やかなしむらむ

その一休にみせばやの月

花の色朱稍を残す夕まぐれ

いつやきつけの岸の款冬

芳野川春も流るゝ水茶碗

連句集

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

青

章

德

『一葉集』に、「
ぬけたり」

『一葉集』に、「
正三が」

『一葉集』に、「
雲な隠しそ」

つゞけやつゞけ紙張の母衣
ところてん水の逆巻く所をば
波せき入て大釜の淵

落瀧津地獄の底へさかさまに
鐵杖躰の骨をくだくか

酒の月後妻うちの御振舞

隣の内儀相客の露

眉をとり袖ふさがする花薄

野風も今は所帯持なり

鍋の尻入江の汐に氣をつけて

のつべいうしと鴨の鳴くらむ

山陰に精進落て松の聲

三十三年杉たてる庵

開帳や俊成作の本尊かけて

寂蓮法師小僧新發意

伊呂波韻横たつ山もなかりけり

雲を増補に時雨ふる秋

影ひとり長月比の氣根もの

野の宮の夜すがら拾一枚

駕籠かきも浮世をわたる嵯峨なれや
まよひ子の母腰がぬけたか

傷寒を人々いかにとがめしに
悪鬼となつて姿はその儘

正三の書置かれたる物語

こゝに道春これもこれとて

前は池東寂山の大屋敷

花の盛に町中をよぶ

青柳の髪結々々々やい

舞臺に出づる胡蝶鷲

つれぶしに端唄うたひの蛙鳴く

禿が酌に雨の夕ぐれ

戀の土手雲なへだてそ打またげ

御朱印使風の玉章

心中に山林竹木指きる事

末世の衆道菩提所の月

十歳の和尚のうは氣秋更けて

彌陀はかゞ様消えやすき露

蓮の糸組屋の店の風涼し

わかいものよる暖簾の波

戀の淵水におぼるゝ人相あり

首だけのおもひつゝしみてよし

うき中は下焦もかれてよわ〜と

家〜の書に寝汗かゝるゝ

しなひうち大夜着の裏表迄

鞍馬僧正床入のやま

若衆方先づつくしには彦太郎

かづら姿や右近なるらむ

暮の月橋の精あらはれて

すもゝ山もゝ悉皆成佛

見性の眼のひかり錫の鉢

轆轤のめぐり因果則

ゑいやとさ爰にひとつの片輪もの

敷がねとして十貫目箱

代八やしおび車のしのぶらむ

日傭をめして夕顔の宿

山雀のかきふんどしに尻からげ

青菜の目白羽織着て行く

『一葉集』に、「
ひつじの堅
ると誤
る

『一葉集』に、「
青菜に「流
すちむ

青菜の木の実のうみや流るらむ

よこねおろしに谷ふかき月

山高く湯船へだつる水遠し

浅間の烟輕石が飛ぶ

しらなへし花の吹雪の信濃なる

甲頭巾に駒いばふ春

熊坂も中間霞引きつれて

山又山や三國の九郎介

關手形安宅に早く着きにけり

松風落て漉紙をとく

太物の庭の芭蕉葉五六端

楚國のかたはら横町の秋

邯鄲の里の新道月明て

よく〜思へば會所を求むる

千句より十萬億も鼻の先

われらが爲の守武菩薩

音楽の小弓三味線あい山

四つ竹さわぐ竹の都路

姉そひてお伽比丘尼のゆくこども

章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳

徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳 章 青 徳

『一葉集』に、『燒』に、

『一葉集』に、『唐土』に、『同年春』と前書あり

『一葉集』に、『水衣を笑ふ』、『末に吹』、『一葉集』に、『借金なして』

後家ぞまことの佛にてまします
譲られし黄金の隣こまやかに

こぬかみがきの革袋あり
旅枕油くさゝや嫌ふらむ

鯛でかりの契りこがるゝ
はかゆきにざく／＼汁の薄情

連理の箸のかたしをもつて
實にや花白樂天が燒筆に

唐土に歸る羽箭の雁

一一 百韻 (江戸三吟)

物の名も蛸や古郷のいかのぼり

あふのく空は百余里の春
嶺に雪かねのわらんぢ解そめて

千人力の東風わたるなり

熊つかひむかへは月の薄曇り

水右衛門をわらふ初雁の聲

墨の髭杖の下葉のうつろひて

尾花が袖に鏡かさうか

執

筆

判はんじいかなる風の閑にふく
をつとは山伏海士の呼び聲
一念の鱧となつて七まとひ
かたちは鬼の火鉢いたゞく
紙ふのり伊勢の國より登りけり
神のいがきを越し壁ぬり
繩階子夜の契りやきれつらむ
さすが別れのちんばひく見ゆ
骨うづき忍び笠にて顔かくし
立出づるより踏まれての露
夕まぐれ小風呂に流す水の月
木綿ざらさの紅葉かたしく
花に風荒木珍太をあたくめて
胸につかへし霞はれ行く
天津風借鏡なして歸りけり
勘當ゆるす二月中旬
釋迦すでに跡式譲り給ふらむ
八萬諸聖教古手形なり
腰張や十方世界法の聲

信

桃

信

青徳

信

桃

青徳

青

青徳

『一葉集』に、『雪の音』に

凡そ命は赤土の露
いつ迄か炮砕賣の老の秋

ころばぬやうに杖で行く月
駒留めて下駄打叩く雪の暮

東坡が小者竹の一むら

その里へ石摺の文かよひけり

緞子の染木蠹のさすまで

土用しれ山は紺地の青嵐

谷水たゝへて鬱醉の如し

異風者金柑淵に遺捨る

吹矢を折て墨染の月

秋のあはれ隣の茶屋もはやらねば

松虫鈴虫戀たふるゝ

戀草をつれて走りし末かれて

その葉平に請人やなき

木賊色の狩衣質に置し時

貧乏神の社見かぎる

出雲にて世間咄のわる口に

松江の浦の相店のかゝ

連句集

傘桶に鱧のわたをつみかけて

ひらめ白うらむくの黒鯛

花なるらむ龍のみやこの驕り者

父大臣のかねつぶす春

手道具や十二重の薄霞

笈のうちより遠山の月

小男鹿の妻をとられな宿かすな

公儀のおふれ武蔵野の秋

闕所ものはらふ草より草の露

火つけの燄とられ行くらむ

本三位辰子をはりたるごとくにて

貫の箱や鉛おこしなる

かたくまに難波の梅の兄弟

貫之が筆朝書の春

その年徳壺利の水とけそめて

饅饨きり落す橋の下水

つりものに中の間の障子引放し

戀のやころさねだり來にけり

買かゝりしれぬ憂名を付かけて

一一一

青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章

章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章 青徳 章

お使に行とも秋の果所なき
二間ほどかく文箱の露
宿の月やりてや鞘をはづすらん
既によし原の合戦破れし
はやりうたさが名をえし其身とて
でつち小坊主男なりひら
冷食を鬼一口に喰てけり
是生滅法生姜梅漬
煩惱の夢をさまして棚さがし
冥きにまよふ道は紙燭で
口惜の花の契りやぬく太郎
ふられて今朝はあたら山吹
ひよんな戀笑止がりてや啼蛙
あたまくだしに通路の雨
お情にあづかるほどの木なりとて
根なしかづらのかゝる浪人
長髪の霜より霜に朽ちんとは
藥ちがひに風寒きまで
幾月の小松がはらや隠すらん

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春
とへど岩根の下女はこたへす
磯清水汝がながれをたてぬかと
いかつに情を杓でくみよる
戀衣紺の袂にはし折て
雲引かつく星のかよひ路
ほと／＼と天の戸ぼその暮の月
帝近所へ夜ばなしの秋
錦かと田樂染る龍田川
山は時雨で摺木の音
浮雲のそなたに近き隠里
日影を盗て仙境に入
幻を挑灯持や尋ぬらん
夢はやぶれて杖と草履と
しにはづれ此頃の禮お門まで
衣を肩にかゝる仕合
酒手乞白雲帯を解かせたり
秋風起て出るより棒
氣遠を月のさそへば忽に
尾を引ずりて森の下草

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

(一) 『一葉集』に
『寒むまで』
(二) 『一葉集』に
『汝なかれを』

(一) 『一葉集』に
『ふみをこは
する』に誤る

御神禮則花は散給ふ
つくしはるかに春ぞ飛行
捧げたる二ツの玉子かいわりて
うちまた廣き國の守へと
雪隠に伊豫の湯桁も打渡し
ふみ石九ツ中は十六
山作り硯にむかひ筆とりて
夢窓國師もいでや此世に
物相を都の西に参りつゝ
茶の湯の古道跡は有けり
太閤の下駄一足や残るらん
高麗までも隣ありきに
秋の寢覺火入をさげて行くものは
悵氣の袖に月を打わる
忍び路の霧の妻戸をつき倒し
喧嘩眼にくどく夕ぐれ
薄情かゝりがましき若いもの
黒手にはねて殺すは〜
追剽の跡は裳ぬけと成にけり

春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春
綴蓼鉄粉や吐息つくらむ
千年の膏藥既に和らぎて
折ふし松に藤の丸さく
より金の花郭公春のくれ
山もかすみの唐で我を折
見渡せば詠れば見れば須磨の秋
桂の帆ばしら十分の月
さかづきに文を飛する雁鳴て
山は錦に歌よむもあり
えぼし着て家に歸ると人やいふ
うけたまはりし日備大將
備には鋤鉄魚鱗鶴のはし
前ははたけに峯高うして
隠居にはおもしろき處にて候
おし繪さま〜松有菊有
金砂子打拂ふにも千代の秋
みがれ出づるお廣間の月

執 桃 四 似 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春
筆 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春 春

(1) 『一葉集』に『柱』に誤る

(2) 『一葉集』に『まかすう』に誤る
(3) 『一葉集』に『賣り物』に

木賊荆山をうしろに長袴
 覺が袂は木曾の麻衣
 身を墨に何をうらみて鳴鳥
 異見はよそ吹森の木がらし
 揚錢を其後の掛の太はらひ
 長者のごとき君にぞありける
 供養する別れの鐘やひびくらむ
 寝ものがたりを筆にまかする
 花の香を驪山宮より聞傳へ
 宗盛のこゝろよぎもない春
 白妙の旗に紛れて残る雪
 ふじを軒端にあやめふく頃
 世の閑え定家西行ほととぎす
 貫之以後の有明の月
 八百年御燈の光露更て
 狸のこつちやう如來寺の秋
 狼や香の衣に散紅葉
 骸導く僧正が谷
 一喧嘩岩に残りし太刀の跡

青、春、青、春、青、春、青、春、青、春、青、春、青、春、青、春、青、春、青、春、青、春

處立ちのく波の瀨兵衛
 今はやすり切果て飛ぶほたる
 賢の似せそこなひ竹の一村
 鋸を扱て歸りし短氣もの
 おのれが胸の火事場空しく
 立さわぐ車長持おしやられ
 いざ又人を賣るものもなし
 錢の數素盞雄よりも讀初て
 正哉勝々双六にかつ
 おもへらくかるたは釋迦の道なりと
 親仁の説法聞けばきくほど
 茶小紋の羽折は墨に染ねども
 つよさうな絹の日野山に入
 簡略を木幡の關や守らむ
 鶴籠はあれども毛見をおもへば
 腰の骨いたくもあるゝ里の月
 又なげられし丸山の色
 片基盤都の東花ちりて
 かすみの間より膳が出ました

、青春青春青春青春青春青春青春青春青春青春青春青春

(1) 『一葉集』に『君が喉笛』に

立はるや乗掛付てまつ内に
 股引脚半きそ始して
 御供にはなまくさのゝ小殿原
 つゞく兵衛大根
 無盡宿先をかけんもおとなげなし
 萬事は未來前世のあきなひ
 因果は夫秤の皿をまはるらん
 善男善四と説せ給ひし
 又爰に孔子字は忠治郎
 時にあはねば落す前髪
 不心中世にまじはりて何かせん
 君は誰笛我ほてつばら
 しのぶ夜は取手にかゝる闇の月
 秋を通さぬ中の關口
 寂滅の貝ふき立る初嵐
 石こづめなる山本の雲
 大地震つゞいて龍やのぼるらむ
 長十丈の鯨なりけり
 かまぼこの橋板遠く見わたして

青春

兼升瀬田より参る庵丁
 ぬれ縁や北に出づれば手盥の
 粉糖こぼれて時雨初けん
 六藏が伊駒の山の雲はやみ
 河内は在所とゝの秋風
 さられては飯匙こぼす袖の露
 顔は鍋ぶた胸こがす月
 腫氣さす姿忽花もなし
 春半より西瓜は／＼
 新道の温泉ながすうす氷
 代八車御幸めづらし
 伺公する例の與三郎大納言
 たはけ狂ひのよし野軍に
 口舌には空腹切て伏たりけり
 弓手のわきより赤いふんどし
 道具持つかへや京へのぼるらん
 團子則五粒づゝのむ
 唐に獨の茶數寄有りけるが
 緋部焼なる秦の舊跡

青春

この巻以下
歌仙三巻は春
證の武蔵第十
八、第九及第
十巻なりと

鉢一ツ萬民これを賞翫す
けんどもむ麥や壽山の端の雲
小半の雫に濁る月も月
屈平沈む飄箏の露
鸞鳳も山雀籠にかくれけり
からくりの天下おだやかにして
臣は水およぎ人形波風も
海士のむかしは斯の如くに
あはう嘶芦火にあたりて夜もすがら
八盃豆腐冬ごもる空
面影のおろし大根花見して
あかり障子にかすむ夜の月

(一四) 歌仙 (松嶋歌仙)

春 似 桃
春 澄 青 春 澄 春 青 春 春 春 春 春 春 春

與作あやまつて仙境に入
はやり歌も雲の上まで聞えあげ
いつも初音の〜
御町にて其御妻は〜
あしたの伊達染夕のときわけ
むつ言のきがねの蚤のはひ出で〜
釋迦に添寝の夢の短夜
所作らしい諸行無常の鐘の聲
鼓の下手くそ寺は桂の
小芝居を君もをかしと思召し
鬼こらへずを生捕にして
天も花に毒の醉狂月に影
鯨のこてふの春になり行
聲霞む猫はかへつて野ら遠し
へついの下に草は萌えなむ
夜の中に名もなき茸のさればこそ
金輪際より鳥山の露
毘沙門の鋒のしたり國の秋
外道の首の落ちかゝる月

青 澄 春 澄 青 春 澄 青 春 澄 青 春 澄 青 春 澄 青 春 澄 青

二二 葉集に天
帝の振假名を
省く

莖舌は八つにや裂けぬらむ
空誓文に霜枯し中
藥物右近が歌を煎じても
古川のへに豚を見ましや
先妾にパウの二けんの高し
日待に來たか山郭公
やすき夜も寝ぬに目覺めず奈良茶すき
雲のいづこに匂ふ焼味噌
内熱に遠の風やにくむらむ
松はすねたる入道相國
花はとぶ袖は錦の長絹きて
肌にはきむく鶯の聲

(一五) 歌仙 (松嶋歌仙)

澄 春 似
春 澄 青 春 澄 春 青 春 春 春 春 春 春 春

天下一竹田稻色になる
淀鳥羽も鏡のかけに見えたりや
やよ時鳥天帝のさた
鶯の不受不施だにも置ぬ世に
残るものとは古寺の雪
花は根にもとの裸でかへるなり
すい風呂の底は龍宮の春
出女の玉依姫は是とかや
神代もきかず百文の戀
靈寶の枕草子をふし拜み
奉加の帳の首書まで
妾に中頃儒者一人の月澄て
或は廣澤熊澤の秋
狀箱の名を忘れたる雁の聲
とかう云ふ間にしほむ初秋
ふり袖の薄も髭と生出で〜
小町が果の女方も
戀訴訟ふしんながらも指上る
告にまかせて口説申候

青 澄 春 澄 青 春 澄 青 春 澄 青 春 澄 青 春 澄 青

(1) 『一葉集』に
『岸の青柳』に

あゝ稻荷くるしき中を思へたゞ
杉の庵に腹ぞさびしき
針立の玄賓僧都見まはれて
秋果てぬれば湯山の月
あみ楊枝きのふは峯の薄紅葉
四五文ほどが露しぐらむ
夕日影光はちよくに傾て
鹽からあらふ沖津白浪
竹戸棚阿波の鳴門や明けぬらむ
渦きり／＼とまきし蜘蛛の巣
山一つこぶの根おろし花の雲
耳せゝかくす峯の青柳

一六 歌仙 (一葉集)

高う吹出す山の秋風
ふらすこの見えすく空に霧はれて
油なに／＼雲ぞなだるゝ
浦島や櫛箱あけて悔むらん
鼠あれゆく與謝の夕浪
捨小舟米蛇の跡さびて
藏も籬も水草生けり
今朝みればゐてこし女は貧報神
大酒くらひ口そへて露
一座の月八ツのかしらをふり立て
ばくちになりし小男鹿の角
數芝居ぬれてや袖の雨の花
在郷寺を宿として春
麥飯の菩薩や爰に霞むらん
妙なるのりととろゝとかるゝ
幽靈は紙漉舟にうかび出
さかさまにはひよる浅草の浪
股ぐらから金龍山や見えつらむ
聖天高くつもるそらばん

似 春 桃

澄 青 春 澄 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青

(1) 『一葉集』に
『なかりしに』
(2) 『一葉集』に
『鶯の宿り』に

(3) 『一葉集』に
『織もの巻物』に

帳面のしめを油にあげられて
ながるゝ年は石川五右衛門
まかなひをすいたの太郎左いかならん
既に所帯も軍やぶれて
軒の月横町さして落給ふ
後家を相手に懸衣うつ
去男かねにほれたる秋更て
鶉の床にしめころし鳴く
産出すをみるし野とや思ふらん
きせうものなき天のかぐ山
さほ姫のよめり時分も花過て
古巢にかへる仲人の鳥

一七 歌仙 (評語江戸通り町)

實や月間口千金の通り町
爰に數ならぬ看板の露
新蕎麥や三島がくれに田鶴啼て
芦の葉こゆるたれ味噌の浪
豪處棚なし小舟こぎかへり

連句集

下男には與市その時
乗ものを光悦流にかゝれたり
藥草喰品くすりこしらへ
眞鍮の彌陀の劔を戴て
西をはるかに緑青の山
隈どりの峯より月の落かゝり
秋を坐布の床の山風
燒鳥の鶉啼なる夕まぐれ
精進あけの三位入道
かゝと寝て花咲事もなかりしよ
又孕せて蛙子ぞなく
鶯の宿が金子をねだるらん
龍田のおくに博奕こうじて
毛氈を御門の目には錦かと
そよや霓裳羅漢舞する
破れ袈裟雲のかよひ路吹とちよ
鼠に羽か郭公とぶ
押入や淀のわたりの箱階子
織ものゝ巻衣笠の森

桃 青
二葉子
紀 子
ト 尺
二葉子

桃 青
二葉子
紀 子
ト 尺
二葉子
桃 青
二葉子
紀 子
ト 尺
二葉子
桃 青
二葉子
紀 子
ト 尺
二葉子

似 春 桃
澄 青 春 澄 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青 澄 春 青

(一)「一葉集」に
「立まよひ」

(二)「一葉集」に
「三千餘人の」

(三)「一葉集」に
「いっし」

(四)「一葉集」に
「さゝれ舟」

能太夫末は時雨の松見えて

殿様かたへゆくあらし哉

雁鶴も高根の雲の立まよひ

組板の月摺鉢の不二

昔の秋三千人の拂物

釋迦もこのよを欠落の時

放埒に精舎のかねをつかひ捨

大阪くづれ瓦のこれる

神鳴の火入とかやは是とかや

鬼一口に伽羅を喰割

花の時千方といつつ若衆なり

戀のくせもの王代の春

葛浦のかつら剃刀をとぐ

經によう似た鶯のこゑ

是も又うばそく優婆夷あま蛙

寢覺わびしき澤庵の耳

菩提もと木枕一つかどありて

御息所の店がへなりけり

なかむれば松浦と申す五郎兵衛町

はや舟にのりのぼる京ばし

大鋸屑の煙りもともに不二の獄

蚊にさゝれ行田子の浦ふね

虫の髭白髪とこそはなりにけれ

瓜の中この實盛が首

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

一八 附句五 (講語江戸通り町)

其一

寶いくつあつらへの夢あけの春

簀笠小槌あら玉の空

手盥に五日の雨と流すなり

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

孔子は鯉魚のさしみにあてられ

夜起する糞土の垣に月更て

説經芝居うづら啼なり

萩すゝきさあ刈萱ぢや〜

捨る身も鬼の餌食の生肴

南無や酒樽醬油來迎

鐵橋に大焦熱の苦を受る

仁藏菩薩に槌を打せて

膳棚の少しこぶかき山見えて

大宮の御在所箬箱と哉覽は

碓のうたも集にや入ぬらん

大津奈良屋も奈良の御時

武者ぶりを引つくろひてよは〜と

敵にうしろを見せる尻つき

桶ひとつ物の哀をとどめたり

それ人間はぬかみその虫

馬の脊かゝる處の秋なりけり

唐網打ば須磨の浦浪

もすそを見ればかるい裝束

中がへり歸る處をしらんとて

うなり聲既に平家と聞時は

脚布をきせたる鎌倉の山

あつたら眞桑泥水の末

此界をひつくりかへす大砂鉢

相場に立しよさの浦浪

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

桃 青

(一)「一葉集」に
「はなし」
(二)「一葉集」に
「よい〜と」
(三)「一葉集」に
「駕は」
(四)「一葉集」に
「かへす」
(五)「一葉集」に
「うなる聲」

紗綾りんず茶う島の子が玉手箱

桃青

くさり録もれて出てたる三日の月
雲井に落る雁の細首

桃青

其一六

上は脇ざし中は竹筒

爰もとに紙子をどしの鏝着て

桃青

(二) 此一聯は百韻「薄紅葉」の巻にあり

其一七

心になふ長持のふた

送り膳道少しだにへだてねば

桃青

其一八

魚の腸其まゝ海に沈められ

女院誰かれ二位の尼鯛

桃青

其一九

大屋の退屈うす紅葉する

味喰焼の七日つゞきし稲葉山

桃青

其二十

ひかる語石の枕の秋の暮

長嘯の筆きりくす啼く

桃青

二〇 附句二 (一葉集)

其一

(江戸廣小路附句の其二なり依て省略す)
二一 附句一 (物種集)

(江戸廣小路附句の其三なり依て省略す)

延寶七年

二三 表八句 (一葉集)

夢想

さげたり二月中旬初茄子

天下のおかけ我等まで春

雨霞古藏ひろくおさまりて

しろき鼠に雪ぞ舞ゆく

雲間より赤い鳥のほのくと

谷の戸口にかゝる看板

上々吉有明の空吹くあらし

千里の羽も金箱の秋

桃青 杉風 仙風 龜代 忽風 杉風 而巳 執筆

(二) 「一葉集」に「いろつくや」

二三 百韻 (芭蕉兩吟百韻)

(杉風兩吟百韻)

色付くや豆腐に落て薄紅葉

山をしほりし櫃の下露

桃青

手みづ桶雲の廣袖月もりて

こぬか亂るゝ風の夕暮

桃青

或時は餅に詠むる雪の空

猿子をだいて峯の松原

桃青

朝日影岩根の床のわき風

熱湯をながす末の白浪

桃青

茶巾さばき袖よりつたふ風過て

何と軒號窓の明ぼの

桃青

五十點在るが中にもほととぎす

一村雲を繼紙になむ

桃青

縫箔に好んでとほる瀧の糸

音羽嵐の松も姫君

桃青

小夜時雨忍ばせ給ひける程に

はねのあがりしきぬくの末

桃青

風匂ふ小便壺に浪越えて

桃青

連句集

(二) 「一葉集」に「あつ湯」
(三) 「一葉集」に「だも」と誤る

青風 青風 青風 青風 青風 青風 青風 青風 青風 青風 青風 青風 青風 青風 青風

コレヲとよむ
「一葉集」に
「彼岸の浪」と
あり
原書「二句虫
はみ見えず」と
あり
福川露城氏蔵
芭蕉筆の懷紙
と稱するもの
にはこの二句
「よしなき謀
反突止千歳」
「夢なれや由
井昌説夢なれ
や」とあり
原書「明通る」と
ありて、そ
れを「明て今
朝」と直し、
更に斯く直し
てあり
大関巻末には
「この年七月
下旬」とあり

又男か妻かたちはかはらねど
古い羽折に老ぞしらるゝ
つく／＼と記念のやゝを寝させ置
結びもとめぬざんぎりの露
鎖がまもれて出でたる三日の月
雲井に落つる雁の細道
料理人御前を立て花の浪
木具屋の扇沖の春風
住吉の汐干に見えぬ小刀砥
箔の姫松縫ものをとく
しゝばゝに襷褌も袖も絞りつゝ
枕ならべし腰ぬけの君
踏みはずす天の浮はし中絶えて
脛の白きに鏡をうしなふ
滑川ひねり艾に火をとぼし
鶴が岡より羽箒の風
いはうきはう利久といつし法師有て
朝比奈の三郎よし秀の月
虫の聲つゞり置たる判盡し

春 青 德 春 青 德 春 青 德 春 青 德 春 青 德 春 青 德 春 青 德 春

いさご長じて石摺の露
とんよなも今此時をいはひ歌
園生の末葉ならす四竹
馴てやさし乞食の妹背花に蝶
うぐひす啼てこものきぬく
思ひ川垢離も七日の朝霞
南無や稻荷の瀧つせの春
延寶九年
天和元年
二五五十韻 (次 韻)

桃
共
才
青
角
丸

德 春 青 德 春 青 德

「一葉集」に、
「燈をくらぐ」と
あり
「一葉集」に、
「安房の岬」と
あり
「一葉集」に、
「安房の岬」と
あり
同書に「葉」と
記す

しばらく風の松をかしき
夢に來て軒を語る郭公
灯心うりと詠じけむ月
微雨行く麻から山の木の間より
粟に稗さく黍原の守り
侘雀畫眉を客によびつらむ
慈悲齋が閑つれ／＼にして
風の乞食に軒の下を借す
先祖を見知る霜の夜語り
灯火をくらぐ幽靈を世に返すなり
古きかうべに鬚引つかけ
武士の刃祭を荒にける
女はななくに早きとていむ
様あしく鏡のひづみたる恨み
心の猫の月を背ける
露に寝て且易い馴易忘し
乳なしのうばのかへる葛の葉
春秋を花と漁とに暇なき
白魚をかざすより餅春の宴

揚

水 青 角 水 青 丸 水 青 角 水 青 丸 水 青 角 水 青 丸 水 青 角 水 青 丸

寛平の御伴諸合せあり
衛士挑灯を枕して睡る
はしたなりける女房の聲更けて
血摺のねまき夜や忍ぶらむ
別れ來しむくろは起てたよ／＼と
獄囚正を物くるはしむ
天帝に目安を書いて聞えあげ
桂を掘つて星種を植う
雨の擔子風のかますの冷かに
秋に對して所帯堂の記
白親仁紅葉村に送る聲
漁の火影鯛を射る
師魚は諫め鱧は胸を割ける
安房の御崎に流人身を泣
向後にて行徳寺の晩鐘を
枸杞に初音の魂鳥の魄
戀人の袂に似たるかりぎかな
雨をくねるか夏風がつま
夕暮は息に烟を吐く思ひ

水 青 角 丸 水 青 角 丸 水 青 角 丸 水 青 角 丸 水 青 角 丸 水 青 角 丸

民屋あつて腹をせばむる
笑の木愁ふる草の野は昧く
亦露分る娑婆の古道
月見けむ高雄が手向嬉しくて
あはれと文を躍る夜終
脱ぎ置し小袖よ何と物いはぬ
朝枕に、とゞめ、おどろく
花に照る太神宮の奇特なり
幣に巢作る託の鳥

二六 百韻 (次 韻)

〔一〕 第五百五十韻
第五卷立句に
「鴈にきけい
なほほせ鳥と
いへるあり」
春澄「一葉
集」に「うた
ふ」
〔二〕 「一葉集」に
「とらせける」
〔三〕 「一葉集」に
「其聲を」
〔四〕 「一葉集」に
「其の別れ」
となす

鴈にきけといふ五文字をこたふ
春澄にとへ稲負鳥といへるあり
ごとし此秋京を寢覺めて
月を連に坐烏帽子をかぶるなり
笹に徳利を折かたげしや
おぼこさす川添草の葉をしこき
卑山路に錢とらせきる
夕こゆる關をかますにかくれ來て

桃揚才共

青角丸青水丸角
角青丸水青角水丸角

夜盜松風の音を相圖に
雨の闇にすけて敵を討せたる
舞臺に柴の庵しをり戸
とひやう仁うは氣より世を驚て
大切つて其聲の悲しく
ねさま侘て雪の爐に根深温る
あらしはいづく帳の紙室
女の影歸ると見えて跡すごく
若衆氣にしてやつれ潤る、
ストント、茶入落しては命とも
とりあへず狂歌仕る月
秋の末つかた嵯峨野を通り侍りて
薄の院の御陵をとふ
鬼飼ふ舍人は花に隠るめり
子丑の番を寅に預けて
渾沌翠に乗て氣に遊ぶ
朝咲しらむ馬鹿々々の山
□の別れ女房に髭のある有りけり
吉原君をぬすみいさなふ

丸角水青角丸青水丸角水青角丸青水丸角水

棒軍勇やつ防ぎ止まつて
つきうすの陰より杵に弦引く
富の屋を徳明王の守ります
摩訶右衛門苦奈國に生る
愛を捨、子を捨、毗盧遮阿毗羅呼
鼠と落て風はやり吹
夜の食乏しく寢覺めける比は
蛸の音さへ耳に腹たつ
月の秋うらみはこべの旦夕て
露にしがらむ妹が落髮
物いふて鏡に貌の残り見えよ
繪と酒もりの興盡きて泣く
小袖かす木枕の帯さうぞきて
納豆の神を齋し祭る
煤掃之禮用ニ於鯨之哺
雇ひの翁齒菜刈りに入
風いたく牛さへ氷るなりけるに
荒屋に馬の枯屎をたく
慄しと白骨のかね付て居たる

丸青水丸角水青角丸青水丸角水青角丸青水丸角水

會呂利新話を讀に夜長し
禪小僧豆腐に月の詩を刻む
雷盆鳴て芭蕉には風
花の今朝驛に羊を直切るなり
樓に草鞋をつるす頃春
所帯わび息はこそぞの雪を掃
箕を着て寒く雀とらむ
風のからしの枝に蕪干せる
山彦嫁をだいてうせけり
忍びふす人は地蔵にて明過し
木樵のまなじり木瓜の唇
細殿に鬼灯の燈籠照したる
をどり狩衣の裾にたつ波
酒の月お伽坊主の夕ばえて
眞桑流しやる奥の泉水
河骨の葉にほれ歌を書きやつす
ほむらにたえて蛇兒と化
築地ある根の底に車引止め
天火々間の金掘の尊

水青角丸青水丸角水青角丸青水丸角水青角

蜺江の磯等岸等は白波に
 青海苔うたひ蟹琴を弾
 花の菅屋芝に旅泊を賞る。
 月に秋とふ東金の僧
 淋しさを蕎麥に露干す豆依
 夕顔重く貧居ひしげる
 桃の木に蟬鳴く頃は外に寝み
 枕の清水香蕭散くむ
 夢の身を何と纏にさめかねて
 我聞俗は口にきたなき
 生づらを蹴折かれては念無量
 泥坊消て雨の火青し
 草の奥下妻が原にくれかゝり
 狹の里の足あらひ鍋
 配所人芦の小着布を干かねて
 あらめの茵辛螺を枕と
 心地やむ鯛に針さす生小船
 まれに尾だきを出し山老
 変星の豊の光を覺けり

水 丸 角 水 青 角 丸 青 水 丸 角 水 青 角 丸 青 水 丸 角 水 丸 角

勅使芋原の朝臣蕪房
 秋を啼く鳥の鳥を迎へせし
 夏やきのふの郭公さに
 津の國の生田の森の初月夜
 道さまたげに乞食壊す
 霜下て更行く里の粥配
 寺々の納豆の聲あした冴ゆ
 よすがなき檜花賣の老を泣
 團炭荷うて小野に歸りし
 鬮をぞ洗ふ臙の清水影とては
 茂みがくれに牛逃したる
 竹の戸を人待つ下女が寝忘れて
 打つぞつぶてに恨みこたへよ
 泪のみすほん／＼と鳴をれば
 千とせをくさる水の埋木
 葉傳ひて寸龍花に登るか
 如泉法師が春力あり

二七 百韻 (次 韻)

水 青 角 丸 青 水 丸 角 青 水 丸 角 水 青 角 丸 青

『一葉集』に
 『戸板を』とあ
 り
 『一葉集』に
 『やとり細る』
 と記す

世に有て家立は秋の野中かな
 詠置月にかぶ秋を買
 あはれとも茄子は菊にうら枯れて
 鮎さびすたり海鼠漸く
 雪の客裳の客とふるまへば
 蘇鐵の亭に題を設る
 樂やつこ隠れて風流林と呼ぶ
 樽に羽織を着せてあふぎし
 嬉しきや女房のせいて泣付くを
 戀あふれたる弟手討に
 音更て横の板戸をこち放
 枯れ行く宿に冬子うむ犬
 髮結の住みけむ庭は蓬して
 卒都婆の男ゆかた凋れる
 骨刀土器鏝のもろきなり
 瘦せたる馬の影に鞭うつ
 内に寝ても心はきのふ露旅
 米とぐ音の耳に露けき
 扱もかびて簀子折たく秋しもぞ

才 揚 桃 共

水 丸 青 角 丸 水 角 青 丸 水 角 丸 青 角 丸 水 角 青 丸 水 丸 青 角 丸

無錢居士とて朝深き月
 筆耕青磁の牛に花付て
 燕茶水の流れ汲むらむ
 后宮のやぶ入車やどりふる
 ねたしや上の御若衆の様
 頭巾かつぎさげて、夜の雪踏の忍ぶ音
 挑灯切つて霜のかげろひ
 風前の角内と身を悟りける
 入の山ぶみ狼にのり
 雷の斧丁々として音さらに
 玄又玄し龍頭の國
 俗のいふ鹿島の海の底なるや
 朝の日の東本地赤螺
 何を覺て蛤の寝て夢見たる
 ひそか／＼と雨蓑をもる
 月を茸く夕芋の葉の片軒端
 粟刈敷て團子干す頃
 露鶏の羽がひのひよこひよ／＼と
 水くみ起て帚掃ねる

二三三

水 丸 青 角 丸 水 角 青 丸 水 角 青 丸 水 角 青 丸 水 丸 青 角 丸

釜かぶる人は忍びて別るなり
 穂を手に抱くまぼろしの君
 古家の泣聲闇にさへなれば
 いたちの禿倉風の荒ぶる
 麻の葉に生ける小鮒を折交て
 かた枝さすなる生の浦柚子
 きたなくて清き隣と住む月に
 明けて寝御座をかけ渡す露
 晝夢の食たく程に夕ぐるゝ
 人死を待て生たわいなし
 石が曰く花の目出度咲にけり
 木玉にかなで風を舞柳
 風雨臺の跡ハ霞ニ空シキゾ
 驢馬ノ進マザル體キラ／＼シ
 大根の葉越の關のこなたより
 雪のから鮭に文付てやる
 衰へや火桶の姫の腰寒き
 有怪し床にふとん引ずる
 もや／＼と寝入かねくとくにたへて

丸 青 角 丸 水 角 青 水 丸 青 角 丸 水 角 青 水 丸 青 角

通はす首の泣てたゝすむ
 迷ひしれ恨が原の目かけ塚
 横雲別之助修行し暮て
 今宵月に村風と申す三味線を
 やさしや薄泪こぼすか
 秋の霜腹切草をことわれば
 住持ゆるして明る柴の戸
 面白く盡、曲を狂ひしに
 海老ちらしたる海苔の青衣
 戀崎の松が娘の花の臺
 契世にのこる雪の明神
 ト問し鶯の翁のしら／＼と
 蛇の氣立て草の煩
 笹深き皇居にかりの紙帳釣る
 清水の司麥を馨く
 いつも参る法味寺の醬色殊に
 老尼はなしの袈ありけり
 哀餘る捨子ひろひに遣はして
 外里に鹿の裾引て入

角 青 水 丸 青 角 丸 水 角 青 水 丸 青 角 丸 水 角 青 水

(一) 武藏曲一は
序に「天和二
年」とあり

松茸に道しまがへば枯いばら
 栗の梢にあり明のいが
 住道に葦の音をしのぶなる
 足袋さす宿に風霜を待つ
 扇折る女は夏に捨られて
 夫は江戸に戀わすれさく
 むさし一步さすがにと讀でやみけり
 艶なる茶のみ所求めて
 夜々に來て淨瑠璃語る聲細く
 法眼がかきし武者繪とやらむ
 宮造る虚の匠の名乗して
 鬘斗を冠の纒に折かけ
 鬘なる翠簾のうるめは枯残り
 故園今問へば幽醒し
 風の月熱の御靈を鎮めける
 黄なる小僧の怪しさよ露
 山路わくいくちの笠を置忘れ
 篠の枝折を猿にことわる
 岩彦の柄を深く立ちのぞき

青 丸 水 角 青 水 丸 青 角 丸 水 角 青 水 丸 青 角 丸 水

氣を奪れし人のぬけがら
 血を踏で風太刀を折る音嚴く
 古香をとつて野邊に枕す
 行きくれて花に夜着かる芝筵
 狐は酔て餘韻に入る
 二八 四句 (次 韻)
 餘興
 附贅一つ爰に置きけり曰く露
 無用の枝を立し犬蘭
 夜貌の朝咲花にあらそひて
 塵裡の四虫音を隠るなり
 天和 二年
 二九 百韻 (武藏曲)
 錦とる都にうらむ百つゝじ
 壺花さくら二番山吹
 風の愛三線の記を和らげて
 雨双六に雷を忘るゝ

揚 桃 共 才
 水 青 角 丸
 櫻 千 卜 曉
 時 春 尺 雲

宵うつり盡の陣を退りける
 せんじ所の茶に月を波む
 霧軽く寒や温やの語ヲ盡ス
 梧桐の夕孺子を抱て
 孤村遙に悲風夫を恨むかと
 媒酒旗に咲を進むる
 別るゝに馬手は山崎小錢寺
 猶ほれ塚を廻向して過ぐ
 袖桶に忘れぬ草の哀折る
 小海老瓜白母を慰む
 悴たる鶯の鬢を黒やかに
 捨杭の精かいとり立り
 行脚僧卒都婆を夢の草枕
 八聲の月に笠を挿く
 味噌樽にも露深き夜の戸は
 泣てをのゝく萩の少女
 妻戀る花馴駒の見入たる
 柱杖に蛇を切る心春
 陽炎の形をさして神なしと

共芭素似昨言執

角蕉堂蕪尺千塙筆水雲春堂蕉角

紙薦に乗て仙界に飛ぶ
 秦の代は隣の町と戦ひし
 ねり物高く五歩に一樓
 露淡く瑠璃の眞瓜に錫寒し
 蚊の聲氈に血を含むらむ
 夜を離れ蟻の漏より旅立て
 槐のかくるゝ迄に歸り見しはや
 匂落つ杏に酒を買ふところ
 強盜春の雨をひそめく
 嵐更け破魔矢つまよる音すこく
 鎧の櫃に餅荷ひける
 末の五器頭巾に帯て夕月夜
 猫口はしる萩のさわく
 朝顔に齧まつりし艶姫
 藏守の叟霜を身に着る
 此所難波の北の濱なれや
 紀の舟伊勢の舟尾張船
 波は白浪さゝ波も又をかし
 傾城に袴着せて見る心

角蕉堂蕪尺千塙筆水雲春堂蕉角

今年年忘、無の榮を盡すらむ
 柊が枝に小荷奉りける
 庭稻荷殿に隠れて仄なる
 いたらぬ役者藝冥加あれ
 豊さわぎ院に日待を催され
 霞の外の權田樂をなむ召す
 紫の鬘を花に折しきて
 しだのみ荒し様の宿
 去年ウラの月の三十日の月くらし
 雪ものぐるひ筆を杖つく
 山鳥の音に羽ぬけ子や尋ぬらむ
 鶴の箔衣ありし佛
 夢に入る玉落の瀧雲の洞
 日を額に打つ富士の棟上
 松髪の祖父葛上下に出立て
 城主に靈の蜜柑獻する
 或卜に火あての鯉生きかへり
 旅小刀の吼脱けて行く
 世捨木や世捨の松に名を朽て

嵐峽

角蕉堂蕪尺千塙筆水雲春堂蕉角

からすの衣堤にくらし
 橋上の番太は鐘を恨みたる
 西瓜はしらす潮満つらむ
 露くだるしだれ角豆の散柳
 月は築地の古きにやどる
 遁世のよそに妻子をのぞき見て
 つき歌耳にのこる吉原
 歩別れ馬は待つらん榎陰
 百姓の家に入て腹切る
 是此年先祖の櫓の火の消ぬ
 時ならず米に生ふる菌
 雨を聞て放下の村に閑なる
 燕尾小勝が墓に落ちくる
 衣裳草萌出る翠紅に
 雪ふゞき茶や花の端つゞき
 御池漕屋従の渡守しばし
 薫ふるふか水引の蓑
 張雀鳴子く〜に驚きて
 無情人秋の蟬

角蕉堂蕪尺千塙筆水雲春堂蕉角

『一葉集』に
『山寺どのを
離る』と誤る

『一葉集』に
『金色の玉』

連句集

月は問ふ山鳥どのを離る
石風呂の跡は哀ありける
帯木の茂きは銀に天せられ
今共とかけ金色の玉
袖に入る蜻蛉を契りけむ
涙の玉あり明暮にかわかす
我聞けり鈍士は胸の中黒しと
闇思君境町に溺るゝ
肩を踏つて短尺とりに立躁ぐ
奥にての御遊隔御戀
篝火を刀に掛けて忍ぶ山
浪は井積にかくす落人
物あらふ盟をふせて暮る程に
藍搗く臼のごぼくし聲
市賤の木びらを負る木陰には
日傘さす子と姫と男と
玄關にて神樂をまうけ給ひけり
夜と共照らす袋挑灯
花の奥盗人狩に泊して

角堂千峽蕉塙昨蘭曉峽千堂蕉
角 天和三年 三〇 歌仙 (虚 栗)

八重く霞飛行小天狗
憂方知酒聖一貧始覺錢神
花にうき世我酒しろく食黒し
眠を盡す陽炎の瘦
鶴啼て青鷺夏を隣るらん
童子礫を手折る唐梅
月を濁す汀の夢を芦かりて
浪のさゞれにたなご釣影
琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし
朝にるぼしをふるふ紙衣
浪人の戀するを詰おぼしめす
やぶの一夜に入るかひぞなき
散櫻同じ宗旨を誓ひける
藤は退之が肝魂ヲ奪フ
雷鳥の初音は鶯を鳴ならん

芭 一 嵐 共 嵐 執

蕉 品 角 蘭 雪 蕉 品 筆 蘭 角 雪 品 蕉

『一葉集』に
は『松たぐひ
なき』とあり

連句集

汐てる海に松魚争る
傾城の鏡を拾し神代より
羽織に角をかくす風流雄
あだし野の棺を出でゝ草の月
破蕉誤つて詩の上を次ぐ
朝鮮に西瓜を贈る遙なり
つくししらぬひの松浦片燈
めづら見る揚屋くの壹鹿
蚤は私のさかづきをのむ
栴入れぬ影は六十の荊にて
御所に胡坐かく世を夷なり
人の怪異穂長の宵の髪子黒く
松田くびなき雪のあけぼの
きたなしや陣中に似せいびきかく
山野に飢て餅を食る
盗井の月に伯夷が足洗ふ
木賊は武士の憤草
見ぐるしき艶書を焼や柴焼
笑ひさんやに歸るたましひ

雪 品 蕉 雪 蘭 角 品 雪 蕉 蘭 角 晶 蕉 蘭 角 晶 蕉 蘭 角 晶

曉の寝言を母にさまされて
終に發心ならずなりけり
花に栖む廬山の列をはねたらん
柳にすねて瀑布を酒飲む
三 一 歌仙 (虚 栗)

一年三百六十日
開レ口咲無三日一
飽や今年心と臼の轟と
世はしら浪に大根こぐ舟
月雪を芋の編戸や枯つらん
こほろぎは書をよみ明す聲
百をふる狐と秋をなぐさめし
傾婦を蘭の肆にうる
敵ある涙の色をいはす草
然は天下一番の顔
文盲な金持は金をもつて鳴る
にはとり豚はつち養ふ
其池をしのばすといふかび屋敷

李 共

下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角

士峰の雲を望む加賀殿
 袖召て國に千曳の鏡わり
 名にたつかざし黒木串柿
 髭荒の花見る男内ゆかし
 春青君とはりあひのなき
 月に啼く生憎のうかれ上戸や
 芒もしろくたぶさ刈録
 朝がほは道歌の種を植たらん
 院の後家のあるかなき宿
 都近き島原小野を思ひ出る
 仕組をくだす八重のちぢ文
 墨染に女房ふたりを頼む哉
 寝みだれかもじ蛇となる夢
 笛による骸骨何を共情
 風そよ夕切籠燈の記
 酔はらふ冷茶は秋のむかしにて
 こぬ夜の格子鳴を憐む
 名月の前は涙にくもりつゝ
 金橙徑に粕かみをおもふ

下角 下角 下角 下角 下角 下角 下角 下角 下角 下角 下角 下角

葉生妻を世捨ぬ奴にたとへけん
 すり鉢かふる草堂の霜
 寸法師切れの衣のみじかきに
 昔を力む卒都婆大小
 佛の多門を見せよ花の雲
 凡夫三百人の春かぜ
 三三 歌仙 (虚 栗)
 酒債尋常往處在
 人生七十古來稀
 詩あきんど年を食る酒債哉
 冬湖日暮駕馬鯉
 干鈍き夷に關をゆるすらむ
 三線人の鬼を泣しむ
 月は袖こほろぎ眠る膝の上に
 鳴の羽しはる夜深きなり
 恥しらぬ僧を笑ふか艸芒
 時雨山さきからかさ舞
 笹竹のとてらを藍に染なして

芭共
 蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉

(一)この巻及次巻は芭蕉か甲斐の郡内にありしとき巖崎一舟の二人か尋ね行きて綴りしものならんと云ふ句集には「雷書」馬はく(雷書)野哉とあり

狩場の雲に若殿を戀
 一の姫里の庄家に養はれ
 厨名にたつといふ題を責けり
 ほととぎす怨の靈と啼かへり
 浮世にしづむ寒食の瘦
 春は花貧重し笠はさん依
 芭蕉あるじの蝶丁見よ
 腐れたる俳諧犬も喰はずや
 鯉々として寝ぬ夜ねぬ月
 聲入の近付まゝに初碇
 たゝかひ止て葛うらみなし
 嘲りぞ黄金は鑄ニ小紫
 黒鯛くろしおとくめが乳
 枯藻髪菜螺の角を巻折ん
 魔神を使荒海のさき
 鐵の弓取たけき世に出よ
 虎懐に妊るあかつき
 山寒く四睡の床を吹くあらし
 埋火消えて指のともし火

蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉

下司后朝を妬み月を閉づ
 西瓜を綾につゝむあやにく
 哀いかに宮城野のほた吹凋るらん
 みちのくの夷しらぬ石臼
 武士の鎧の丸寝枕かす
 八聲の駒の雪を告げつゝ
 詩あきんど花を食る酒債哉
 春湖日暮駕馬鯉
 天和三年 (未詳)
 三三 歌仙 (一葉集)
 夏馬の遅行我を繪に見る心かな
 麥手ぬるゝ瀧洞む瀧
 露の葉に洒灑竹の宿徴て
 弦なき琵琶にとまる黄鳥
 而洗ふ腕の鏡などとは
 さくらは二十八計けん
 きさらぎや武者物語申上
 後家御靈雨の翠簾の居がくれ

芭 芭
 蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉、蕉

かくらくも旅ねは少し矢背の里
更てはるかに門たゞくおと
斯る雪詩を買に来る人あらん

一爐の粥に江の焼屋舟
國荒て憎しと雁肥にけり

暮風鎮ムル倫の宮
クツワ子が鞘卷望む月照せ

妹萩米也もうき世萬葉
花あはせ櫻は判をしりぞいて

燕尾は風の裾をかへすなり

陽炎の具殿屋作る日の大工
嫁に嫁喚百年の粟

今朝のくうかれ道者の袖を引
櫛のり坂の清水濁るな

血に染る甲を松にかけ置て
餅を拜する大年の例

長史なる乞食は京の榮艸
千本をふとる牛菜の莢

崩たる頸は又烏の媚をかり

古佛の腹に假寝せし月
身をしぐれ荒山伏の袖ぬれて
佛白雲の后こがるゝ
ちきり守牡丹は晝のかゞり火に
白袋袖躍あやめ髮結
我ほめる乙掣ばかり雨降な
夕影長者且まつらん
九ッの唄に赤き花を煉
序を書残す藤の文橋

三四 歌仙 (養虫庵小集)

胡艸垣穂に木瓜も無家かな
笠おもしろや卯の實むら雨
ちるぼたる春にさくらを拂らん
市に小言をになふ朝月
やゝさぶの殿は小袖をうちかけて
紅白の菊かぜに暮を採
しづかなる卵塔雨の日をくらく
とねりは縁をかりて居ねぶる

芭 一 藥

晶 焄 焄 焄 焄 焄 焄 焄

揚弓のそれ矢は御簾にとゞまりて

上氣の神といはふ三線

うば玉の躰を箔に彩けり

密夫はぢよいのちつれなき

あさがほのくねるにゆすりをこされて

うしと髪きる葛のいつはり

母の親にあまえて月を背けをり

うもれてはてぬ身を支離にて

通夜堂のかいくれ花をのぞくころ

さくら子消てつり鐘に垂

春風の池にかゞみをほり出す

鳥は縁をつぐるふくとり

院の田に餅米刈ん君とつれて

青萩そめのはかま織する

風のきぬけぶりの音をや括らん

月野をたどる道行の感

あたらしき塚ゆさくとぞ呼凄し

沓を後の臣にいさめる

千金はいやしく糞土をたからとす

靨姫もすつればあぶらくさしや
吉原の三十年を老の九十九髪
ねやのはしらに念佛書をく
よもぎふに火を消狐來ざりけり
ひとり胡弓をつくすすながら
島もりの髭等に酒を買せつゝ
松に巢をもる蝙蝠の千代
俳諧のそらごと花の浮狂人
馬蹄に鼓おくるはるかぜ

天和年中

三五 三つ物 (伊賀御集物)

栗野老山齒菜尉か秋こそあれ
自禮飾るか炭がまの松
御幸へだつ霞は坂をゆがむらん

三六 歌仙 (一葉集)

時節さぞ伊賀の山越花の雪
身はこゝもとにかすむ武藏野

青 府 青
一 品 青
桃 青
杉 風
芭 蕪

(一)『金蘭集』に

店賃の高き軒端に春の来て
どうやらかうやら暮る年なみ
發句脇されて名残の月遠し
誰ぞ来い鐘は八か七か
寐ぐるしき例の瘁に夢覺て
きのふの酒を訪ほとゝきす
浮雲のきえて跡なき扣帳
親仁以来の山おろしの風
古郷の松ははびこる境杭
朱印をそめて時雨降ゆく
探幽が篋の雲に残る月
京ばし渡る初雁の聲
伏見駕さて其頃は秋の風
かこひを亭に手枕の露
一生は起る氣のなき我思ひ
世をうきものにかるうして置
張ぬきに都の辰巳山見えて
ふのりを解し寺さふらふな
前髪に立名をつむむ絹のきれ

風、蕉、風、蕉、風、蕉、風、蕉

涙をむすぶ編笠のひも
落らるゝ心の中ぞ哀なる
眞さかさまに岸のしら露
又ひとりつゞいて進む法師武者
いさごを蹴立尻馬にむち
寝とぼけて夜深き月に旅衣
三里ばかりの跡に朝霧
追剎にさてもあぶなき野路の露
うけて流いた太刀風の米
吉岡の松にかゝれる雲晴て
雨や黒茶を染てゆくらん
消残る手摺の幕の夕日かけ
火繩のはしの一二寸ほど
何ものか詠め捨たる花のかけ
江戸にも上野國もとの春

蕉、風、蕉、風、蕉、風、蕉、素堂
風、蕉、風、蕉、風、蕉、蕉、堂

(三)『末』か

此句延寶九年
の『東日記』に
あれど素堂の
脇は何年か不
明なれば假に
天和年中とす
『一葉集』に
『ゆく』

貞享元年

三八 二句 (春と秋)

江戸を立日

芭蕉野分その句に草鞋かへよかし
月ともみちを酒の乞食

李下
芭蕉

三九 二句 (春と秋)

伊勢山田にて芋洗ふといふ句を和す

宿まゐらせん西行ならば秋の暮
芭蕉と答ふ風の破笠

雷枝
芭蕉

四〇 二句 (春と秋)

花の咲く身ながら草の翁かな
秋にしをるゝ蝶のくづをれ

伊勢山田勝延
芭蕉

四一 三句 (熱田三歌仙)

旅亭桐葉の中心さし淺からさりければしは
しとゞまらんせし程に

連句集

四二 二句 (熱田三歌仙)

此海に草鞋捨ん笠しぐれ
むくも佗しき波のから鯛
木枯に冬瓜ぶらりとぶら付て

芭蕉
桐葉
東藤

四三 三句 (熱田三歌仙)

其あした
馬をさへ詠むる雪のあした哉
木葉に炭を吹おこす鉢
はた／＼と機織音の名乗來て

芭蕉
閑水
東藤

四四 歌仙 (熱田三歌仙)

尾張の國あつたにまかりける頃人々師走の
海みんとて船さしけるに
海暮れて鴨の聲ほのかに白し

芭蕉

(一)『名古古市史』
によれば桐葉
は富商なるが
如しこの前書
に旅亭とある
は亭主の意か
「葉集」には
前書なし、而
して表六句に
枯に殘る冬瓜
木に
下は「四句目
つたやいつ結
端は「細うたも
影はとうかも
月の空如行ら
露に
「暮れては露
道に「葉集」に
句日「年」のよ
せはしき「桐
葉
「一葉集」に前
書なくして、
「風月十九日』
とあり

串に鯨をあぶる鰯
 二百年我此山に斧とりて
 樗の種まく秋は來にけり
 入月に鶉の鳥のわたる空
 駕なき國の露負れ行
 降雨は老たる母の泪かと
 一輪咲し芍薬の窓
 棋の工夫二日とちたる目を明て
 周に歸ると狐なくなり
 靈芝ほる河原遙に暮懸り
 華表はげたる松の入口
 笠敷て衣の破れ綴り居る
 秋のからすの人喰に行
 をととひの野分の濱は月すみて
 霧の霰に龍を書續く
 花曇る石の扉を押ひらき
 美人の形拜むかげろふ
 蝦夷の聲なき蝶と身を侘て
 生海鼠干にも袖はぬれけり

桐葉 東工
 葉藤 山
 葉蕉 山
 葉藤 山
 葉蕉 山
 葉藤 山
 葉蕉 山
 葉藤 山
 葉蕉 山
 葉藤 山

木間より西に御堂の壁白く
 藪にくすやの十ばかり見ゆ
 ぼつ／＼と炮碌作る祖父ひとり
 京に名高し瘤の呪咀
 不二の根と笠着て馬にのりながら
 寝に行鶴のひとつ飛らむ
 待つ暮に鏡を忍び薄粧ひ
 衣かつく小姓萩の戸をおす
 月細く時計の響八ツなりて
 棺急ぐ消がたの露
 破れたる具足を國におくりける
 高麗の縣に昌作りて
 紅染の唐紙に花の香を絞り
 ちひさき宮の永き日の伽
 春雨の新發意棕荷ひ來て
 青草ちらす藤の撮折

四五 二句 (同)

翁美濃路へ打こえんと聞えければ

山蕉葉藤 山蕉葉藤 山蕉葉藤 山蕉葉藤 山蕉葉藤

笠は長途の
 雨にほころび
 紙衣はとまり
 めたりわが心
 たるわが心
 さへあはれに
 登えけるむか
 此國の才士
 し事不圖あり
 もひ出て侍
 りと前書あり
 「時鳥」と改
 めたり

四六 歌仙 (冬の目)

繪笠雪をいのちのやどり哉
 菓一つかね足つゝみゆく
 狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉
 たそやとばしる笠の山茶花
 有明の主水に酒屋つくらせて
 かしらの露をふるふあかうま
 朝鮮のほそりすゝきのにほひなき
 日のちり／＼に野に米を刈
 わがいほは鷺にやどかすあたりにて
 髪はやすまをしのぶ身のほど
 いつはりのつらしと乳をしぼりすて
 きえぬそとばにすご／＼となく
 影法のおかつきむく火を焼て
 あるじは貧にたえし虚家
 田中なるこまんが柳落るころ
 霧にふね引人はちんばか
 たそがれを横にながむる月ほそし

桐葉 芭蕉
 芭蕉 野水
 芭蕉 荷水
 芭蕉 重五
 芭蕉 正平
 芭蕉 水蕉
 芭蕉 五蕉
 芭蕉 分蕉
 芭蕉 分蕉
 芭蕉 分蕉
 芭蕉 分蕉
 芭蕉 分蕉
 芭蕉 分蕉
 芭蕉 分蕉
 芭蕉 分蕉
 芭蕉 分蕉

となりさかしき町に下り居る
 二の尼に近衛の花のさかりきく
 蝶はむくらにとばかり鼻かむ
 のり物に簾透顔おぼろなる
 いまぞ恨の矢をはなつ聲
 ぬす人の記念の松の吹おれて
 しばし宗祇の名を付し水
 笠ぬきて無理にもぬるゝ北時雨
 冬がれわけてひとり唐萱
 しら／＼と砕けしは人の骨か何
 鳥賊はゑびすの國のうらかた
 あはれさの謎にもとけし郭公
 秋水一斗もりつくす夜ぞ
 日東の李白が坊に月を見て
 巾に木權をはさむ琵琶打
 うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに
 箕に終の魚をいたゞき
 わかいのりあけがたの星孕むべく
 けふはいもとのまゆかきにゆき

五水 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉 五蕉

綾ひとへ居湯に志賀の花漣て
廊下は藤のかけつたふ也

四七 歌仙 (冬の日)

おもへども壯年いまだころも振はず
はつ雪のことしも袴きてかへる

霜にまた見る露の食
野菊までたづぬる蝶の羽おれて

うづらふけれと車ひきけり
麻呂が月袖に鞆鼓をならすらむ

桃花をたをる貞徳の富

雨こゆる浅香の田螺ほりうへて
奥のきさらぎを只なきになく

床ふけて語ればいとこなる男
縁さまたげの恨のこりし

口おしと縮をちぎるちからなき
明日はかたきにくび送りせん

小三太に盃とらせひとつうたひ
月は遅かれ牡丹ぬす人

野 杜 芭 荷 重 正
水 國 蕉 兮 五 平 國 水 蕉 兮 五 水 蕉 兮 五 國

五 國

細あみのかゝりはやぶれ壁落て
こつ／＼とのみ地蔵切町

初花の世とや嫁のいかめしく
かぶろいくらの春ぞかはゆき

櫛箱に餅すゆるねやほのかなる
うぐひす起よ紙燭とぼして

篠ふかく梢は柿の蒂さびし
三線からん不破のせき人

道すがら美濃で打ける碁を忘る
ねざめ／＼のさても七十

奉加めす御堂に金うちになひ
ひとつの傘の下學りさす

蓮池に鶯の子遊ぶ夕暮暮
まどに手づから薄様をすき

月にたてる唐輪の髪赤枯れて
戀せぬきぬた臨濟をまつ

秋蟬の虚に聲きくしつかさは
藤の實つたふ雫ほつちり

五 國 兮 水 蕉 兮 五 國 蕉 兮 五 水 蕉 兮 五 國 蕉 兮 五 水 蕉 兮 五 國 蕉 兮 五 水 蕉 兮 五 國

ひとりは典侍の局か内侍か
三ヶの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ
しらかみさむ越の獨活刈

四八 歌仙 (冬の日)

杖をひくこと僅に十歩

つゝみかねて月とり落す霧哉

こほりふみ行水のいなづま
齒菜の葉を初狩人の矢に負て

北の御門をおしあけのはる
馬糞掻あふぎに風の打かすみ

茶の湯者おしむ野への蒲公英
らうたげに物よむ娘かしづきて

灯籠ふたつになさけくらぶる
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず

蕎麥さへ青し滋賀樂の坊
朝月夜双六うちの旅ねして

紅花買みちにほとゝぎすきく
しのぶまの業とて雛を作り居る

杜 重 野 芭 荷 正
國 五 水 蕉 兮 五 平 國 水 蕉 兮 五 水 蕉 兮 五 國

五 國

命婦の君より米なんどこす
まがきまで津浪の水にくづれ行

佛喰たる魚解きけり
縣ふる花見次郎と仰がれて

五形菫の昌六反
うれしげに囀る雲雀ちり／＼と

眞晝の馬のねふたがほ也
おかざきや矢矧の橋のながきかな

庄屋のまつをよみて送りぬ
捨し子は柴刈長にのびつらん

晦日を寒く刀賣る年
雪の狂吳の國の笠めづらしき

襟に高雄が片袖をとく
あだ人と樽を棺に吞ほさん

芥子のひとへに名をこぼす禪
三日月の東は暗く鐘の聲

秋湖かすかに琴かへす者
煮る事をゆるしてはぜを放ける

聲よき念佛藪をへだつる

五 國 兮 水 蕉 兮 五 國 蕉 兮 五 水 蕉 兮 五 國 蕉 兮 五 水 蕉 兮 五 國 蕉 兮 五 水 蕉 兮 五 國

(一)「婆心録」に、
「再板居湯と假
名付けたるは
非也」とて「す
五湯」とせり
されど「を正し
湯」を正しと
す

(二)「婆心録」に、
「餅居うる間
のほのかな
る」

(三)同書に又、「柿
の塔さびし」とあり

(一)「婆心録」に
「霧ふりて」と
あり
(二)「同に『櫻の
徴』とあり

かげうすき行燈けしに起侘て
おもひかねつも夜の帯引
こがれ飛たましひ花のかけに入
その望の目を我もおなじく

四九 歌仙 (冬の日)

なには津にあし火焼家はすけたれど
炭賣のをのがつまこそ黒からめ
ひとの粧ひを鏡磨寒
花蘇馬骨の霜に咲かへり
鶴見るまどの月かすかなり
かせ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日
萩織るかさを市に振する
加茂川や胡麻千代祭微近み
いはくらの智なつかしのころ
おもふこと布搦哥にわらはれて
うきははたちをこゆる三平
捨られてくねるか鷲の離れ鳥
火をかぬ火燧なき人を見む

(三)「標註七部集」
に「念」に「ト
ク」と假名つ
けたり

重 荷 杜 野 芭 羽
水 五 分 筵 蕉 水 國 花 五

水 五 分 蕉 水 國 花 五 筵 蕉 水 國 水 五 分 筵 蕉

門守の翁に紙衣かりて寝る
血刀かくす月の暗きに
霧下りて本郷の鐘七つきく
ふゆまつ納豆たゞくなるべし
花に泣櫻の徴とすてにける
僧ものいはず歎冬を吞
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ
宣旨かしこく釵を鑄る
八十年を三ツ見る童母もちて
なかたちそむる七夕のつま
西南に桂の花のつぼむとき
蘭のあぶらにト木うつ音
賤が家に賢なる女見てかへる
釣瓶に粟をあらふ日のくれ
はやり来て撫子かさる正月に
つゞみ手向る辨慶の宮
寅の日の旦を銀冶の急起て
雲からうばしき南京の地
いがきして誰ともしらぬ人の像

水 五 分 筵 蕉 水 國 水 五 分 筵 蕉 水 國 水 五 分 筵 蕉

(一)「婆心録」に
「そいゝろに涙
打かへり」

泥にこゝろのきよき芹の根
粥すゝるあかつき花にかしこまり
狩衣の下に鍔ふ春風
北の方なくく／＼廉おしやりて
ねられぬ夢を責るむら雨

五〇 歌仙 (冬の日)

霜月や鶴のつく／＼ならびぬて
冬の朝日のあはれなりけり
櫻槍山家の體を木葉降
ひきする牛の鹽こぼれつゝ
音もなき具足に月のうす／＼と
酌とる童蘭切にいで
秋のころ旅の御連歌いとかりに
漸くはれて富士見ゆる寺
寂として椿の花の落る音
茶に糸遊をそむる風の香
雉追に烏帽子の女五三十

田家曉望

荷 芭 重 杜 野
水 五 分 筵 蕉 水 國 水 五 分 筵 蕉

水 五 分 筵 蕉 水 國 水 五 分 筵 蕉

庭に木曾作るこひの薄衣
なつふかき山橋にさくら見む
麻かりといふ歌の集あむ
江を近く獨樂庵と世を捨て
我月出よ身はおほろなる
たび衣笛に落花を打拂
籠輿ゆるす木瓜の山あひ
骨を見て坐に涙くみうちかへり
乞食の糞をもらふしのゝめ
泥のうへに尾を引く鯉を拾ひ得て
御幸に進む水のみくすり
ことにてる年の小角豆の花もろし
萱屋まばらに炭團つく白
芥子あまの小坊交りに打むれて
おるゝ蓮の實立てる蓮の實
しづかさ飯臺のぞく月の前
露おくきつね風やかなしき
釣柿に屋根ふかれたる片庇
豆腐つくりて母の喪に入

水 五 分 筵 蕉 水 國 水 五 分 筵 蕉 水 國 水 五 分 筵 蕉

〔一〕甲子吟行に
 〔二〕市人よこの
 笠置らう
 〔三〕葉集に
 〔四〕雪の笠
 〔五〕同書引はり
 〔六〕一葉集に
 〔七〕霜寒き旅集
 〔八〕とあり、また
 〔九〕如行の肩書な
 〔一〇〕此卷「春と秋」
 には「元祿風
 韻」に全卷を
 録せり、同書
 宣本は曲書門
 人松田文志の
 手寫にして倉
 重木刀氏(文
 志男)所藏也
 〔一一〕春と秋に
 〔一二〕海に霜の

連句集

元政の草の袂も破ぬべし
 伏見木幡の鐘はなをうつ
 いろふかき男猫ひとつを捨かねて
 春のしらすの雪はきをよぶ
 水干を秀句の聖わかやかに
 山茶花匂ふ笠の木がらし

五一 表六句 (冬の日)

いかに見よと難面うしをうつ霞
 樽火にあぶる枯原の松
 とくさ刈下着に髪を茶釜して
 檜笠に宮をやつす朝露
 銀に蛤かはん月は海
 ひだりに橋をすかす岐阜山
 抱月亭
 市人にいで是うらん笠の雪
 酒の戸たたく鞭の枯梅

五二 三句 (笈日記)

抱芭 野芭 杜重 荷羽
 月蕉 水蕉 國五 兮笠

朝かほに先だつ母衣を引つりて
 霜の宿の旅寝に蚊屋を着せ申す
 古人かやうの夜のこがらし
 翁をはじめてやどしける夜
 美濃大垣
 芭如
 蕉行

五三 二句 (春と秋)

能きほとに積りかはれよ簀の雪
 冬のつれとて風も跡から

五四 二句 (一葉集)

師の櫻むかし拾はん落葉哉
 薄を霜の髭四十一
 月夜すむ竹の曲糸琵琶澄て
 簾に鋪の聲を設けし
 洞鴨の石の古巢も冷ましく
 作らぬ松の雨にのびたる
 草鞋を印の塚に築きしより

芭木 芭木
 蕉因 蕉因
 如山 如山
 行山 行山

能きほとに積りかはれよ簀の雪
 冬のつれとて風も跡から
 師の櫻むかし拾はん落葉哉
 薄を霜の髭四十一
 月夜すむ竹の曲糸琵琶澄て
 簾に鋪の聲を設けし
 洞鴨の石の古巢も冷ましく
 作らぬ松の雨にのびたる
 草鞋を印の塚に築きしより

〔一〕「葉」は「第」か
 〔二〕誤寫あらん、
 〔三〕「懸降る雪の
 月の白玉」か
 〔四〕「白石なる」誤
 寫ならんも未
 考
 〔五〕誤寫あらん
 〔六〕「夕べ忙しう」
 か

〔七〕四四、海くれ
 ての卷ウ折端
 二オ押立の句
 と大同小異な
 り
 〔八〕四四、海くれ
 ての卷ウ二句
 目三句目と大
 同小異なり

連句集

嵐の太郎熊狩に入る
 武かれと聲の心やためすらん
 破軍の誓ひ餅北に搗く
 日の颯ひ族を踊る果の國
 早苗はじめて得し實草
 世の愛を産みけん人の御粧
 懸降雪のうへの月しら玉
 曙の三味せん杖にすがりたる
 寄手を招く水曳の魔
 花を射て梢を船に贈りけり
 詩を啼く鴉柳みとりに
 不二の晴靨に雪を計り見る
 女に法を説く夜千年
 朝がほに髪結ふ人ぞ哀なる
 貧のやつれに萩の庭賣る
 犬捨る名残は露を吼えけらし
 馬塊三谷の楊貴妃の秋
 誰か國の記念ぞ鏡すむ月は
 琴の唱歌に作り艶れて

山蕉 因行 蕉山 行因 山蕉 因行 山蕉 因行 山蕉 因行 山蕉 因行 山蕉 因行

五六 附句一〇 (春と秋)

美人を拜むかけろふの奥
 爽の聲なき蝶と身を泣いて
 一輪咲ける窓の芍薬
 碁の工夫二日とちたる目を明て
 其三
 翁 翁
 行因 山蕉 因行 蕉山 行因

(一六三) つくつ
くとの巻二オ
七句日八句日
と大同小異な
り

(一六三) つくつ
くとの巻二ウ
四句日五句日
と大同小異な
り

(一六四) 一葉集
に『書をよむ草
庵の内』とあ
り

(一六五) 二人は
『二人は』
『酒酌
て』

(一六六) 噴野
『噴野』員外
『一里の』巻に
『宮司か妻に
ほれられてう
き胡及』

(一六七) 一葉集
に『粥たく』
『熱田三歌仙』
には『山家』と
題せり

(一六八) 同
に『はこ
ぶもろつば』
『熱田三歌仙』
に『日の霞夜
銅の氣を知り
て、湖春』の第
三を添ふ

(一六九) 熱田三歌仙
に『日の霞夜
銅の氣を知り
て、湖春』の第
三を添ふ

打かつく前垂の香のなつかしく
君にもたれて酒買にゆく

其四

木の間へに星見ゆるかけ
宮守が油さげ行く華のおく

其五

ひとり書を見る草の戸の中
二町ほど西に礪のきこゆ也

其六

榎木の風の豆殻を吹く
寒き爐に住持はひとり柿むきて

其七

小僧一人ぞかしくまり居る
朝鮮の繪書に奈良の酒をくみ

其八

我戀は色紙を持つわらひより
宮司が妻に惚れられてわぶ

其九

すゝきを切て筥にふきけり

琴おふて鹿間に入る篠の隈

其十

住おもしろく椽のかゆ煮る
更科の里の礪を聞きに行く

貞享二年

五七 二句 (熱田三歌仙)

みやこにあそびて題秋風子之梅林

梅白しきのふや鶴を盗まれし

杉菜に身する牛二ツ馬一ツ

五八 二句 (春と秋)

楓の木の花に構はぬすがたかな

家する土をはこぶつばくら

五九 二句 (春と秋)

わか櫻鮎割く枇杷の廣葉かな

箕にうごく山藤の花

翁

翁

翁

翁

翁

翁

六〇 三句 (春と秋)

梅たえて日永し櫻いま三日

ひかしの窓の虫桑につく

巢の中に燕の顔の並ひ居て

六一 二句 (有耶無耶問)

からさきの松は花より臙にて

山はさくらを絞る春雨

六二 歌仙 (熱田三歌仙)

何とはなしに何やらゆかし董艸

編笠敷て蛙聞居る

田螺わる賤の童のあたゝかに

公家に宿かす竹の中道

月くもる雪の夜桐の下駄上げて

酒のむ姨のいかにさびしき

双六のうらみを文に書つくし

琴爪をしむ袖のうつり香

湖 春 芭 蕉

芭 蕉 千 那

芭 蕉 叩 桐 端 蕉 葉

端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉

髪おろす侍従が娘おとろへて

野の宮のあらし妓王寺の鉦

虚樽に色なる草をかたげ添

藝者をとむる明月の關

おもしろの遊女の秋の夜すがらや

燈火風をしのぶ紅粉皿

川瀬ゆく鬘を角に結わけて

舍利とる瀧に朝日うつらふ

かしまる石の御坐の花久し

羽折に酒をかへる櫻や

歌よみて女に蚤おくりけり

枕屏風の繪に涙ぐみ

聞なれし笛のいろえの遠ざかり

三股の舟深川の夜

庵住やひとり杜律を味ひて

花かすかなる竹こきの蕎麥

いかに啼鳴は吹矢をおひながら

水汲小僧袖ひやゝかに

月明て打板山をへだつらん

葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉 端 蕉 葉

雲は夜盜の跡うづむなり
 村雨のそゞぎ捨たる馬の脊
 ひとつ鬼の瓜喰ふおと
 笠見ゆる人は菴にとちられて
 男やもめの老ぞ悲しき
 風くらき大年の夜の七つ聞
 御門をたゞく生鯉の奏
 常盤山常盤之助が花咲て
 霞に残る連歌師の松

六三 歌仙 (同)

つづく〜と榎の花の袖にちる
 ひとり茶をつむ藪の一つ家
 日影山野鶏の雛をおはへ来て
 清水をすくふ馬柄杓の月
 おもしろき野邊に断うる艸の上
 宿の土産に撫子をほる
 鼻紙に都の連歌書付て
 暮る大津に三井の鐘きく

東 閑 叩 芭 桐

雪を怪ぶ漁の姥が袖を見よ
 寝にゆく鴨の四五百の空
 松風の鬢に酒を飲盡し
 佛をきざむ西谷の僧
 烏羽玉の髪きる女夢に來て
 戀を見破る朝がほの月
 秋は猶只旨き物くらひけり
 白子の太夫我霧の海
 浪よする鯨の骨に花栽て
 陰ほす於期のかつらはふ道
 笠持て霞にたてるやせ男
 五重の塔のほとり夕ぐれ
 鶴鶴の尾を蜘蛛の圍に掛られて
 風に身を置くけふの討死
 筆とりて朴の廣葉を引挽め
 田舎祭りに物見をめたる
 打かつぐ前だれの香をなつかしく
 たはれて君と酒かひに行
 白がねの鉢に鮎およがせて

桂

山 葉 蕉 藤 水 端 藤 山 葉 蕉 端 桐 蕉 葉 蕉 桐 葉 蕉

〔一〕熱田三歌仙
 此巻の次に
 『右蕉翁眞蹟
 在春雨巷』
 〔二〕一葉集に
 『同日』と前書
 あり
 〔三〕一葉集に、
 『黄口』に、
 〔四〕同書に『工山』
 〔五〕同書に『翁』
 〔六〕同書に『端』
 〔七〕同書に『風
 のひいき』作
 者は『口』

〔一〕ゆめのあと
 に『を』字なし
 〔二〕ゆめのあと
 に『枯柳』
 〔三〕同書に『さか
 やき寒き』

おほん歸京の時を占ふ
 韃靼の東の寺の月凄く
 猿手の粟の何をまねくぞ
 蟬啼てまた澁柿の秋の空
 草家かすかに馬の尾の琴
 哀なるのり物焼て歸る野に
 入日の跡の星ニツみつ
 宮守が油さげつも花のおく
 つゝじのふすま着たる西行

六四 歌仙 (一葉集)

牡丹蓋を深くはひ出る蝶の別哉
 朝月涼し露の玉銚
 歌袋望みなき身に打かけて
 たま〜膳について箸とる
 新家根になじまぬ板の雨零
 二百ちがひに馬の落札
 たぶさ引跡は小聲の男同士
 涙に濁る池の人かけ

叩 桐 芭

山 藤 端 蕉 山 藤 葉 蕉 桐 蕉 端 葉 蕉 葉 蕉 端 葉 蕉

竹鋒のするとき月の夕風
 茶の實こきゆく牛の嘯
 年ふりて吾妻祭りの關が原
 かちんのくゝり高き宿老
 うすぐらき簾にはさむ紙の屑
 硯のはらの合ぬひら筆
 くり〜とさめたる酒の酔心
 谷眞風をかつぐ舟の眞下り
 花散りて近き見こしの角矢倉
 燕の泥を落す肩衣
 出代の腰にさげたる持草履
 午時の日あしに過る風空
 地雷火に逆立浪の赤走り
 鷺の嶋を替る枯柳
 僧正の天窓の寒き簀子縁
 わすれて焦す飯の焚しり
 お茶壺の雨にむかひて扇敷
 旅の乞食の奢る小處
 物賣の袂へおろす上郡

端 葉 蕉 端 葉 蕉 端 葉 蕉 端 葉 蕉 端 葉 蕉 端 葉 蕉 端 葉 蕉 端 葉 蕉